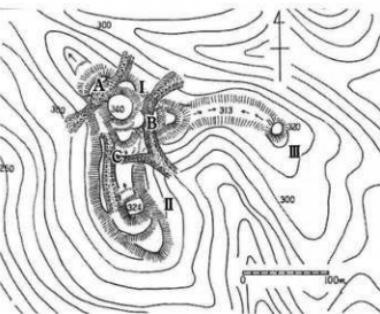


3 主な城館跡と城館関連遺跡

かみのみやたであと
0001 上野宮館跡 大子町上野宮 現況：山林 別称：金藤城、金藤氏館 地図3

大子町上野宮の宮本地区にある近津神社北西部の標高 330m、比高 140mの尾根上に築かれている。尾根先端のピーク部Ⅰが館の主郭部分にあたり、そこから3つに分岐する尾根に対し、AからCの3つの堀切が築かれている。南に延びる尾根先端のピークⅡは物見台であったと考えられる。東側のピークⅢも城域と推定されるが、その痕跡は確認できない。北西方面の尾根からはそのまま八溝山へとつながっている（以上『続茨』）。

『新編常陸国誌』によると、上野宮館の城主は金藤氏であった。天文7年（1538）の八溝山下之坊鐘銘には、鐘の铸造に関わった人物の一人として「金藤掃部助」の名前が見え、遅くとも16世紀前半には、金藤氏が八溝山麓に拠点を置いていたことが確認できる。本館が置かれた黒沢村には、16世紀前半には深谷氏、16世紀後半には荒蒔氏が基盤を置いており、金藤氏が両氏と関係を持ちつつ、地域の領主として存在していたと考えられる。（藤井）

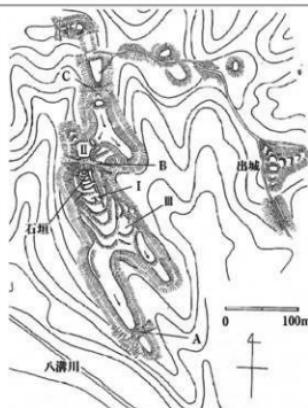


上野宮館跡縄張図 青木義一 2008.3.9 (『続茨』より転載)

あらまきじょうあと
0003 荒蒔城跡 大子町田付 現況：山林 地図3

荒蒔城は、町付城西側から700mほどの山中にある。山の尾根を利用する形で城郭が築かれ、城域は南北400mに及んでいる。主郭部分の高さは、城南西部を流れる八溝川から70mほどとなっている。主郭から南に9つの曲輪が存在し、高さ8mの堀切Aが曲輪の南端部分にある。主郭部分の北側下には、25m四方の曲輪IIが存在し、その東側に虎口が存在している。主格が存在する尾根の東側にも、出城が築かれている（以上『改茨』）。

荒蒔城の城主は荒蒔氏であったと伝わる。荒蒔氏はもともと小里（現常陸太田市）に拠点を置く岩城氏家臣であったが、永禄元年（1558）には黒沢村に居住していたことが確認できる（高徳寺所蔵「涅槃図」裏書）。城の麓には、「陣場」という地名が残されており、天文年間中期に行われた佐竹義宣による黒沢攻め（藤井2018）の際に武茂氏が陣を置いた場所と伝わっている。（藤井）



荒蒔城跡縄張図 青木義一 2005.4.2 (『改茨』より転載)

まちつきじょうあと
0004 町付城跡 大子町町付 現況：畠地、宅地 別称：獅子城

地図 3

町付城は、八溝川からの比高 35m の台地東端部に位置しており、北を中郷川が流れている。6つの曲輪で構成されている。一番面積が大きいのが曲輪 I で、東西 100m、南北 80m ほどの曲輪の北と西に、幅 12m の堀跡が残されている。曲輪 V の方面は、八溝川と中郷川の合流地点に向けて伸びた半島状の地形となっており、物見台が置かれたことが想定される（以上『続茨』）。

白川氏臣である深谷氏が町付城の城主であった。深谷氏は 15 世紀後半の頃には史料上存在が確認でき（「八槻文書」、天文 7 年（1538）の「八溝山下宮坊鎌銘」）にその名前を見せていている。竹貫別当配下の山伏が深谷氏に殺害されるという事件も発生しており（「八槻文書」）、深谷氏が観音靈場である八溝山への交通路を管理していた可能性が考えられる。天文年間後期に佐竹氏による黒沢攻めが行われた後、深谷氏は町付の地を離れたよう（藤井 2018）、その後荒蔵氏の影響下のもとで本城も利用されたことが想定される。（藤井）



町付城跡縄張図 青木義一 2005.4.2 (『続茨』より転載)

さぬきだてあと
0005 左貫館跡 大子町左貫 現況：山林

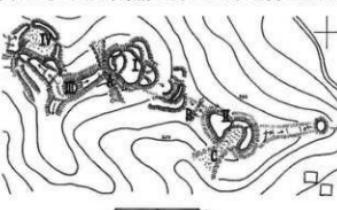
地図 8

大子町左貫を流れる初原川の右岸標高 290m、比高約 70m 地点にある城館である。館のある山には、東西に長い約 400m の尾根が伸び、3 つの部分に遺構が分かれている。

東端の曲輪 II は、直径が約 50m で、南側が開き、歎堀状 C が展開している。その北西にある曲輪 I との間には半月状の堀 B や横堀、曲輪が確認される。曲輪 I は長さ約 30m、幅約 20m の広さがあり、西端に土壇と深さ約 5m の土橋を持つ堀切 A がある。土橋の先は尾根が西側に続き、末端に物見台のようなピーコック III があり、その先には直径約 40m の周囲を土塁に囲まれたクレーター状の構造を持つ曲輪 IV が存在する（以上『茨 3』）。

本城の城主は、町島氏であったと伝わる。藤原秀郷の流れをくむ町島氏は、那須町島を名字の地としてそこに水口城を築いていたが、明応 3 年（1494）に大田原康清に攻められ、左貫の地に逃れてきた。左貫は、依上保内でも西端に位置し、那須方面とも人や物の往来が活発であったと考えられる。依上保の大部分が白川氏の統治下にあった 15 世紀後半でも、鍬柄村

（左貫地域の古名）は「佐竹領」であったとの記録がある（「花室神社棟札」）。伝承に信を置くと、町島氏は大田原氏との抗争の中で、佐竹領であった鍬柄村に移り、拠点を置くこととなったのであろう。（藤井）



左貫館跡縄張図 青木義一 2008.3.9 (『茨 3』より転載)

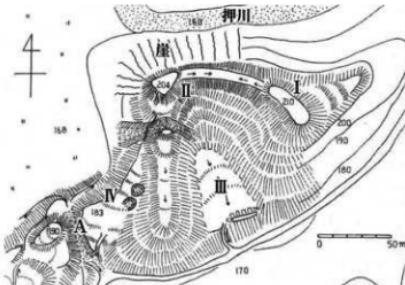
かまくらだてあと
0006 鎌倉館跡 大子町上金沢 現況:山林

地図 8

国道 461 号線から黒羽方面に向かう県道 13 号線が高内三叉路で分岐する地点南の押川沿いの断崖絶壁上にある城である。鎌倉館は周囲から独立した東西約 150m、南北約 100m の山に立地しており、その最高地点の標高は 210m、押川からの比高は約 40m となっている。

山の最高地点かつ館の東端地点である平坦地 I とそこから西側の尾根沿いに続く地点に平坦地 II が存在している。両地点から馬頭・黒羽方面への眺望はよく、物見、狼煙台として使われた可能性が高い。平坦地 I・II をつなぐ尾根及び平坦地 II から南に続く斜面に開まれた平坦地 III は、広さもあり、居館跡として利用された可能性が考えられる。平坦地 II から西に下がった所には、約 60m × 約 40m の平坦地 IV があり、西側を横堀 A で区画している（以上『続茨』）。

鎌倉館に関わる文献資料は見当たらず、城主の情報は得られない。ただし、その立地を踏まえると、敵方の通行を監視する役割を持つとともに、近隣の城館と連動して利用された可能性が考えられよう。（藤井）



鎌倉館跡縦張図 青木義一 2008.1.26 (『続茨』より転載)

はちまんじだてあと
0007 八幡館跡 大子町上金沢 現況: 山林、畑地 別称: 御城

地図 8

押川と相川に挟まれた山地の北側の尾根の一つに立地する城館である。最高地点の標高は 165m、比高は約 60m である。

主郭に相当する山頂部の曲輪 I は径約 30m の大きさであり、周間に腰曲輪と曲輪 II が展開する。その南側、相川方面に続く尾根筋は堀切 A・B・C によって遮断されている。北斜面中腹には、約 70m × 50m の平坦地が広がっている（以上『続茨』）。

八幡館の城主は大塚大膳であったと伝わっている（「水府志料」）。大塚大膳は、下金沢の十二所神社の永禄 6 年（1563）銘のある棟札に名前が出てきており、八幡館周辺に基盤を置いていたと想定されるが、詳細は不明である。

本館は、国道 461 号線沿いに密集する城館の中でも最大規模を誇るもので、近隣地域において中核的な城として機能した可能性が考えられる。（藤井）



八幡館跡縦張図 青木義一 2008.1.26 (『続茨』より転載)

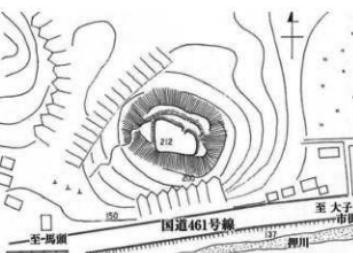
めぐらだてあと
0009 女倉館跡 大子町下金沢 現況：山林 別称：目黒山

地図 8

大子町立依上小学校の西に聳える標高 210m、比高 70m の急勾配のドーム型の岩山が女倉館である。館の南側に押川が流れている。

頂上部の曲輪は東西約 50m、南北約 30m の三角形をしており、内部は平坦で、東側と西側が一段低くなっている。曲輪北川に虎口が確認でき、その北側に 2段の腰曲輪が確認できる（『続茨』）。

女倉館は目黒館ともされ、古の要害の地であり、戦争の地であったと伝えられている（『常陸紀行』）。正宗寺所蔵「佐竹氏系図」の宇留野氏の項には、16世紀前半の人物である宇留野四郎の所に「依上ノ女倉ニテ討死」と記され、実際に戦闘があったことが確認される。同時期に女倉館で発生した戦争については、永正 13 年（1516）の繩吊合戦直後に行われた、宇都宮忠綱による常陸侵攻が該当すると考えられる。忠綱が上那須方面から月居城まで軍勢を進める道の途中に女倉館が位置し、その侵攻に対峙する形で戦争が行われたのであろう。この点を踏まえると、女倉館は、依上保・那須間を通る道を監視する物見台として利用されたのであろう。（藤井）



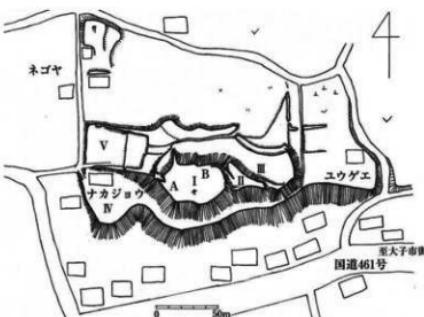
女倉館跡縄張図 青木義一 2008.1.26（『続茨』より転載）

よりがみじょうあと
0012 依上城跡 大子町境 現況：山林、畠地、宅地 別称：御城

地図 8

押川北部の台地上にある城郭である。南北最大 8m、東西最大 30m の曲輪 I が主郭となっている。曲輪 I の東西にはそれぞれ虎口があり、その東側虎口の先には曲輪 II と平坦地皿が続いている。曲輪 I 西側に広がる平坦地 IV には「中城」の地名が残り、ここも城内の一部として利用されていたことがうかがえる。城北西部には「根小屋」地名が伝わり、近くに家臣団集住地が存在していたことがうかがえる（『続茨』）。

本城の城主は佐竹山入氏一族である依上宗義であったと伝わっている。依上城は、応永 30 年（1423）、同 35 年の二度にわたって、鎌倉公方足利持氏方の攻撃を受けており（「東京大学白川文書」、「溝井文書」等）、その結果依上氏は没落している。その後の状況については判然としないが、戦国期には依上城が立地した場に武茂氏家臣の北条伊賀守がいたと伝わっており（「水府志料」）、戦国期にも何らかの形での利用が続いているものと思われる。（藤井）



依上城跡縄張図 五十嵐雄大 2014.12（『続茨』より転載）

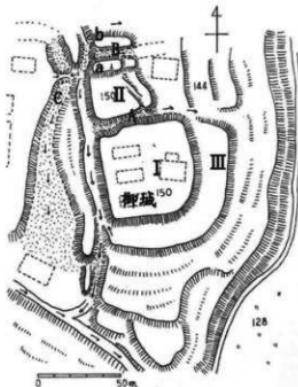
あしのくらじょうあと
0014 芦野倉城跡 大子町芦野倉 現況：山林、畠地、宅地

地図 8

大子町中心部から国道 461 号線を西に約 2.5km 進んだ地点にある。押川と初原川の合流地点に西側から張り出した台地上の先端部分に立地している。

主郭 I は約 60m 四方の大きさとなっており、この部分には「御城」という字名が残されている。主郭の東南二方向を囲うように幅約 12m の腰曲輪 III が配置されるとともに、西側にも通路状の腰曲輪がまわっている。西側腰曲輪の先には、自然の谷津を利用したと思われる堀 C が確認される。主郭 I 北側には堀切 A が掘られ、その北側には約 30m 四方の曲輪 II がある。曲輪 II の北側には、a、b 2 つの土塁が確認でき、その間に堀 B が残っている（以上『茨 3』）。

芦野倉城の城主についての確実な記録は無いが、本城から西側にある戸中坪に居館を構えた木澤氏と何らかの関係があったものと思われる。本城と初原川を挟んで対岸に位置する高岡城同様に、交通の要衝に位置する城である。（藤井）



芦野倉城跡縄張図 青木義一 2018.8.17 (『茨 3』より転載)

たかおかじょうあと
0016 高岡城跡 大子町上岡 現況：山林

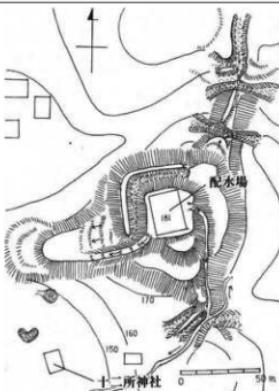
地図 8

大子町上岡地区にある十二所神社東の標高 180m、比高約 40m の山に立地している。直径約 80m を城域とする、小規模な単郭構造の城館である。

主郭部分の周囲には横堀が回っている。主郭から続く北側の尾根筋には 2 本の横堀があり、尾根を通じての敵の侵入を阻んでいる。横堀は、南側の登り口方面にも築かれている。主郭から西側に下りた部分に平坦地が広がっている（『続茨』）。

高岡城が立地する場所の西側及び南側は開けた土地となっており、武茂方面から大子に向かう道と黒羽・左貫方面から大子に向かう道が交わる場所に高岡城は存在する。このことから、本城は大子宿方面につながる道を監視する役割を担った城であったと考えられる。

「美ち草」には、高岡城の城主は高岡八郎であるとの記載が見られるが、それ以上具体的な情報を伝える資料は残されていない。（藤井）



高岡城跡縄張図 青木義一 2008.2.17 (『続茨』より転載)

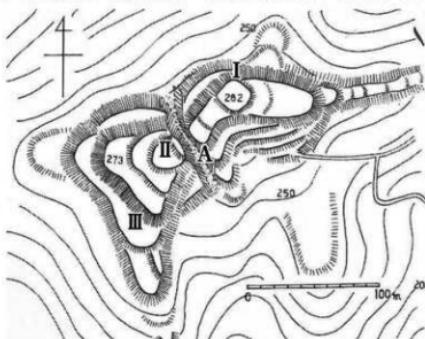
0018 大子城跡 大子町大子 現況:山林

地図 8

JR 水郡線常陸大子駅の南側にある標高 282m、比高約 200m の山上にある城郭である。城域は 200m × 100m 程度で、城山の南部には近世南郷道が通っており、保内地域を通る主要道沿いに位置していた。本城の東西には、太田・岩城方面から那須方面へと抜ける道が通っており、2 つの主要道が交錯する地点という交通の要衝に占地されていたのである。

城は北側の曲輪 I と南側の曲輪 II の南北 2 つの部分からなり、深さ約 5 m、幅約 13 m の規模を持つ堀 A で区画されている。曲輪 II の南西下には曲輪 III が位置している（『続茨』）。

大子城は、芳賀河内守による築城が行われた後、白川氏、岩城氏、佐竹氏と保内地域の領主の変遷を受けながらも存続していたと伝わっている（「常陸紀行」他）。佐竹氏が保内の地を確保してから、本城は廃止となっている。（藤井）



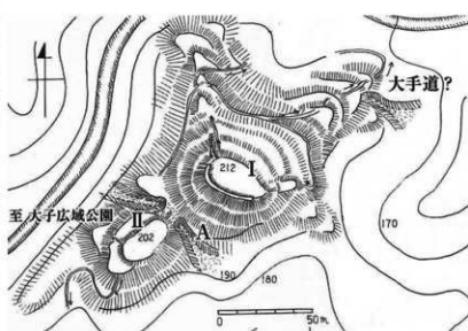
大子城跡縄張図 青木義一 2005.2.11 『続茨』より転載

0019 矢田城跡 矢田町矢田 現況:山林

地図 8

大子広域公園内の一隅にある矢田城は、公園東側の久慈川の平地を望む標高 212m、比高約 70 m の高さの山の上にある。比較的規模の小さい城郭で、狼煙台として使われた程度のものであったと考えられる。城の東側を南郷道と久慈川が通るという立地から、保内地域を南北に抜ける交通路を扼する役割を果たす城郭であったと想定される。

城の中心となる曲輪 I は縱 35m、横 17m ほどの広さを持ち、北東側、北側へは 2 本の尾根がつながっている。北東側から伸びる尾根筋が、城の大手道にあたると考えられる。曲輪 I の南西側には、縱 30m、横 10m ほどの曲輪 II が位置し、その南側と西側には腰曲輪が付属している。両曲輪の間には、幅 10m の堀切 A が掘られている（『続茨』）。（藤井）



矢田城跡縄張図 青木義一 2005.3.18 『続茨』より転載

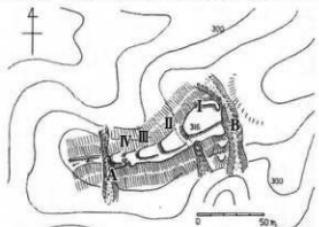
うちおおのがであと ようがいあと
0020 内大野館跡・0021 同要害跡 大子町内大野 現況：山林 地図9

大子町生瀬の内大野には、道を挟む形で内大野館・内大野要害の2つの城館が存在している。

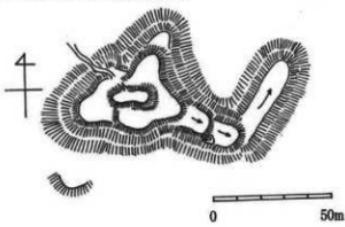
内大野館は、実相院の北東部の山中、標高 316m 地点に位置している。山の裾野の西側には、「堀ノ内」という地名が残り、内大野館に対する居館の存在が想定される。館は直線連郭式であり、東西に深い堀切 A・B を置き、内部を曲輪 I～IV の4段に区画した構造となっている(『続茨』)。

内大野要害は、内大野館東側の標高 371m の山中にある。山頂部を削平し、その3方向に張り出す尾根に突き出し幅 13～15m の3つの曲輪を配置した構造となっている(『茨3』)。

両城館の城主について確たる伝承は伝わっていないが、内大野にある十二所神社の中世の棟札に名前を見せる斎藤氏であった可能性が考えられる。両城館はともに内大野集落を押さええる形で立地し、内大野村の領主との関わりの中で使用されたのであろう。(藤井)



内大野館跡縄張図 青木義一 2016.1.6
(『続茨』より転載)



内大野要害跡縄張図 青木義一 2008.2
(『茨3』より転載)

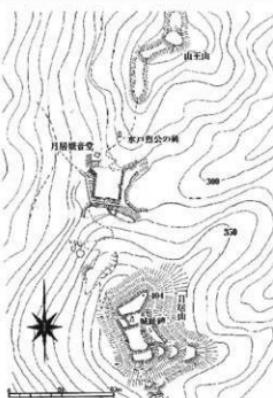
つきおれじょうあと
0022 月居城跡 大子町袋田 現況：山林 別称：袋田城 地図9

月居城は標高 404m の月居山上に築かれた山城である。

遺構は、月居山頂に3～4段の削平地が残るばかりで、堀切や豊堀、土塁などは確認されていない。

月居山は、江戸時代には「東浜魚荷の道」と呼ばれた(『新編常陸国誌』)、常陸海岸部から下野方面へと浜荷物を運ぶ道が通っており、常陸と下野をつなぐ道沿いに城が築かれていたことがわかる。

月居城は、もともと 15 世紀中期に佐竹一族山入氏から分かれた袋田氏によって築かれたと伝わる。佐竹氏が上那須方面への出兵を繰り返していた永正年間(1504-21)には利用されていたことが史料から確認でき、同 13 年には、宇都宮忠綱による攻撃を受けている(『佐八文書』、「秋田藩家文書」3・8・15・45)。それに対応してか、近隣の佐竹氏麾下の武士による在番も行われている。16 世紀中盤頃には、野内氏の居城となっており、野内氏は月居(折)氏とも呼ばれている。(藤井)



月居城跡縄張図 本間朋樹(『改茨』より転載)

いけだふるがであと
0023 池田古館跡 大子町池田 現況：畠地

地図 8

大子町池田地区を通過する国道 118 号線沿いにある城館である。館の西側を久慈川が流れおり、久慈川の河川交通とも関係の深い城館であったことが想定される。

本館に基盤を置いた領主についての確たる記録史料はないが、天文 5 年（1536）に池田村の内に所領を宛行された滑川六郎や斎藤藤兵衛が候補として考えられている（『水府志料』）。また、永正 14 年（1517）に閑彦三郎に宛行された池田の桜岡屋敷が本館に当たるという見解も出されているが（『水府志料』）、確実なことはわからない。ただし、閑彦三郎は桜岡屋敷とともに大子北宿の地も宛行されており、交通の要衝であった大子と桜岡屋敷は交通支配の点で関わりがあったと想定され、久慈川沿いに立地する本館は桜岡屋敷であったと見ても大過ないだろう。

館は久慈川からの比高約 20m の段丘上に位置し、東西約 70m、南北約 50m の規模を持つ。北側には幅約 12m の堀跡が残り、現在は湮滅しているが、東側と南側にも同様の堀跡が周囲を覆っている（『続茨』）。（藤井）



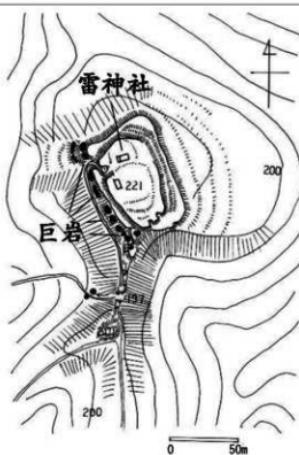
池田古館跡縄張図 青木義一 2005.2.11
（『続茨』より転載）

かがみじょうあと
0024 鏡城跡 大子町池田 現況：山林 別称：鏡山城、池田城、御城

地図 8

久慈川東岸の標高約 220m、比高約 80m の鏡山山頂にある城館である。雷神社が置かれた山頂の主郭部は、東西約 70m、南北約 40m の広さを持ち、中央部がやや盛り上がりしている。東側約 5m 下にも曲輪が確認される。全体的に山頂部を除き、自然地形をそのまま城郭として使用したものである（『茨 3』）。

『新編常陸国誌』には、近津神社神主である藤原富得が築き、その子孫である下野守尊憲が佐竹義篤に属し、天文 16 年（1543）に白川氏の攻撃で落城したと記されている。鏡山には、八溝山の鬼退治の伝承も伝わっており、八溝山麓の近津神社の信仰圏と何らかの関わりのある山だったと想定される。天文 16 年頃には、佐竹氏と江戸氏の対立が始まり（『水府志料附録』）、翌年には白川氏と江戸氏が同盟を結んでいることから（『早稲田大学白川文書』）、天文 16 年の白川氏による鏡城攻撃の伝承は、実際に戦闘が行われた可能性を示唆している。（藤井）



鏡城跡縄張図 青木義一 2005.2.11（『茨 3』より転載）

てんじんやまじょうあと
0025 天神山城跡 大子町南田気 現況：山林 別称：天神山館

地図 8

大子町南田気の久慈川右岸にある王子神社南西部の標高 182m、久慈川からの比高約 90m の山上にある。

曲輪 I は、30m × 20m ほどの広さの主郭である。南部の曲輪 II 方面、南東部の曲輪 III 方面、北部の 3 方面に虎口状の遺構が残っている。曲輪 I の南側に位置するのが曲輪 II である。曲輪 I の北、西に続く尾根上も曲輪であった可能性も考えられるが、きちんと平坦に加工されているわけではない。曲輪 II から東に下りると、径約 40m にもなる曲輪 III に出る。曲輪 III は尾根に囲まれた窪地のような地形となっている（『茨 3』）。

本館は、久慈川蛇行地点に張り出す場所に位置している。立地条件から、大子宿から月居城方面へと向かう交通路および久慈川水運を監視する役割を果たしていた館のように思われる。城主などに関する伝承は存在していないが、田氣村に基盤を置く領主が関係していた可能性が高い。（藤井）



天神山城跡縄張図 青木義一
(『茨 3』より転載)

しもつはらようがいあと
0026 下津原要害跡 大子町下津原 現況：山林

地図 14

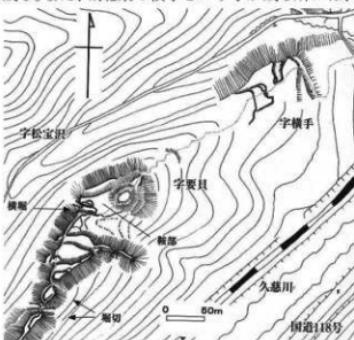
大子町下津原の久慈川右岸地点に位置する標高 246m の山頂に主郭を置いている城館である。東側には久慈川が流れ、それにつながる深い谷に西側を挟まれ、急峻な斜面が全体を覆っている。

主郭の北東方向には高さ 3 ~ 5m の切岸を伴った 3 段の曲輪を配置している。その東側にある鞍部との間には、幅約 3m、深さ約 2m の横堀が掘られている。主郭南側には幅約 6m、深さ約 3m の岩盤を断ち切ったような形の堀切が 2 本残る。また、城北東の横手という字が残る所には、虎口や堅堀を思わせる地形が見られる。

立地や構造から考えると、本要害は居住の場ではなく、詰めの城として利用されたものと想定される。（以上『続茨』）

城主についての伝承もないが、麓の下津原集落にある天正 4 年（1576）に月居城主である野内肥前守広忠等の名前が見えることから、下津原村にも勢力を及ぼした野内氏の影響下にあったものと考えられる。下津原より南側はしばらく急峻な地形が続くことから、野内氏領の南側を扼るために構築されたものであったと考えられる。

（藤井）



下津原要害跡縄張図 高橋宏和 (『続茨』より転載)

こうふにじょうあと
0028 頃藤城跡と周辺城砦群 大子町頃藤 現況: 烟地、宅地ほか 地図 15

大子町頃藤の久慈川蛇行地点には、複数の中世城館が点在している。

その代表となるのが、字・「御城」の地点に位置する頃藤城である。頃藤城は、久慈川蛇行地点の右岸部分に張り出した地点に占地され、西側の台地と陸続きとなる地点に堀を構えた要害である。半島状の地形の中心部分に約70m×約40mの方形の曲輪Iを置き、「御城」と呼ばれるこの場所が城の中心地点であったと考えられる。曲輪Iの西側には「中城」と呼ばれる曲輪IIが、東側には「下城」と呼ばれる曲輪IIIが配置され、曲輪I・IIの間には幅15mほどの空堀が掘られている。曲輪IIIの東側には腰曲輪が設けられている(『続茨』)。頃藤城の西側には戸門神社が置かれ、その脇を近世の南郷道が通っている。南郷道を南下すると、久慈川の渡し(小川の渡し)が存在しており、本城は水陸の交通が交わる要衝の地位に築かれていたことがわかる。

頃藤城から久慈川を挟んで南東側にある山の上には頃藤要害(0030)が築かれていた。頃藤要害はピーカーの地点を中心とし、東南、南西、北東の三方向に城郭が伸びている。北東方向の尾根沿いには堀切が確認される。頃藤城と対になる地点に置かれており、同城と連動するような形で利用されたことが想定される。

頃藤城から久慈川を超えた西側の地点のタラメキ坪には、方形居館である頃藤古館(0027)が立地している。遺構は崩されてしまっている部分も多いが、北・東・西の三方向に、高さ最大約4mの土塁と幅約4mの堀跡が築かれている。

頃藤城北側の天道山にも、山上に五段にわたる曲輪が築かれた頃藤天道山城(0031)(本書に絵図は未掲載)が確認される。ここには、北側に深さ約2mの堀切が残り、長福山から久慈川蛇行地点の平地へと下りる先端の地点に城が築かれたことがわかる。

以上のような頃藤の城砦群に領主として関わっていたのが、頃藤城主の小川氏である。小川氏は佐竹一族に連なる系譜であると伝え、16世紀後半には佐竹氏の南奥進出に関わって、寺山城などに在城していた。遅くとも16世紀初頭には頃藤の地に入っていたようで、頃藤西側の大沢地区の根渡神社の棟札には、「大旦那小河彈正左衛門種義」(永正5年(1525))、「大旦那小河民部少将義長」(天文18年(1549))と名前が見える。小川氏は佐竹家臣団の中の「保内衆」の中核となる武士の一人であったようで、地域の中では大きな存在感を見せていた。(藤井)



頃藤城跡縄張図 速山成一 2017.2.26 (『続茨』より
転載)



頃藤要害跡縄張図 五十嵐雄大
2016.12.1 (『続茨』より転載)



頃藤古館跡縄張図 五十嵐雄大
2016.12.1 (『続茨』より転載)

あいかわようがいあと
0032 相川要害跡 大子町相川 現況：山林 別称：御城

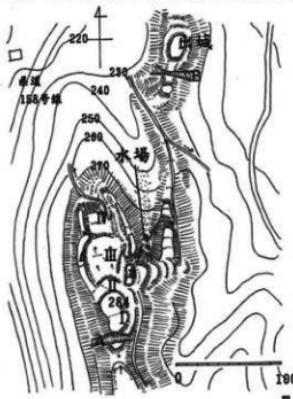
地図 8

相川上郷地区を通る県道 158 号線沿いに位置したのが、相川要害である。『新編常陸国誌』に野内氏の居館として紹介される相川館が近隣に置かれていた。その相川館の南約 500m 地点にある標高 284m の山に、相川要害は築かれた。

最高地点にあるのが曲輪 I で、東側に虎口が存在する。その南側には尾根が続いており、曲輪 I 南端部分に堀切 A がある。曲輪 I 周囲を覆うよう腰曲輪として設けられているのが曲輪 II で、その北側に本城で最も広い曲輪 III が位置する。曲輪 III とその北側の曲輪 IV の東西には a, b の土塁が築かれ、両側を土塁で囲まれたような構図となっている。また北側に延びる尾根上には出城となる平坦地が築かれ、その南側に堀切 B が見られる（『茨 3』）。

本城の城主や利用実態を示すような史料は残されていない。（藤井）

相川要害跡縄張図 青木義一 2021.2
(『茨 3』より転載)



あいかわよきいやくたあと
0033 相川寄居館跡 大子町相川 現況：山林

地図 8

相川上郷地区の北側入口付近にある城である。県道 183 号線の東側にある標高 271m の山上に位置している。城の西側には相川が流れ、その先に越方神社が位置している。

館がある山は勾配が急ではあるが、山上は比較的平坦で広く、2 ~ 4 m の段差で、徐々に曲輪が造成されている。しかし、段差は曖昧であるため、曲輪の形は把握しづらい。曲輪状の区画が確認される城域は、南北約 150m、東西約 100m の規模を誇る。館の中心部には堀切状の仕切りがあり、そこから南北の尾根沿いに城域が広がる形となっている。館の北東の小山には、出城と考えられる、約 20m × 10m の平坦地が築かれている（『茨 3』）。

本館の詳細について語る史料は残されていないが、相川上郷地区の入り口を扼する立地から、交通監視のために利用された可能性が考えられる。近くの相川要害や相川館とも連動して機能したのであろう。（藤井）

相川寄居館跡縄張図 青木義一 2021.2 (『茨 3』より転載)



まちつきむかいであと おおくまとりであと
0034 町付向館跡・0035 大草砦跡 大子町町付・中郷 現況：山林 地図3

大子町黒沢地区に築かれた町付城は、近隣の荒廃城とともに、同地区的地域支配の中心地となつた。町付城を挟むような形で、南側に町付向館が、北側に大草砦が設けられている。

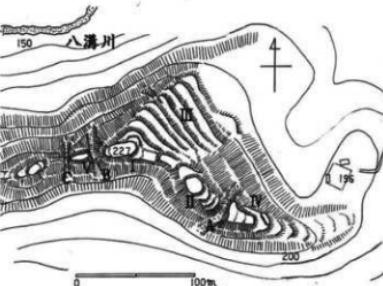
町付向館は、町付城から八溝川を挟んで南側の標高227m、川からの比高約80m地点に設けられた城館である。川に面する北側は崖であり、南側も急勾配である。

城の南東部には4つの区画からなる曲輪IVが存在し、その西端に幅約3mの堀切Aが築かれている。堀切A西側から3段の小曲輪を経て径約15mの曲輪IIに至り、そこから約40m西に縦20m、横10mの曲輪Iがある。曲輪Iの西側の尾根には2本の堀切（東側から堀切B、堀切C）が掘られ、その間の尾根上の平坦地が曲輪IVである。曲輪IとIIの間に北東側斜面は段々状の帶曲輪群IIIが存在し、10ほどの曲輪が確認できる（『茨3』）。

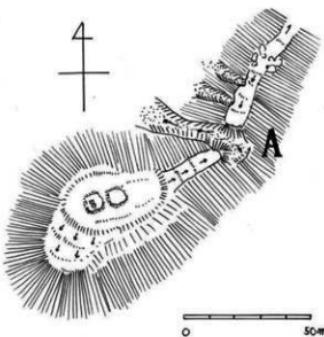
町付向館の曲輪Iから町付城内を一望することができ、本館の性格は町付城攻撃のための向城であった可能性が考えられる。町付城近隣が戦闘の舞台となつたのは、天文10年（1541）から13年の頃の佐竹義宣による黒沢攻撃の時である（藤井2018）。この時、義宣は町付城に挺る深谷氏を攻撃したと考えられ、「水府志料」によると深谷伊豆守秋広の居城である町付城が、武茂城主某の手により落城している。町付向館の麓には、「もも（武茂）の平」という地名が残り、同年の戦闘の際、武茂氏が本館付近に陣を置いていたと想定できる。

一方、町付城から2kmほど北にある標高337mの「旗鉢山」に立地しているのが大草砦である。旗鉢山は、東に吉沢川、西に中郷川が流れしており、山の南端にて両川が合流している。大草砦の置かれた場所は、中郷川からの比高約160mの高さとなっており、町付城が見える位置にある。この立地を踏まえると、大草砦も町付向館と同様、町付城攻撃の際に作られた付城としての性格を持つものであったと考えられる（『茨3』）。

大草砦に関わる痕跡は少なく、山頂付近の約40m×20mの平坦地の北東側の尾根に、深さ約2mの堀切Aがあるばかりである。全体的に簡素な作りであり、戦闘に伴う一時的な付城としての利用が想定されるものであったのであろう。（藤井）



町付向館跡縄張図 青木義一 2019.4.2
(『茨3』より転載)



大草砦跡縄張図 青木義一 2019.4.2
(『茨3』より転載)

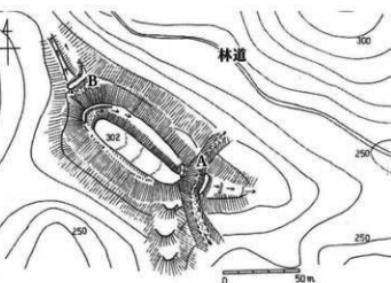
0036 戸中要害跡 大子町芦野倉 現況：山林 別称：リュウガイ

地図 8

大子町芦野倉村の戸中地区の北西部の山中に位置している城館である。標高 302m のピーク部分が城館となっており、戸中地区からの比高は約 120m である。

単郭の城であり、主郭は長さ 60m、幅 13m の小規模なもので、北から東にかけて幅 4m の帯曲輪が存在している。南北に巨大な堀切 A・B があるのが特徴で、深さが約 7~8m、天幅は約 20m ある（『続茨』）。

戸中要害の利用に関する史料は確認できないが、「水府志料」『新編常陸国誌』によると、戸中の地には木澤氏の館が置かれていたと伝えられている。木澤氏は芦野倉村にあった慶福寺の永享 8 年（1436）の棟札（『水府志料附録』）にも名前を見せており、芦野倉地区一帯に勢力を扶植していた。本要害についても、木澤氏の館と連動する詰めの城であったと考えるのが適当であろう。（藤井）



戸中要害跡縄張図 青木義一 2016.2.2 (『続茨』より転載)

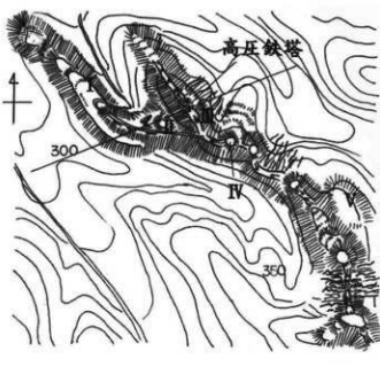
0037 長崎要害跡 大子町下野宮 現況：山林 別称：ゆうがい山

地図 9

大子町下野宮東部の長崎地区東の標高 351m の山の頂にある城郭である。周囲の長崎地区からの比高は約 70~100m である。

現在鉄塔がある所から西に延びる尾根の先端部の標高 313m 地点が平場 I である。その西側にも 2 段の小曲輪 II が存在している。要害を貫く細い尾根筋上、現在鉄塔が立っている場所が III である。III には祠があったと伝わっているが、現在は鉄塔によってその存在が確認できない。また、尾根沿いにピーク IV とやや平坦な場所である V も見られるが、はっきりと曲輪であると言い切れるほどの痕跡は無い。また、尾根筋にも明確な堀切の跡は確認できない（『茨 3』）。

要害は、近津神社の門前である下野宮と生瀬地区の大野村を結ぶ位置に立地しているが、近隣に城館遺構は確認されていない。他の城館との関係性はよくわからないが、少なくとも街道管理の城として使用されたものであったと考えられる。（藤井）



長崎要害跡縄張図 青木義一 2009.1.13 (『茨 3』より転載)

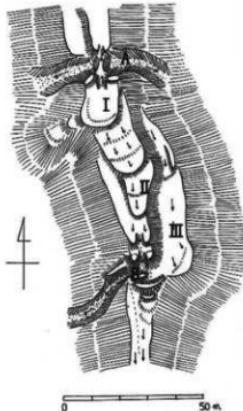
さぬきようようがいあと
0038 左貫要害跡 大子町左貫 現況：山林

地図 3

大子町左貫の北部の後場地区北の標高 565m の戸屋山から南に延びる尾根の末端部近くにある。城は南北に延びる尾根を利用した簡素な造りであり、標高 350m から 360m にかけて全長が約 110m、幅約 20m の尾根に遺構が広がっている。後場地区からの比高は約 70m となっている。域域の北端部に堀切 A が、南端部に堀切 B が掘られている。

曲輪の内、最も広く整備されているのが北端の曲輪 I であり、この部分が主郭であったと考えられる。そこから南側に曲輪 II が展開するが、内部は緩斜面となっており、整地は不十分である。曲輪の東側には帶曲輪 III が細長く展開しており、その南側の部分は堀切 B に合流する形となっている（『茨 3』）。

城の性格に関わる伝承や文献資料は残されていないが、黒沢村と鎌柄村（左貫村）とを結ぶ街道を監視するために使用されたものと考えられる。（藤井）



左貫要害跡縄張図 青木義一 2018.4.1（「茨 3」より転載）

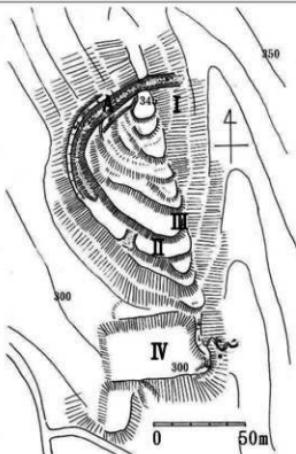
さぬきはなじうようがいあと
0039 左貫花室要害跡 大子町左貫 現況：山林

地図 3

大子町左貫の花室神社から初原川を隔てて北東約 500m の標高 345m、比高約 50m の山にある。東側は急斜面となっており、遺構は確認できない。

本要害に特徴的なのは、要害北端の堀切から、要害西へと下る堅堀 A である。堀切は深さ約 3m、幅約 7m ほどの規模ではあるが、堅堀部分となると深さ 4m を超える大規模なものとなる。堅堀は西側へと周り、途中で曲輪 III を囲む、幅約 9m の腰曲輪 II となる。腰曲輪 II から南側へ下りると、約 20m × 50m の平坦地 IV が存在する。主郭 I と曲輪 III は良く削平されているが、それ以外の部分は自然状態に近い状況で、十分な加工が施されていない。

本要害の城主は、近隣の鎌柄村に基盤を置いた吉成氏（「吉成文書」）であったと考えたい。佐竹領と那須領の境目の城として築かれたようだったのである。（藤井）



左貫花室要害跡縄張図 青木義一 2022.4.23

まぬきくりのくちようがいあと
0040 左貫栗ノ口要害跡 大子町左貫 現況：山林 別称：ゆうげい山 地図8

大子町立さはら小学校の西約1kmにある標高343m、比高約100mのお椀を伏せたような形状をした山、「ゆうげい山」が城跡である。城域は直径約70mの小規模な範囲ではあるが、山の斜面が急であり、曲輪間の段差が6~7mほどにも及ぶ。

山頂の約15m×8mの楕円形の部分が主郭Iであり、西側が少し低くなっている。主郭Iの北側には腰曲輪が設けられ、その先は大手道と考えられる道が伸びている。大手道の途中には幅約5mの堀切Aが入っている。

主郭の約4m西下に曲輪IIIがあり、さらに約5m下の曲輪から北西に尾根が延びているが、遺構は確認できない。その一方、主郭の北東下には高さ約13mにかけて小曲輪が並ぶ。

城主や城の利用実態を史料上明らかにはできないが、近隣に多数存在する城館との関連の中で利用されたものと思われる。(藤井)



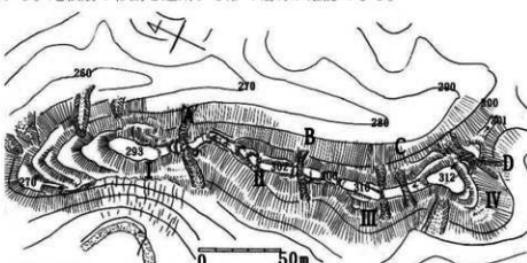
左貫栗ノ口要害跡縄張図 青木義一 2022.3.23

やざわようがいあと
0041 谷沢要害跡 大子町小生瀬 現況：山林 地図9

谷沢要害は、尾根を利用して直線連郭式の山城であり、全長約300mの規模を誇る、大子地域でも最大級の城郭である。曲輪は5つ確認され、幅約7mの腰曲輪が尾根に沿って高低差5~7mで重なり、曲輪間の切岸の勾配が鋭い。

Iの主郭にあたる曲輪は全長約40m、幅約6mの規模を持つ。Iの南端部に深さ約3m、幅約7mの土橋を持つ堀切Aがあり、豊堀が東西の斜面を下る。その東側に、曲輪II・III・IVが配置され、その境界部分には堀切BからDが設けられている。堀切Bには、曲輪II側に深さ約2m、幅約4mの土壠が存在する。尾根筋の移動を遮断する形で堀切が確認できる。

城主などについて
は詳らかではない
が、那須、太田、岩城
各方面に向かう道が
集まる要衝の地に位
置していることから、
そこを押さえる
要害として築かれた
のであろう。(藤井)



谷沢要害跡縄張図 青木義一 2022.3.10

ひしゅうようがいあと
0042 日照要害跡 大子町大生瀬 現況：山林

地図 9

大子町内大野地区から県道 33 号線を北西の下野宮方面に約 1.6km 行った地点の北側の山が城跡である。山は北から南に張り出した尾根であり、その先端部分の盛り上がった部分に城がある。主郭南側の谷津田状の谷部分に熊野神社が鎮座している。

主郭 I の標高は 320m、南側の県道からの比高は約 50m である。城域もあまり大きくなく、約 50m 四方に取まっている。

主郭から 4 方向に尾根が張り出しており、その 4 本とともに堀切 A～D が掘られている。堀切の深さは主郭側から約 3 m である。堀切の内側には、いずれも土塁 a～d が構築されている。北端の堀切 A から東側に下る堅堀は堅土塁を伴っている。

全体的に規模が小さく、居住に適さない構造であるため、物見または狼煙台として利用された可能性が考えられる。地域の口伝では、狼煙台であったとされている。

(藤井)



日照要害跡縦張図 青木義一 2022.2.9

ながくらじょうあと
0043 長倉城跡 常陸大宮市長倉 現況：山林、寺社境内地

地図 24

長倉城は、那珂川より北に 1 km、大沢川が複雑に浸食した標高 134m の山間部に所在する。

山地の最高所 I が主郭で「御本城山」の字名が残る。独立した山地の周囲は 6 段の帯曲輪と堅堀により守られた構造である。唯一、主郭山麓の尾根状に接続する IV は、近世において陣屋として利用された場所で、「館」「館旧庭跡」の小字が残る。IV の南側に土塁と枡形状の虎口 A がある。

文保元年（1317）、佐竹九代行義の三男義綱が、長倉氏を名乗り築城したことから始まる。応永 14 年（1407）に始まる佐竹の乱（山入の乱）では、3 回にわたり長倉城を舞台に戦いが行われている。明応元年（1492）には佐竹義舜および那須氏により攻略され、佐竹氏の支配下に置かれる。佐竹氏の秋田移封後の大子町内大野地区から県道 33 号線を北西の下野宮方面に約 1.6km 行った地点の北側の山が城跡である。山は北から南に張り出した尾根であり、その先端部分の盛り上がった部分に城がある。主郭南側の谷津田状の谷部分に熊野神社が鎮座している。



長倉城跡縦張図 須貝慎吾

のだこじょうあと
0044 野田古城跡 常陸大宮市野田 現況：山林、畠地、宅地 別称：野田城 地図 24

大字野田の田島集落の北側、山王山から続く比高約 110m の尾根上に、南北約 300m に渡り遺構が展開する。幅約 15m、長さ約 80m のくの字状の I が主郭にあたり、I から南東方向に階段状に II・III と曲輪が下っていく。各曲輪間は切岸で区切られ、隨所に虎口状の開口部がみられる。I の北側の尾根上には幅約 8 m の大規模な堀切を設けて城を独立させている。

稲葉三郎の居城という（「水府志料」）。城内には大井戸があり 100 日の日照りでも水が絶えなかったと伝わる。また『御前山村郷土誌』には、鐘楼跡や空堀、馬場の跡と思われる平場がみられると載るが、現在在るどの遺構を指しているのか不明である。永正元年（1504）の佐竹義舜安堵状では、高土橋（現大字野田小字高出橋）から西側が茂木氏に割譲されており、当城も一時期茂木氏の持ち城になっていたと推測される（茂木文書）。（山川）

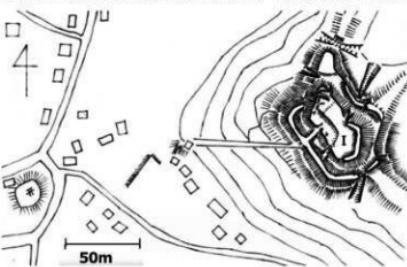


野田古城跡縄張図 高橋宏和 2016（『続茨』より転載）

ひやまようがいあと
0045 檜山要害跡 常陸大宮市檜山 現況：山林 別称：檜山古館 地図 24

御前山ダムから檜山川沿いに県道 291 号線を南下し、栃木県茂木町に入る手前、鬼渡神社の東側の山上に所在する。城は標高 174m をピークとする尾根の先端に築かれている。南北約 70m・東西約 30m の規模を持つ I のみの単郭構造で、I の内部は東西二段に分かれており、下段には虎口と土橋の遺構が明確に残る。また I の周囲は大規模な横堀と土塁で囲まれ、要所に堅堀を配している。

城が所在する檜山村は、中世には下野国東茂木保内林郷に属しており、南北朝期以降は概ね茂木氏が領していた。檜山村出身の土豪と思われる檜山氏は茂木家臣となり、当城を拠点にした可能性がある。それを裏付ける史料はないが、文明 4 年（1472）の小深片倉神社社札写には、大槻那茂木治興・治泰父子の下で、東茂木保政所として檜山豊前守朝増の名が見られるので、檜山氏が茂木家臣として一定の位置にあったことがわかる。麓の堂宇には 15 世紀の作と思われる懸仮が残り、同時期に城が機能していた証左と言える。（山川）



檜山要害跡縄張図 五十嵐雄大 2022.4.2

かわのべじょうあと
0047 川野辺城跡 常陸大宮市野口 現況：山林、畠地、宅地 別称：野口城 地図 24

川野辺城（野口城）は、県道21号線（大宮御前山線）と国道123号線の交差地点にあり、那珂川の河岸段丘上に所在する。主郭は「御城」と呼ばれる曲輪Ⅰと想定され、東西70m・南北130mの広さを持つ。主郭北側にかけて曲輪Ⅲ・Ⅳが尾根状に続き、ⅠおよびⅢの北側は、二重土壁と深さ10m以上の堀切が存在する。北側の尾根伝いの侵入を警戒した構造になる。対して南側「館」と呼ばれる曲輪Ⅱは、主郭の南麓に位置する台地である。東西200m・南北250mの広い面積を有し、家臣の居館地や兵站地として利用されたことが想定される。

正暦2年(991)に秀郷流藤原氏である川野辺氏の築城と伝わる。その後、応永元年(1394)に佐竹一族である佐竹義景が野口但馬守を名乗り、野口城に入城したとされる。後に佐竹宗家直轄の城となり、下那須氏（烏山城主）などの侵攻に備えた佐竹氏の兵站基地として使用されたと考えられる（大綱文書）。（須貝）

川野辺城跡縄張図 五十嵐雄大



しもいせはたみなみ きたようがいあと
0052 下伊勢畠 南・0046 同北要害跡 常陸大宮市下伊勢畠 現況：山林ほか 地図 24

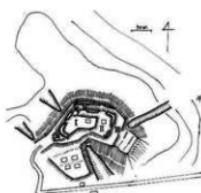
下伊勢畠南要害は、細内集落の西側、東西を深い谷に囲まれた丘陵上に位置する。南西端に位置する主郭は東西約25m・南北約50mの規模で、南側に土壁と虎口、北東部に虎口が見られる。主郭の北東には何段もの平場が下り、南北約300mの細長い城域を持つ。

一方、下伊勢畠北要害跡は、南要害跡の北西約430m、御前山青少年旅行村の中に位置する。管理棟が建つⅠを中心にしてⅡ～Ⅲの帯曲輪が囲み、帯曲輪の一部は横堀の堀底に直結する。また、四方の斜面に堅堀を配し防御を高めている。

両城の詳細な歴史は不明だが、康安2年（1362）に佐竹義嵩が庶長子である小場義躬に伊勢畠郷を譲っている（秋田藩家蔵文書7）。また享徳2年（1453）には佐竹義俊が那須持資に対し、伊勢畠を交渉材料に軍勢派遣を依頼している（那須文書）。これらから、佐竹氏に関する城郭の可能性がある。（山川）



下伊勢畠南要害跡縄張図
高橋宏和 2017.1.2



下伊勢畠北要害跡縄張図
五十嵐雄大 2016

まえごやじょうあと
0054 前小屋城跡 常陸大宮市泉 現況：山林、畠地、宅地 別称：前小屋館

地図 25

前小屋城は、宇留野城から南に 700m の国道 118 号線（旧南郷道）沿いに所在する。

台地角隅の I が主郭で、台地端部に沿って 4 つの曲輪が並列する。主郭の I を囲む土塁の高さは、3 m 以上の規模で、二重に構成される。

堀の深さは、8 m を測る堀底が狭い薬研堀が特徴である。主郭西側の V が馬出し状の曲輪で、西端部には「五竈井戸」と呼称される水源があり、城の水の手と考えられる。

秀郷流藤原氏系那珂氏の分流である平沢丹後守通行の築城と伝わる（『新編常陸国誌』）。平沢氏の衰亡後は佐竹一族の小場氏五代義忠の弟義広の居城となる。義広は、小場氏の重臣として前小屋氏を名乗る。（須貝）



前小屋城跡測量図 常陸大宮市

うるのじょうあと
0055 宇留野城跡 常陸大宮市宇留野 現況：山林、畠地、宅地

地図 25

宇留野城は、部垂城から南に 1 km の県道静常陸大宮線（旧南郷道）沿いに所在する。中心部は久慈川河岸段丘の河川に挟まれた舌状台地に築かれる。

舌状台地突端部の I が主郭にあたり「御城」と呼ばれ、II が「中城」、III が「外城」と呼ばれる。「外城」は、周囲を土塁に囲まれ、特に北側は二重土塁により守られて北方を警戒した曲輪である。その「外城」西側に浸食谷を利用した東西に延びる「大堀」が存在し、北側に続く台地を遮断している。曲輪 I・II の舌状台地西側は、後に拡張されたと考えられる曲輪 IV・V・VI・VII が連なっていたとされる（図破線部）。さらに「外城」から西に 200 m 離れた箇所では発掘調査が行われ、「大堀」と並行する幅 1.8 m、深さ 0.9 m の逆台形に掘り込まれた区画溝が検出されている（図トーン部）。

永仁 5 年（1297）に宇留野大輔宏瑜という僧侶がこの地に地頭職を任せられた記録がある（『水府志料』）。

室町期以降の宇留野氏は、佐竹 15 代義後の 4 男四郎某（攝部助）の系統が宇留野姓を名乗り、佐竹 18 代義篤の弟にあたる義元が宇留野氏の養子に入り、宇留野義元を名乗り後に部垂の乱を起こすことになる。（須貝）



宇留野城跡縄張図 須貝慎吾

0056 部垂城跡 へたれじょうあと 常陸大宮市北町 現況:畠地、宅地、学校敷地

地図 25

部垂城は、国道 293 号線(太田・那須烏山街道)と県道静常陸大宮線(旧南郷道)の交差地点にあり、久慈川河岸段丘西岸の大宮台地北側縁辺部に所在する。

台地上の縁辺部に 4 つの曲輪が並列に並んだ構造で、現在の大宮小学校がある I が主郭とされる。部垂城のそれぞれの曲輪を囲む横堀は、北側斜面の堅堀に接続して台地と斜面部を遮断した構造を持っていたことが考えられる。北側斜面部は、土塁を併設した帶曲輪が明瞭に残存している。

応永 10 年(1403)、常陸平氏の河崎頼幹の築城に始まり、長禄年間(1457-60)には、岩瀬一族の小貫頼定が居城とし小貫氏は三代に続いた。享禄 2 年(1529)、佐竹一六代義篤の弟にあたる部垂義元が部垂城を奪い、部垂の乱と呼ばれる内亂に発展する。天文 9 年(1540)義篤の部垂城攻略により義元は討死し内亂は終結した(「東州雜記」)。以後、部垂城は佐竹宗家の管理下に置かれたと考えられる。(牡丹健一 2011)(須貝)



部垂城跡縄張図 須貝慎吾

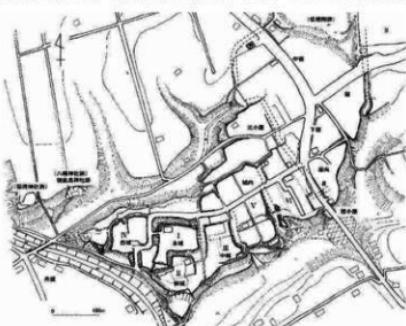
0057 小場城跡 おばじょうあと 常陸大宮市小場 現況:畠地、宅地

地図 25

小場城は、県道 102 号線(水戸長沢間)沿いに所在する。那珂川の河岸段丘上に築かれている。

「本城」、「御城」と呼ばれる曲輪 I・II が主郭部で城主の居住区で、曲輪 III・V・VI が「中城」、「城内」、「北小屋」と呼ばれる家臣団の居住区(堀の内・根小屋)と想定される。さらに那珂川水運の河岸(舟渡)、街道沿いの町場(宿)もあると言える。

鎌倉時代に佐竹一族の南酒出義久が築城と伝わる。小場城が本格的に整備されたのは、佐竹一族の小場氏入城後と考えられ、小場氏は、佐竹 9 代義篤の子小場義躬が祖として、代々小場氏が、小場城主を務めたとされる(『新編常陸国誌』)。慶長 5 年(1600)には、佐竹家臣団の知行再編で、小場城は大山氏預かりとなっている。(須貝)



小場城跡縄張図 高橋宏和

いわせじょうあと しもいわせやかたあと
0058 岩瀬城跡・0063 下岩瀬館跡 常陸大宮市上・下岩瀬 現況：宅地ほか 地図 25

岩瀬城跡は久慈川西岸の微高地に所在する。上岩瀬集落北東端の誕生寺境内 I が主郭で、北側には折れを持つ土塁・堀 a が、南東の墓地に土塁・堀 b が残る。また、南側の集落内では他にも堀跡が見られ、本来の城域は微高地全体に広がると思われる。この集落は短冊形地割による宿場構造を持ち、また、かつて城跡のすぐ東を久慈川が流れていたことから、城は街道や河岸の管理を担っていたと想像できる。

岩瀬与一太郎の居館と伝わり、後に白石志摩守の居城、さらに関次郎左衛門の居所になったという（「北都里程問数之記」）。



下岩瀬館跡縄張図 五十嵐雄大 2019



岩瀬城跡縄張図 五十嵐雄大 2019

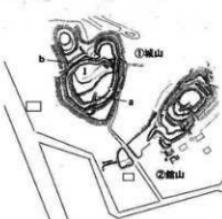
岩瀬城跡の約 1 km 下流には下岩瀬館跡があり、岩瀬城同様に岩瀬与一太郎の居館と伝わる。

民家敷地に I の主郭とその西側に II があり、どちらも周囲を土塁や堀で囲まれる。さらに周囲の下岩瀬集落内にも随所に土塁・堀がみられ、城域は集落全域に広がる可能性が高い。（山川）

とうのじょうあと
0059 東野城跡 常陸大宮市東野 現況：山林、水田、畠地、宅地ほか 地図 24

地殿神社の北方約 600m、国道 293 号線沿いの北の山に所在する。遺構は①城山、②館山、③常龍寺砦の 3 か所に大別され、それぞれが主郭を持つ別城郭である。とくに①は三方を湿地に囲まれた天然の要害で、主郭 I の周囲には、虎口 a や幅 6m・最大深度 12m にも及ぶ長大な横堀 b などの遺構が残る。麓に堀跡と伝承される水田や、古宿という屋号を残す民家があるなど、城下集落の存在も想定される。3 つの城郭が同時期に機能したのか、別の時期のものなのかは不明である。

佐竹一族東野氏の居城と思われ、小瀬義春の庶長子行長が東野に所領を得て東野氏の祖となったという（「佐竹家譜」）。天文 8 年（1539）、部垂の乱で部垂義元は和泉方に東野のうち 10 貢文を与えており（秋田藩家蔵文書 6）、城は部垂方の拠点になつたと推察される。その後、佐竹義篤が島山方面への出兵に際し、援軍に東野の者を派遣しており（大綱久照文書）、城は佐竹氏の下で東野衆の駐屯地として改修されたのだろ。文禄年間の佐竹家臣の知行再編では山方篤定の居城となり、佐竹氏の秋田移封により廢城になったと思われる。（山川）

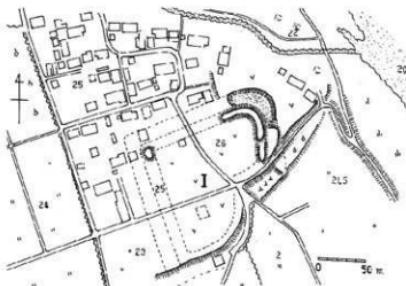


東野城跡縄張図 五十嵐雄大 2016

たかわたりたてあと
0061 高渡館跡 常陸大宮市高渡町 現況：畠地、宅地ほか 別称：高渡城 地図 25

部垂城の北約 800m、久慈川南岸の高渡集落が乗る標高 26m の微高地に所在する。館跡はこの一帯の最高所に当たり、そのためこれまでの久慈川の氾濫にも浸水したことは無かつたとされる。主郭である I のみの単郭構造で、約 100m四方の規模を持つ。本来は南東部が自然地形に規定されて内湾する、不規則な形の方形館だったと思われる。現在遺構はほぼ失われているが、北東部に高さ 3～4m の土壘と、幅約 20m の堀が残る。また、北西端にも土壘の一部が見られる。

『大日本国誌』によれば、大賀外記の居館と伝わり、周囲の墓地にはその墓石とされる五輪塔が残る。詳細は不明だが、付近に河岸があったことから久慈川水運との関連も考えられる。(山川)

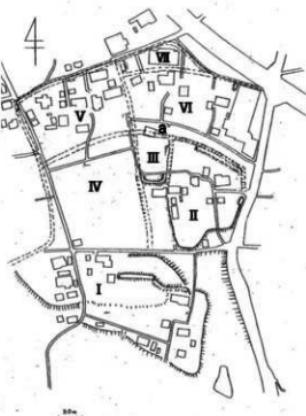


高渡館跡縄張図 青木義一 2015.2.1

いしづわやかたあと
0062 石沢館跡 常陸大宮市石沢 現況：山林、畠地、宅地 地図 25

常陸大宮市役所から国道 118 号線を挟み、南西の一帯に所在する。平成 28 年（2016）に発掘調査に伴い発見された城郭である。現在は住宅地となり遺構の残りは良くないものの、随所に土壘・堀跡の一部が残存し、発掘調査では、a 地点から二重の堀が確認された。これらの痕跡から図の破線のように堀跡を推測でき、概ね東西 300m・南北 400m の範囲に、主郭と思われる I を中心に、II～VIIまで計 7 つの曲輪の存在が考えられる。

発掘調査の報告書によれば、15 世紀から 16 世紀にかけて存続したと推測される。城主は、佐竹家臣で部垂衆に属した石沢氏と思われる。石沢氏は、弘治 3 年（1557）の「甲神社奉加帳」に、宮内少輔以下 7 名が記されている。(山川)



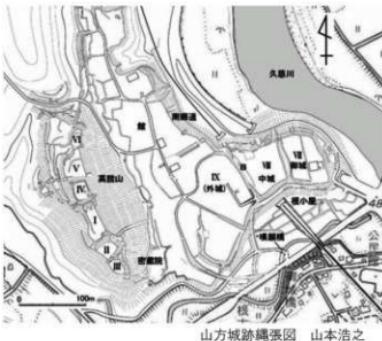
石沢館跡縄張図 五十嵐雄大 2016

やまとがじょうあと
0064 山方城跡 常陸大宮市山方 現況：山林、畠地ほか 別称：御城館ほか 地図 20

山方城は、久慈川に隣接し、国道 118 号線(旧南郷道)沿いに所在する。久慈川河岸段丘の舌状台地と山間部の高館山(鷺子山地)を利用して築城される。

山城部の高館山と平城部の御城周辺からなり、山城部の高館山の標高は 148m、御城からの比高差が約 70m となる。標高が最も高い曲輪 I が山城部の主郭と考えられる。平城部は、段丘上に 3 つの曲輪が続き、曲輪 VII が「御城」、曲輪 VIII が「中城」、曲輪 IX が「外城」と呼ばれる。VII が平城部の主郭と考えられる。3 つの曲輪の間に幅約 9 m の横堀があり、そのうち VII と IX の間の横堀 B は、主要街道である旧南郷道として使用されていた。

築城は、藤原氏流の山方氏と伝わる。山方氏は、応永 15 年(1408)、美濃山方出身の山方能登守盛利(助八郎)が、上杉義憲の佐竹氏入嗣に従い後見役として常陸国に入り、その際に山方城を築城したとされる(『山方町誌』上巻・『新編常陸国誌』)。戦国期に入ると、佐竹三家の東義久の居城となり(『佐竹系図』)、佐竹氏の南奥進出の重要な拠点として大規模に整備されたと考えられる。(須貝)

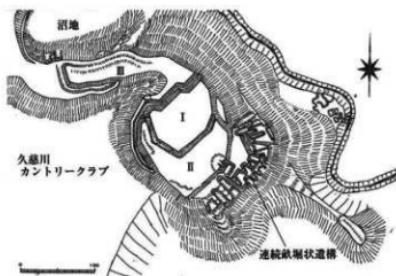


山方城跡縄張図 山本浩之

りゅうかいじょうあと
0065 竜ヶ谷城跡 常陸大宮市山方 現況：山林、畠地 別称：亀城ほか 地図 20

枇杷川とその支流の合流地点から北西側の丘陵上に位置する。北西から南東方向に突き出す尾根上に、3 つの曲輪を配する。I・II が主郭部で、I・III 間の堀切は横矢掛けを伴う技巧的な形状である。注目すべき遺構に、II の南東側斜面に連続して掘られた歛状竖堀群が挙げられる。II から更に南東方向に突き出した細尾根の先端部のピークは物見台の跡と思われる。

別名を亀城といい、山方氏の居城と伝わる。山方氏は、関東管領上杉氏の一族である山方能登守盛利(助八郎)が、上杉義憲の佐竹氏入嗣に従い後見役として山方城に入ったが、後に佐竹東家に山方城を譲り、当城に居城を移したという。また、佐竹氏に敗れた山方氏が臨時に取り立てた城とも伝わる。(山川)



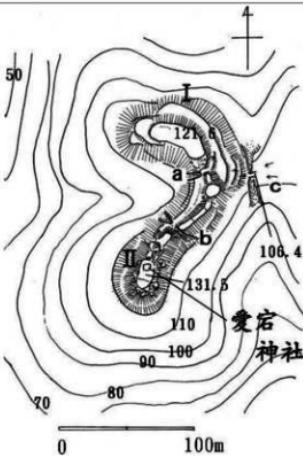
竜ヶ谷城跡縄張図 余湖浩一(『改茨』より転載)

にのうちふるだじょうあと
0066 西野内古館城跡 常陸大宮市西野内 現況:山林 別称:西野内堀ノ内館 地図 20

山方城跡から久慈川を挟み対岸、諸沢川の東側の台地とその背後の標高121mの山上に位置する。

主要部は、東西約50m・南北約20mの規模を持つ曲輪Iを中心とし、数段の腰曲輪・帯曲輪で構成される。Iの南側には2本の堀切a・bを設け、東に続く尾根の鞍部を堀切cで遮断している。bの南のピークIIは物見台跡と思われる。現在は愛宕神社が祀られている。城の西麓は諸沢川に囲まれる平坦な台地で、「堀の内」の地名が残り、東西方向に約150mの長さで空堀が見られるといい(『山方町誌 上巻』)、かつて城主の居館であったと思われる。

南北朝期に築かれたとされるが詳細は伝わらず、「水府志料」も城主を不明としている。(山川)

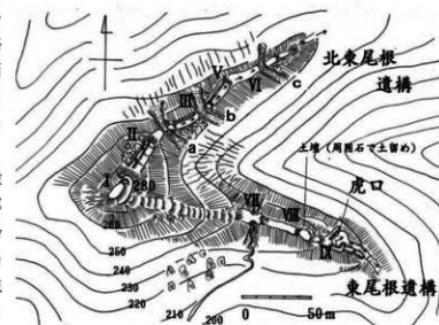


西野内古館城跡縄張図 青木義一 2019.4.5

もうすぐあと
0067 諸沢館跡 常陸大宮市諸沢 現況:山林、畠地ほか 別称:諸沢要害 地図 15

旧山方町北東部の諸沢地区にあり、諸富野郵便局の西、標高280mの山上に所在する。麓の郵便局から山頂までの比高は約170mもあり、防御を急峻な地形に頼る山城である。山頂には主郭Iを置き、北東及び南東に延びる2本の尾根上に、高度差約60mにわたり、V字形にII~IXの曲輪が下る。北東の尾根には大規模な堀切a~cを3本掘って遮断しているのに対し、南東の尾根には登城路や虎口が見られ、この方向が正面と考えられる。また、城内には大きな岩が尾根上や斜面に多く転がっている。

佐竹義重が南方三十三主を殺害した際、鹿島氏を匿った会沢刑部の屋敷の裏山が要害と伝わり(「会沢家譜序」)、当城に該当すると思われる。また位置関係から、金砂山城へのルートである諸沢道を抑える城とも考えられる。(山川)

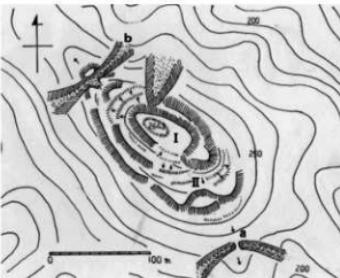


諸沢館跡縄張図 青木義一 2013.1.5

ひのきわたてあと
0069 氷之沢館跡 常陸大宮市氷之沢 現況：山林 別称：三浦氏館 地図 19

下檜沢城跡の約 800m 南、緒川に合流する元沢川と矢の沢の間の、標高約 260m の丘陵上に位置する。山頂の I に主郭を置き、その周囲を II をはじめとする複数の腰曲輪・帯曲輪が囲む。II の南東側には土橋を伴う堀切 a があり、南の尾根からの虎口を構成する一方、西の尾根は背後にあたり、堀切 b で遮断している。南西下に数段の平場があり、沢を下り麓の民家に下るため、この方面が大手で、麓の集落を守るために城郭と思われる。

当城は三浦荒次郎義隆の居館と伝わり、義隆は後に入道して小田野村東福寺に移ったという（「水府志料」）。付近の個人宅からは中世の宝篋印塔が確認されており、館主との関連が推測される。（山川）

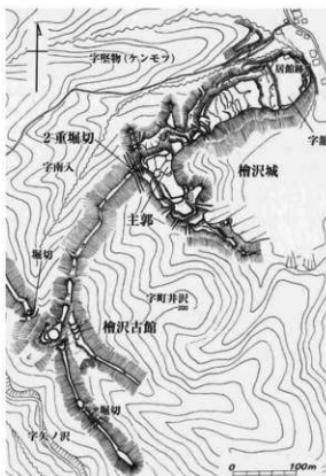


氷之沢館跡縄張図 青木義一 2007.2.11

しもひざわじょうあと
0070 下檜沢城跡 常陸大宮市下檜沢 現況：山林 別称：檜沢城、下檜沢館 地図 19

檜沢郵便局の西方 300m、下檜沢宿の西に緒川を挟み位置する。南北 700m・東西 400m の広大な城域で、麓からの比高約 100m の山の中腹に主郭を置き、その北東の尾根を曲輪が何段も麓まで下る。各曲輪間の切岸や主郭背後の二重堀切など、遺構の規模は市内の山城屈指である。主郭の南西の尾根をさらに登ると、標高 291m の頂上に直径約 15m の円形状の曲輪があり、詰の城と思われる（『続茨』は仮に檜沢古館と呼称している）。さらに頂上から東に下る尾根上にも広く遺構があり（図中に未表記）、今後の調査課題である。

城主として佐竹一族の檜沢氏と小室氏が伝わる。檜沢氏は佐竹の乱で正長元年（1428）に檜沢助次郎が山入氏に味方して宗家の大山氏らに討たれ（秋田藩家蔵文書 7）、その後小室氏が城主となったと思われる。佐竹の乱終盤には、佐竹義舜による檜沢攻めの記事がみられる（秋田藩家蔵文書 10）。その後は佐竹氏の番衆「檜沢衆」の拠点として、主に対那須氏の拠点として機能したと考えられる（大綱久照文書）。（山川）

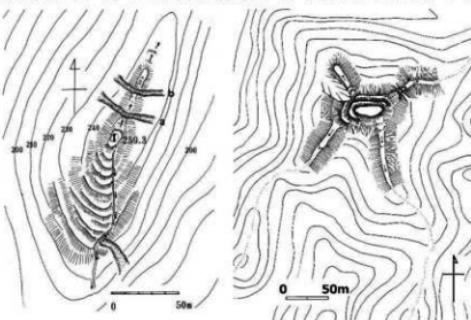


下檜沢城跡縄張図 高橋宏和 2017.1.21
(『続茨』より転載)

かみひざわたりあと
0071 上檜沢館跡・0111 同田尻城跡 常陸大宮市上檜沢 現況:山林 地図 19

上檜沢館跡は県道 29 号線沿いの満福寺の裏山に、上檜沢田尻城跡はそこから沢を挟み西岸に位置する。上檜沢館跡は主郭を中心に周間に腰曲輪・堅堀・土塁（高さ約 3～6 m）・堀切などを配する。一方上檜沢田尻城跡は、標高約 260 m のピークに南北約 15 m・東西約 8 m の主郭 I を置き、南側に約 10 段もの狭い帯曲輪が連続して下る。I の北側は尾根続きで、幅約 5 m の堀切 a、さらに北側に幅約 4 m の堀切 b を設け尾根筋を遮断している。

上檜沢館の歴史は中世に今のが満福寺の地に在った淨因寺との関連が考えられる。現在ひたちなか市の華蔵院に伝わる淨因寺の旧梵鐘銘には「源義長」と記され、この義長が城主の可能性がある。上檜沢田尻城は上檜沢館の出城と思われる。（山川）

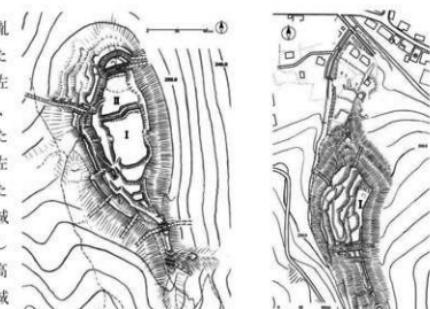


左：上檜沢田尻館跡縄張図 青木義一 2022.5
右：上檜沢館跡縄張図 高橋宏和『続茨』より転載

たかぶだてあと
0072 高部館跡・0077 同向館跡 常陸大宮市高部 現況:山林、畠地、宅地 地図 19

高部館跡・高部向館跡は、檜沢・鶯子間を結ぶ東西道と和田川沿いに大子に到る南北道との T 字路の、北西及び南の山上に位置する。高部館跡は標高約 290 m の山頂に I・II の 2 曲輪を置き、北・西・南の三方向を帶曲輪・横堀・堅堀の組合せにより巧みに守備する。南岸の高部向館跡は細尾根北端の I に主郭を置き、西側斜面に 5 段の曲輪を配し、南の尾根続きを大規模な堀切で遮断する。

高部館は、鎌倉時代末に佐竹義胤の 5 男景義が高部氏を称し築いたとされる。高部氏は 15 世紀代の佐竹の乱で山入氏に味方して没落し、以降は佐竹氏に従ったという。また 16 世紀初頭に山入氏義が籠り、佐竹宗家に対し最後の抵抗を試みたとも伝わる。その後は佐竹氏の番城となり、下那須氏に対する拠点として機能した（大綱久照文書）。また高部向館は高部館の出城として、両城で街道を挟み監視したと思われる。（山川）



左：高部館跡縄張図 山川千博 2014.9.29
右：高部向館跡縄張図 山川千博 2015.12.31

おだのたてあと
0073 小田野館跡 常陸大宮市小田野 現況：山林 別称：小田野城

地図 14

県道 234 号線沿い、小田野中郷集落センターの北方 400m の山上に所在する。標高約 290m に設けた主郭 I を中心に、北東・南東の枝尾根を何段もの狭小な曲輪が連続して下り、曲輪同士はそれぞれが細い道で繋がり合い連携する。I の北側斜面は切岸と何本もの堅堀により徹底して守られている。また I の北東下方の小字瀧ノ崎付近には平場 II があり、根小屋的な空間と思われる。一方、南東麓の小字岩下からの登城路もあり、堅堀と堅土塁、数段の腰曲輪、主郭から南東に突き出した細長い曲輪により守られる。主郭の南側には道状の帶曲輪が三段続き、いずれも主郭西側の堀切底に誘導する。

佐竹一族である小田野刑部少輔行義の居城と伝わる（「水府志料」）。小田野氏は山入氏から分家し、佐竹の乱で佐竹宗家方に付き、その後も戦国期を通じて佐竹氏に従い、秋田への移封にも同行した。（山川）



小田野館跡縄張図 山川千博 2018.1.5

こうとじょうあと
むかいだいわあと
0074 河内城跡-0079 同向館 I 跡 常陸大宮市鷺子 現況：山林ほか 別称：鳥子城 地図 19

河内城跡・河内城向館 I 跡は、国道 294 号線沿い、鷺子宿の北及び緒川を挟み南東の山上に位置する。河内城跡は標高約 270m の曲輪 I を中心に、曲輪 IV まで大きく 4 つの曲輪が残る。I には北端・南端の 2か所に虎口 a・b が見られ、I と IIIとの間の堀切 c の規模は圧巻である。

また近年、北東側の山頂にも遺構が見つかった（右図）。河内城向館 I 跡は標高約 230m の尾根先端部に約 50m 四方の平場 I が残る。東西北の三方を切岸で守り、西下に帶曲輪が展開する。

河内城は鷺子江戸氏が城主と伝わる。鷺子江戸氏は江戸通房の次男通治（隠岐守）に始まり、代々佐竹氏に仕えた。佐竹氏が 16 世紀初頭に上那須方面に進出した際に從軍し（小生瀬宝泉寺扉書「常陸國北都里程間數之記」）、その後も佐竹氏の下那須進出の拠点になったと推測される。（山川）



河内城跡山頂部
青木義一 2022



河内城跡・河内城向館 I 跡縄張図
山川千博 2017.2.4

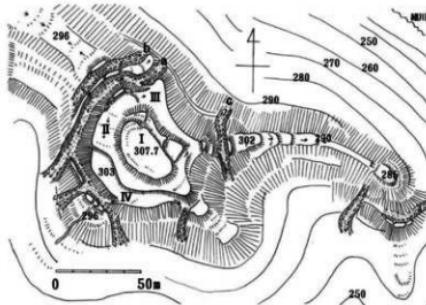
たかさわてあと
0075 高沢館跡 常陸大宮市鷺子 現況:山林 別称:鳥子館

地図 18

国道 293 号線沿いの河内城跡の北西約 1 km、緒川と東西の谷の合流点に突き出した丘陵先端に位置する。尾根先端の標高約 308m の主郭 I を中心に、周囲を帶曲輪 II ~ IV が囲み、横堀・堀切・土塁・堅堀を組み合わせて巧みに守備している。とくに北西の尾根伝いを遮断する二重の堀切 a・b と三重の土塁は見応えがある。

なお、この尾根は、高沢向館跡へと続いている。また、北東の尾根を堀切 c で遮断し、c の東の尾根上には小規模な曲輪が連続し、この方向が大手と思われる。

鳥子館跡ともいい『新編常陸国誌』、高沢伊賀守の居城と伝わる(『水府志料』)。武茂氏一族の城という伝承も残すが、詳細は不明である。河内城から近く、鳥子江戸氏との関連も考えたい。(山川)



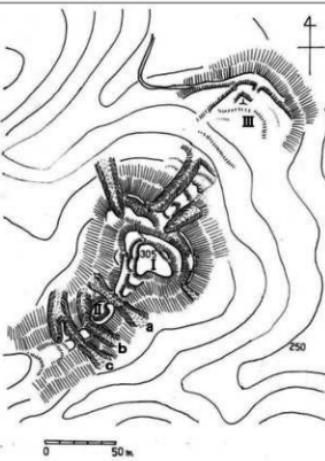
高沢館跡縄張図 青木義一 2006.11.18

たかざわむかいであと
0076 高沢向館跡 常陸大宮市鷺子 現況:山林

地図 13

国道 293 号線沿いの茨城・栃木県境近く、高沢館跡から北西約 600 m の同一丘陵上に位置する。北東に向かい延びる尾根先端部のピークに、一辺約 25 m の三角形の主郭 I を置き、その周囲に腰曲輪や帶曲輪を配する。南西側の尾根上は a ~ c の 3 本の堀切と小規模な曲輪 II により防御する。I の北側は横堀と複数の堅堀の組み合わせにより複雑に守られ、現在墓地がある III から登る城道が残る。

『美和村史』では高沢館跡の向館とされるが、高沢城とは同一丘陵上に位置するためこの呼称は相応しくない。高沢城主の末裔と伝わる高沢氏が住持を務める照願寺とは、緒川を挟み対岸の位置関係にあることから、高沢向館が本来の「高沢城」である可能性も考えられるが、両館の詳しい関係は不明である。地元では、曲輪が何段にも重なる様子が鏡餅のように見えることから、「お供え山」と呼ばれている。(山川)



高沢向館跡縄張図 青木義一 2012.2.5

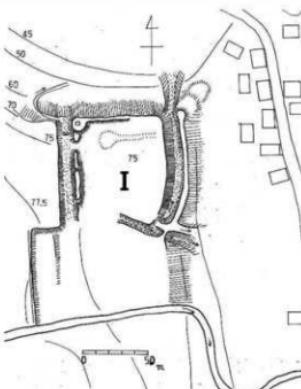
か か じ ょ う あ と
0080 那賀城跡 常陸大宮市那賀 現況：畠地、宅地 別称：那賀遺跡

地図 24

緒川の右岸を南北に走る県道 12 号線沿い、大字那賀地内の鹿島神社から県道を挟み西側の標高約 75m の台地北東端部に位置する。字御城にある主郭 I は、東西約 40m・南北約 50m の規模で、北以外の三辺を堀で囲まれている。堀の規模は、西辺の堀で上幅約 12m・深さ約 2.5m と大規模である。遺構として残るのは I のみだが、『緒川村史』によれば、かつては I の西側の小字宝堂、南側の小字観音堂を含めて、東西 200m・南北 400m ほどの範囲に遺構が残っていたという。

藤原秀郷の子孫通資が、那珂氏を名乗り居住したと伝わる。那珂氏は通辰の代に南朝方に与して滅び、その後は佐竹一族の小田野氏がこの城を管理したという（『緒川村史』）。過去の発掘調査結果では、11世紀代と 15 世紀代の遺構や遺物が確認されている。

（山川）



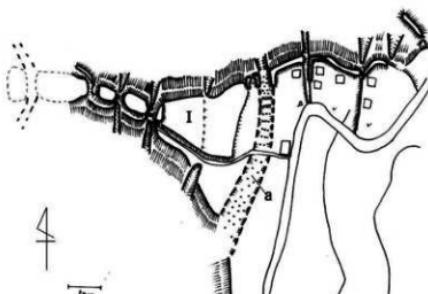
那賀城跡縄張図 青木義一 2012.2.12

か わ さ き じ ょ う あ と
0081 川崎城跡 常陸大宮市下小瀬 現況：畠地、宅地 別称：下小瀬館

地図 19

旧緒川総合センターから、緒川沿いに県道 12 号線を約 1.5km 南進して下小瀬地区に入り、緒川の東の対岸崖上に位置する。東西 100m・南北の最大長（東辺）130m の台形の曲輪 I を主郭とする。I を台地から独立させるための東辺の堀 a は大規模で、埋没が進んでいるが堀幅 20m を測る。a の東の台地上にも縁辺部に遺構が見られ、本来の城域はより広範囲に及んでいたと推測され、今後の調査が課題である。一方 I の西側は、台地先端に向けて堀切と小規模な曲輪が連続する。台地の北西端にも曲輪があったが、昭和初期に緒川の流路を変えた際に削られ消滅した。

小瀬義春の次男孫二郎某が築き、以来代々の居城だったという（『新編常陸国誌』）。また、佐竹氏が川崎五郎を配置し、佐竹氏の秋田移封に伴い廢城となったと伝わる（同前）。天文 4 年（1535）10 月、部垂の乱で小瀬氏は義元側に属し、「下小瀬ノ河崎城」が佐竹義篤に攻略されたという（『東州雜記』）。地元の伝承では、その際、東側の山を取られすぐに落城したという。（山川）

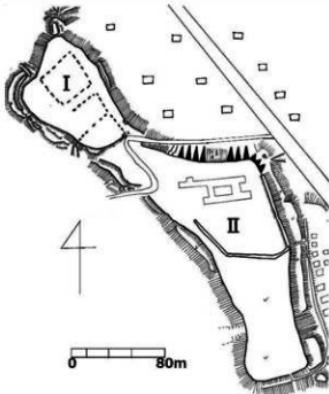


川崎城跡縄張図 五十嵐雄大 2016.10

お ゼ やかたあと
0082 小瀬館跡 常陸大宮市上小瀬 現況：山林、公共施設地 別称：小瀬城 地図 19

現在緒川総合センターが建つ標高約105m・比高約40mの台地上に所在する。主郭であるIは緒川総合センター敷地に、その南東側のIIは明峰中学校敷地となり、主要な曲輪内の遺構は、IIの東辺にわずかに土壘の痕跡が残るのみである。しかし、Iの北側から西側斜面にかけて帶曲輪・横堀・堅堀が、IIの東辺下に帶曲輪が残るなど、台地斜面に遺構がみられる。

小瀬義春が初めて築き、その子孫が代々居したと伝わる（『新編常陸国誌』）。後に佐竹北家臣の栗田氏が拠ったとも伝承される。天文年間、佐竹義萬が烏山方面への出兵に際し派遣した軍勢の次番に、「小瀬・檜沢」の衆がみられ、城は小瀬衆の駐屯地として機能したと思われる（大綱久照文書）。周囲には、「館」「館前原」「根古屋」などの城館関連地名が残る。（山川）



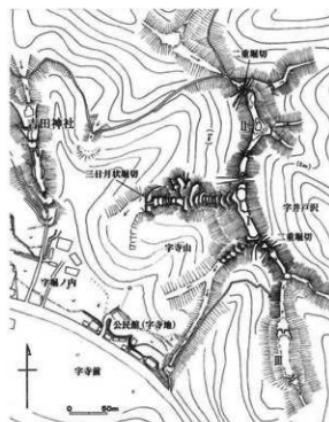
小瀬館跡縄張図 五十嵐雄大 2016.12.20

こぶねじょうあと
0083 小舟城跡 常陸大宮市小舟 現況：山林

地図 19

緒川物産センター「かざぐるま」から県道12号線を西進し、吉田鹿島神社の東に見える標高約238m・比高約112mの山上にある。小舟川の東岸、吉田鹿島神社の裏山にI～IIIまで3つの曲輪群を置き、要所を堀切で遮断している。主郭であるIの西側尾根には、数段の帯曲輪と三日月状の堀が残る。IIの北側は、二重堀切を設け敵の侵入を防いでいる。南麓の小字堀ノ内や小字寺地には、切岸や堀と見られる痕跡も残る。遺構は東西約400m・南北約500mに及び、市内有数の広大な城域を持つ。

城が築かれる以前の貞応元年(1222)、南側中腹の字寺地の地には照願寺（浄土真宗）があったという。16世紀前期の部垂の乱の頃は、部垂義元に味方した小瀬氏の家臣内田彈正の館と伝わる。天文年間には佐竹氏の番城となり、佐竹義萬の烏山方面への出兵の際は初番として小舟衆が派遣された（大綱久照文書）。（山川）



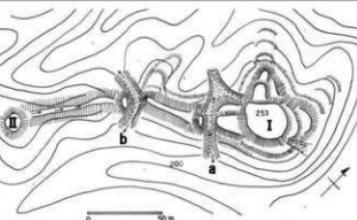
小舟城跡縄張図 高橋宏和 2017.1.20
(『続茨』より転載)

おおいわじょうあと 0084 大岩城跡・0114 同関沢城跡 常陸大宮市大岩 現況：山林 地図 18・19

大岩地区の県道12号線沿い、小舟川南岸の堂宇付近にある案内板の裏山が大岩城跡である。谷筋を挟みすぐ南西の尾根上には大岩関沢城跡がある。大岩城は、北東に突き出した標高253mの丘陵先端に約40m四方の主郭Iを置き、周囲を数段の帯曲輪・腰曲輪で守る。Iの西側は2本の掘切a・bで区切



大岩関沢城跡縄張図
青木義一 2021



大岩城跡縄張図 青木義一 2004.3.7

り、さらにbの先のIIのピークを物見台として使用したと思われる。一方、大岩関沢城は、瓢箪形の平場Iを主郭とし、南側の尾根を小規模な二重堀切aで遮断する。Iの北西部には虎口bが残り、北側の帯曲輪を通じ北東方向に下る道が大手と思われる。

大岩城は土豪の大岩氏の居城と伝わる。大岩氏は、応永2年(1395)に大岩普藤の名が(栃木県茂木町松倉山観音堂聖観音像胎内墨書銘)、享徳2年(1453)に佐竹義後が那須持資に軍勢派遣を依頼した際の使者に大岩石見守の名が見られる(那須文書)。大岩関沢城の歴史は不明だが大岩城の関連城郭と推察される。(山川)

おせじょうあと 0085 小瀬城跡 常陸大宮市上小瀬 現況：山林 別称：上小瀬城ほか 地図 19

小瀬館跡の北約600m、小瀬氏の菩提寺である江畔寺の北側、緒川と舟川に守られる細尾根上に位置する。電波塔の北側のピークIを主郭とし、そこから南と北の尾根上に、南北700mにわたり遺構が残る。Iの南は、曲輪II～曲輪群VIIまで大小10以上の平場が続き、その間に堀切が3か所掘られている。一方Iの北側には曲輪V・VIと3か所の堀切が残る。城の東麓、緒川が南に蛇行する地点には平坦地Xがあり、平時の居館跡と思われる。

明確な歴史は不明だが、小瀬館に移る以前の小瀬氏の城、もしくは小瀬館の詰の城であった可能性が考えられる。関連する小字に「ゆうがい」がある。(山川)



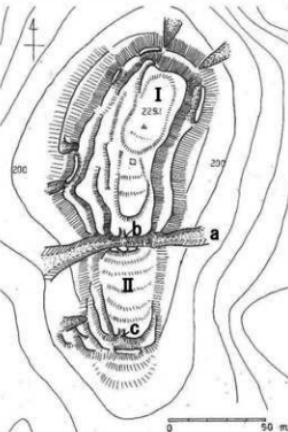
小瀬城跡縄張図 余湖浩一 2004.11
(『改訂』より転載)

たかだてじょうあと
0086 高館城跡 常陸大宮市上小瀬 現況:山林

地図 19

緒川総合センターの北東約 1.2 km、標高約 230m・比高約 120m の高館山の山頂に位置する。南北約 100m・東西約 50m の規模の I が主郭で、その周囲を帶曲輪が囲む。この帯曲輪は隨所で横堀・土塁となり、また要所に堅堀を掘り、横堀底と繋げている。I の南側は大型の堀切 a で仕切り、その切れ目虎口 b を南に出ると曲輪 II がある。II の内部はほぼ自然地形で南に傾斜し、虎口 c を経て城外に続く。なお、図の範囲外だが c の南方約 150m 地点に東西の古道が通り、すぐ横に城域との境を示す十三塚と思われる十数基の古塚群がある。

高館城は佐竹一族の小瀬氏が初めて構えた城と伝わる。山頂の I からは周辺地域が見下ろせるので、その後も佐竹氏の城として敵方の監視・領内の連絡網の要として機能したと思われる。なお、明治 9 年(1876)10 月の小瀬一揆で、地租改正に反対する農民たちが立て籠った場所としても知られる。(山川)



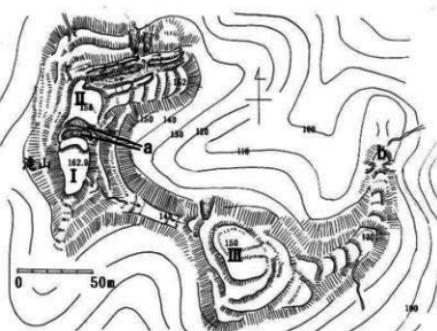
高館城跡図 青木義一 2012.2.12

かわさきむかいだてあと
0087 川崎向館跡 常陸大宮市下小瀬 現況:山林 別称:下小瀬向館

地図 19

川崎城跡から緒川を挟み対岸約 500m、標高約 163m・比高約 100m の滻山の山上にある。山頂の I が主郭で二本の堀切 a を経て北側に II を配し、この 2 つの曲輪が主要部を構成する。II の北東下に 5 ~ 6 段の曲輪と緩やかな堅堀状の城道が下る。また、I の南東にも標高 150m のビーカを中心的に曲輪群 III がある。III は切岸を主体とする構造で、内部は平場の削平が甘く自然地形のままの箇所が多い。北東の尾根先端の b まで平場が連続する。

当城は川崎城の向館と伝わり、関連地名として「滻山」を残すが、城主伝承などはなく詳細な歴史は不明である。川崎城を眼下に望める立地で、川崎城とともに緒川に沿った街道を両側から抑ええるための役目が想定できる。(山川)



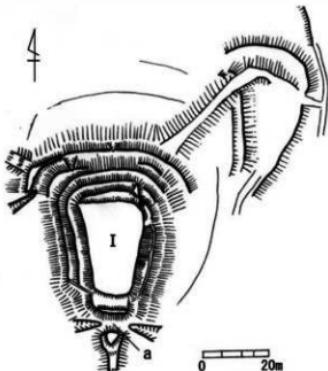
川崎向館跡図 青木義一 2022.2.5

ゆごうどだてあと
0088 油河内館跡 常陸大宮市油河内 現況：山林

地図 19

小舟城の南西約2km、栃木県那須烏山市との境界付近の小舟川南岸に位置する。長方形の主郭Iは東西約25m・南北約50mの規模で、その北・西・南にかけて数段の帯曲輪が廻っている。Iの南側は尾根続きて、堀切aで遮断している。一方Iの北東側は、麓に平時の居館と見られる平場があり、この方向が大手と思われる。城のすぐ西を那須街道が通り、その監視の役割が考えられる。

地元では館跡と伝承され、土豪の桑名氏の居城と考えられるが、詳細な歴史は不明である。「水府志料」は城主を不明としている。(山川)



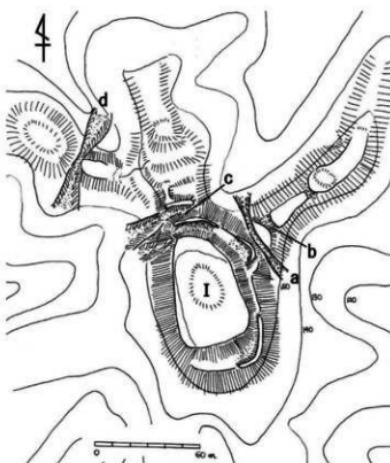
油河内館跡縄張図 五十嵐雄大 2017

くにおきはしまんやかたあと
0089 国長八幡館跡 常陸大宮市国長 現況：山林

地図 19

御前山中学校の西の国長入口交差点から県道39号線を北進し、阿弥陀堂の北に見える標高167m・麓からの比高約100mの山上にある。主郭であるIは南北約70m・東西約30mの規模で、中央部が若干高く、平坦面の削平は不十分である。急勾配の西側以外の三方に、横堀と帯曲輪が廻る。Iの東側には堀切a・bがあり、北東の尾根に続く。一方、Iの北側は堀切cで分断し、さらに西北に派生する尾根上にも堀切dが残る。

城主や歴史は不明である。川崎春二による昭和39年(1964)の調査記録が残り(「常陸奥七郡城館図」)、古くから城郭跡として伝わっていたようである。(山川)



国長八幡館跡縄張図 青木義一 2015.2.1

おきだてんじんやまだあと
0094 長田天神山館跡 常陸大宮市長田 現況：山林

地図 19

長田郵便局から県道 102 号線を挟み西側の山頂に位置する。現在電波塔が建つ、東西 15m・南北 50m ほどの二段の曲輪 I が主要部を構成する。I から南東に向かい数段の帯曲輪群が通路状に展開し、これらは本来、主郭にいたるつづら折れの道だったと思われる。その外縁には土塁を伴う二重の横堀 a が残る。一方、I の西側は南北両側から迫る谷に守られているが、尾根の鞍部を堀切で仕切り、北西及び南西方向に尾根が続く。そのうち北西のビーグルは 7m 四方の小さな平場 II で、物見台として機能したと考えられる。

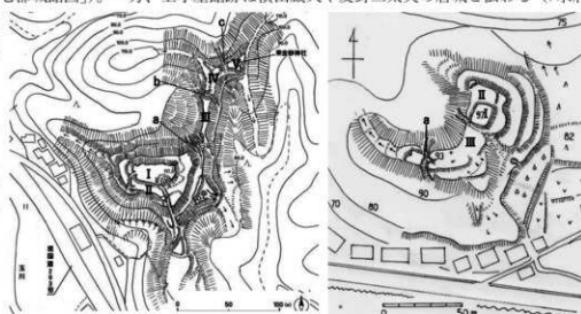
館跡の東麓には現在、金子・坪の両氏が住み、どちらも佐竹氏家臣の伝承を持つ。とくに金子氏は、明応年間頃（1500 年前後）からこの地に住むと伝え、城内に氏神を祀っているため城主の可能性がある。（山川）



きたしおこなわいのりょうあと
0097 北塩子向ノ入城跡・0053 上小屋館跡 常陸大宮市北塩子 現況：山林 地図 19

北塩子向ノ入城跡（別称：湯殿山城）は、国道 293 号線沿い、北塩子簡易郵便局東の標高 109m・比高 63m の山上に位置する。主郭 I の周囲を帯曲輪 II で囲み、北東の尾根に三本の堀切 a～c と、それにより区切られた曲輪 III～V が続く。V には東金砂神社が祀られ、城内を野口方面と照田方面を結ぶ古道（伝照田街道）が通る。またその南西対岸、比高約 30m の天神山上には上小屋館跡（別名：北塩子館跡）があり、I～III の曲輪と堀切 a などの遺構が残る。

歴史は不明だが、川崎春二による昭和 38 年（1963）の調査では、湯殿山城という名称で記録される（「常陸奥七郡城館図」）。一方、上小屋館跡は横山藏人や友野三太夫の居城と伝わる（「水府志料」・「常陸奥七郡城館図」）。両城とも照田街道と現国道 293 号線の交差点にあり、交通の監視の役割が推察される。（山川）



北塩子向ノ入城跡縦張図
山川千博 2018.4.1

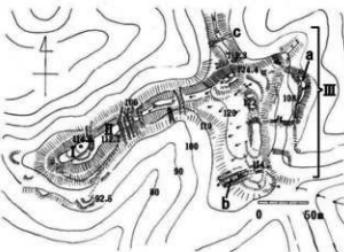
上小屋館跡縦張図
青木義一 2018

おぐらじょうあと
0100 小倉城跡 常陸大宮市小倉 現況：山林

地図 25

大宮東部地区コミュニティセンターの南東約 600m、常陸太田市との境界付近の山中に広範囲に遺構が残る。西に張り出す尾根の先端に、長さ約 35m・幅約 10m の曲輪 I を配し、その東側に同規模の曲輪 II が並ぶ。I には現在、富士社の小祠が祀られる。I・II の南斜面に数段の平場と道の遺構があり、この方向が大手と思われる。II の東は尾根の鞍部を三重の堀切で遮断し、さらに東には I よりも高い標高 124m のピークを中心に関構群 III がある。III は自然地形のまま城域に取り込んでいる箇所が多く全体像を把握しにくいが、大土塁 a に囲まれた空間や竪土塁を伴う長さ約 50m の豊堀 b、北側の尾根を断つ堀切 c など隨所に遺構を残し、本来城郭の中心部だった可能性がある。

関連地名に小字「小屋ヶ作」が残る。天保 3 年（1832）作成の部垂の乱に関する伝承書付では、部垂城を攻めた佐竹本家が久慈川対岸の「小倉台陣」を陣所にしたといい（「常陸古伝条」）、当城に該当する可能性が高い。（山川）



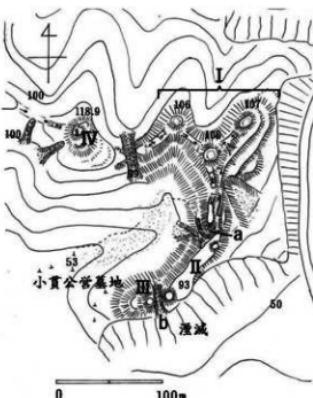
小倉城跡縹張図 青木義一 2022.2.19

おみきじょうあと
0105 小貫城跡 常陸大宮市小貫 現況：山林

地図 20

小貫公営墓地裏の標高約 106m・比高約 70m の尾根上に位置する。公営墓地の谷を登り切った奥にあるいくつかのピーク群 I が主要部と思われる。I の東側下には数段の帶曲輪があり、その最上段は城道となり南側に続く。堀切状の峠道 a を南に越えると曲輪 II がある。II は南斜面を土取りにより失っているが、城内で最も広く、建物を建てるなどの実質的な使用空間だったと思われる。II の西側は土壇と堀切 b を介し、さらに小規模な 2 段の曲輪 III がある。一方、I の西側は、尾根の鞍部を越えた先に標高約 119m の物見台と思われる IV がある。

歴史は不明だが小貫氏の城郭の可能性がある。西方にある鹿島神社（かつての小貫神社）が小貫氏の居所と伝わり（『茨城県神社史』）、当城はその詰の城かもしれない。小貫氏は、山尾城の小野崎通春の次男通伯が小貫郷に入り小貫氏を称したのに始まり（「小貫氏系図」）、戦国期に部垂城代となり後に部垂義元に敗れたが、乱後は佐竹氏の宿老として活躍した。（山川）



小貫城跡縹張図 青木義一 2019.4.5

やわらまつくぼたあと
0106 家和楽松久保館跡 常陸大宮市家和楽 現況：山林 別称：家和楽砦 地図 20

山方城の北約3km、国道118号線沿いの家和楽神社の南東の久慈川に突き出した標高約170mの尾根上に位置する。小規模だが遺構をよく残しており、長辺約30mの平場Iを主郭とする。I内の平坦面は自然地形に近く、その周囲を数段の帯曲輪で囲む。これらの帯曲輪の一部は道として北西の神社方面に下っていくため、この方面が大手と思われる。Iの東側は尾根続きで、堀切aで遮断している。一方、Iの南西には細尾根が伸び、その先端IIは物見台として使用したと思われる。

詳細な歴史は不明だが、地元の伝承では、当城と周辺の山方城・上久保館・西金城・頃藤城の5城が連携して、久慈川沿いの地域を守備していたという。(山川)

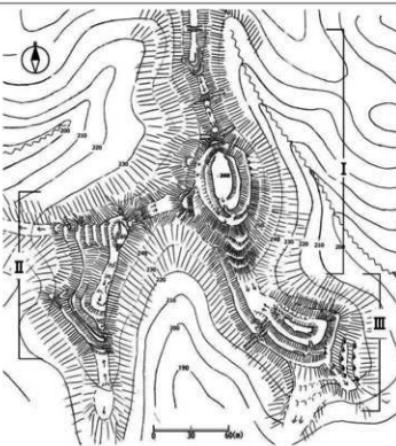


家和楽松久保館跡縄張図 山川千博 2020

おおいわふるうちじょうあと
0113 大岩古内城跡 常陸大宮市大岩 現況：山林、寺社境内地 地図 19

県道12号線沿い、大岩地区の三輪神社裏山一帯に所在する。大岩城からは小舟川を挟み北東約1kmの対岸にあたる。東西約250m、南北約300mの広大な城域に、IからIIIまでのそれぞれ独立した3つの曲輪群がある。Iが当城の中心部で、IIとIIIは曲輪内部の削平は甘く、遺構の外縁部を長大な土塁と横堀で守るのが特徴である。

近年発見されたばかりの城郭で、伝承等がなく歴史は不明だが、大岩城に近接していることから大岩氏との関連が推測される。小舟川から那須烏山へと抜ける東西道と油河内・鷺子間を結ぶ南北道の交差点に位置しており、両街道を監視していたと考えられる。(山川)



大岩古内城跡縄張図 山川千博 2020

せんだたかうちじょうあと どうこもうちじょうあと
0116 千田高内城跡・0117 同古茂内城跡 常陸大宮市千田 現況：山林 地図 18・23

栃木県茂木町との県境付近、県道 287 号線と 171 号線の交差点から南西約 500m の標高 147m の山上に位置する。蛇行する千田川と八反田川に囲まれる天然の要害で、ピーク I を主郭とし、背後を堀切 a で断つ。I の西下には何段もの帯曲輪が下り、南西端を横堀 b で守備する。北側にもう一つのピーク II があり、西に向かい通路状の帯曲輪が展開する。その西側に、西北に向かい城を下る道があり、麓には平時の居館跡と推定される三段の広大な平場群がある。また、千田高内城跡の南方約 800m、標高約 150m の山上に千田古茂内城跡がある。I を主郭とし、南西麓に向かい帯曲輪 II ~ IV と堅堀 a、さらに数段の腰曲輪が下る。茂木方面が一望でき、国境の監視に特化した機能が想定される。

両城とも近年発見されたが、今のところ文献や伝承は見つからず歴史は不明である。(山川)



千田高内城跡縄張図
山川千博 2020



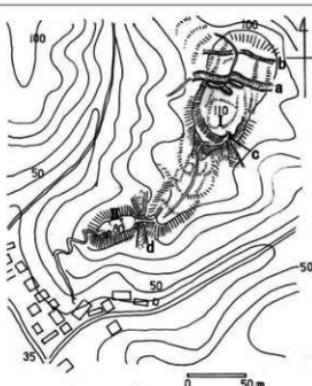
千田古茂内城跡縄張図
須貝慎吾 2022

こすごうじょうあと
0118 越郷城跡 常陸大宮市野口 現況：山林

地図 24

緒川の東岸、南西に突き出す標高約 110m の山頂に位置する。最高所に位置する径約 40m の I が主郭で、内部は平坦ではなく自然地形に近い。I の北側は、幅約 8m・深さ約 3m・全長約 40m の大規模な S 字形の堀 a で分断している。堀の主郭側には土塁があり、堀の折れ部分で内樹形の虎口を形成している。a の北側にも溝 b があるが、幅が小さく遺構かどうか判断できない。b の北西方向に尾根が続くが、この先に遺構は見当たらない。I の南端には、堅堀を伴う坂虎口 c がある。c を出て緩やかな自然地形を下ると堀切 d がある。その先の標高 80m の尾根先端に小規模な平坦地 II があり、緒川及び周囲の谷筋を見張る物見台としての役割が考えられる。

『ふるさとの史跡を探る(3)』によれば、小野崎左近の見張り番が居たと伝わり、地元ではこの山を「陣場」と呼んでいる。(山川)



越郷城跡縄張図
青木義一 2019.12.7

かないじょうあと
0120 金井城跡 常陸大宮市金井 現況:山林 別称:烏渡呂宇城か

地図 24

国道 123 号線と県道 39 号線の交差点の北西、那珂川北岸の標高 103m の丘陵上に所在する。頂部の I が主郭と思われるが、ほぼ自然地形のままである。その南に平場群 II 、東に平場群 III が何段も下るが、どこまでが城郭遺構か判別がつかない。城内の要所には大規模な遺構が点在し、とくに南東端の大土壁 a は那珂川流域を監視する物見台と思われる。また、I の北の沢は樹形状の空間 IV で守られ、沢を挟んだ北岸にも V 、VI の二曲輪を中心とする出城がある。

永享 6 年 (1434)・同 9 年に鎌倉公方足利持氏が攻撃した山入佐竹氏方の拠点に「烏渡呂宇」城がある (阿保文書・松平義行所蔵文書)。読みは「うとろう」と思われ、この地の近世地名「泥部村」や、城の北側の地名「土路部沢」の音に通じることから、当城を比定地としたい。同時期には近隣の長倉や野口でも合戦が伝わり、那珂川北岸の一帯がこの頃持氏方による攻撃対象だったと思われる。周囲には城郭地名「竹ノ塙」「竹下」が残る。
(山川)



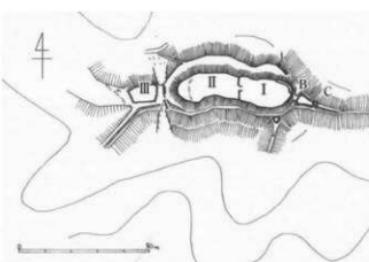
金井城跡縄張図 (下)・出城跡縄張図 (上)
青木義一 2019.1.20

じとくやかたあと
0124 地徳館跡 常陸太田市町屋町 現況:山林 別称:町屋要害

地図 21

市域東部、里川左岸の標高 138m の山の頂部に位置し、棚倉街道を見渡すことができる。構造は、単純形状の連郭式小型城郭であり、主郭部は曲輪 I ・ II が段差を持って並び、曲輪 II の西側を掘 A で遮断し、その西に曲輪 III が区画されている。東側は堀 B と堀 C により、尾根筋を遮断している。

伝承では、南北朝時代に福地氏が築いた館といわれているが、現在の姿は明らかに室町時代以降のものであると考えられる。根本氏が城主として、狼煙を上げたとも、延徳年間の奥州勢の佐竹領侵入に備え佐竹氏が築かせたともいわれている。廢城時期は、山入の乱終結の頃であろうとも考えられるが、黒川金山の防護施設として継続使用していた可能性も考えられる。(山口)



地徳館跡縄張図 高橋宏和 2014.1 (『続茨』より転載)

はるともやかたあと
0125 春友館跡 常陸太田市春友町 現況：畠地、宅地

地図 21

市域東部、里川左岸の河岸段丘上、標高 51m の場所に位置している。

構造は、約 120m 四方の広さを持つ単郭の方形館であり、台地平坦部に続く東側と南側には堀と土塁が存在し、入口は北側を除く三方向にあったという。

戦後すぐまでは土塁が存在していたようだが、現在では、畠・宅地となり、堀・土塁等の遺構は確認できない。伝承では、館主は佐竹氏の近習衆の武藤氏と伝えられている。(山口)



春友館跡復元縄張図 青木義一 2000.11 (『続茨』より転載)

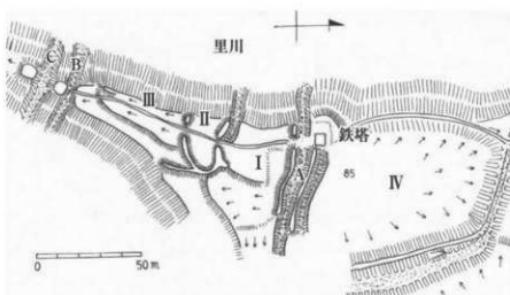
あかすやかたあと
0126 赤須館跡 常陸太田市茅根町 現況：山林

地図 21

市域東部、里川左岸の標高 76m の多賀山地から延びる尾根の末端部に位置する。なお、谷津向かいの北側の台地には春友館がある。

曲輪 I は約 40m 四方の広さを持つ。その南側には約 30m の広さを持つ曲輪 II、約 20m の広さを持つ曲輪 III とつながり、堀切 B・C、大手口と続いている。なお、曲輪間は土塁で仕切られている。また、曲輪 I の北側には二重堀 A があり、その先に南北約 80m、東西約 60m の曲輪 IV が造成されている。曲輪 I の東側については、かつて畠であったため遺構が不明瞭になっている。

「水府志料」によると
「古屋舗あり。一町四方、
二重堀あり。東は平地、
南西北は里川に囲まれて
いる。佐竹氏のとき、赤
須兵庫という者が住ん
だ。佐竹氏が秋田に移る
に及んで廃されたとい
う。今はみな畠になっ
ている。」とある。なお、赤
須氏は小野崎氏の一族で
ある。(山口)



赤須館跡縄張図 青木義一 2005.1 (『続茨』より転載)

ちのねじょうあと
0127 茅根城跡 常陸太田市茅根町 現況：畠地

地図 26

市域東部、里川左岸の標高約 47m、尾根状台地の先端部に位置する。

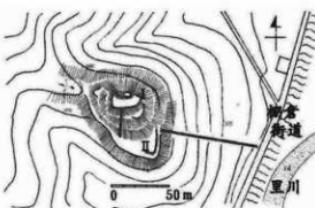
現在、主郭部は畠となり、ほとんど失われているものの、土壘や虎口の一部が残存し、帶曲輪が畠として残る。主郭部は東西 2 つの曲輪からなり、東西 50m、南北 100m の広さを持つ西側の曲輪 I と東西 100m、南北 150m の広さを持つ東側の曲輪 II が存在していたと考えられる。

「水府志料」によると、「古屋舗あり。東西五十間余り、南北三十間余り。佐竹氏のとき、茅根河内守が居り、秋田に移るに及んで廃されたといふ。」とある。なお、茅根氏は小野崎氏の一族である。

茅根城から里川を挟んで西約 600m、妙見山星之宮社が建つ標高 115m の山には、茅根向館跡（0178）がある。山頂に曲輪 I（東西約 25m、南北 15m）があり、北側には物見と思われる土壇がある。約 15m 南下に東西約 30m、南北約 10~15m の広さがある曲輪 II がある。（青木）



茅根城跡復元縄張図 青木義一 2004.7
(『続茨』より転載)



茅根向館跡縄張図 青木義一 2015.1 (『茨3』より転載)

ねもとせかたあと
0128 根本館跡 常陸太田市白羽町 現況：畠地

地図 26

市域東部、里川左岸の東の山地から延びる舌状台地の先端部の標高 40m に位置する。

構造は、2 つの曲輪が南北に並ぶ、東西 110~120m、南北約 170m の規模を持つ大型の館跡である。

曲輪 I は、東西約 90m、南北約 60m の規模がある。西側に L 形に幅約 15m の帶曲輪あり。本郭の東側に虎口、曲輪 II の南側が大手口と推定される。

館主は藤原秀郷流小野崎通成の子盛通が根本氏を称して居住し、以後 18 代に渡り在館したというが、いつまで居館していたかは不明である。(山口)



根本館跡縄張図 青木義一 2020.10 (『茨3』より転載)

おのさきじょうあと
0130 小野崎城跡と周辺城館 常陸太田市瑞龍町 現況：山林、学校敷地 地図 26

市域中央部、里川右岸の標高約 42m の台地の縁辺に位置し、同じ台地上には小野崎氏一族の館跡がある。

小野崎城跡は、昭和 39 年常陸太田市立瑞竜中学校建設工事に伴い、一部発掘調査が行われ、土坑群や V 字状の溝（幅約 1.2m、深さ 70cm）を検出したほか、「東」「西」「南」「北」とそれぞれ書かれた墨書き土器も出土しているものの、現在はほとんどの遺構が湮滅している。

久安年間（1145-51）に常陸太田城主藤原通盛が移り、地名をとつて小野崎氏を名乗る。その後、10 代目の小野崎通胤が櫛形城に移った。小野崎氏退去後は、今宮氏や小野氏などの佐竹氏一門やその旗本の屋敷となったと思われる。



小野崎城跡復元図 青木義一
2017.1 (『続茨』より転載)

八百岐館跡（0179）

小野崎城から北西に 500m 離れたところに位置している。主郭は、東西約 50m、南北約 60m の方形型である曲輪 I であり、その北側には土塁跡があり、その他一部の曲輪等が残る。

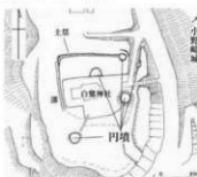
小野崎城主小野崎通胤の 2 男通房が南北朝期に築館したといわれている。3 代後の通茂は延徳元年（1489）芦名、伊達、白河、結城の連合軍と里美村深来の戦いで戦死し、この功により 4 代通老は石神城を与えられ、石神城に移った際に廃館となったと考えられる。



八百岐館跡図 高橋宏和
(『続茨』より転載)

今宮館跡（0131）

小野崎城から西へ 180m 離れた白鷺神社境内及び白鷺古墳群の範囲内に位置している。遺構としては、神社北側に高さ最大 1m の土壘、西側に幅約 1m の溝などが残っている。佐竹 16 代義舜の庶子永義が今宮別当となって居館し、修驗頭となり領内の山伏を統率したといわれています。佐竹義宣の秋田国替時に廃館となる。



今宮館跡図 高橋宏和 (『続茨』より転載)

小野館跡（0129）

南東方向へ約 1.1 km 先に小野崎城、南西方向に 500m 先に八百岐館跡が所在する。現存する遺構はないが、「字小野殿」と呼ばれる果樹園を含む南北に長い方形の土地区画が城域と推定される。

室町初期に佐竹義人の五男義森が居住して小野氏（または小野岡氏）を名乗り、天文年間に長男義高が小野（常陸大宮市）に移り、高野倉城を築城した際にこの館は廃館となったと思われる。

（青木）



小野館跡図 高橋宏和 (『続茨』より転載)

おおかどきたじょうあと
0132 大門北城跡 常陸太田市上大門町 現況：山林 別称：助川城 地図 21

市域中央部、源氏川の左岸、国見山から西に延びる標高約 130 m の尾根末端部に位置している。

構造は、山頂の本郭から西側に階郭式扇状に郭を配置する形式である。曲輪 I までの登城道は曲輪間を蛇行するように付けられ、土壇、堀切 A や堀切 B がある。切岸は約 5 m の高さがある。8 つの曲輪はいずれも 60 m × 15 m 程度の広さがある。曲輪 IV と V 間が低く、大手口の可能性がある。

「水府志料」によると、「佐竹氏要害の番所があった地という。または佐竹の家臣介川周防守という者の居所ともいう。」とある。築造者は不明であるが、小野崎通綱の第 2 子で、助川通定が居城としていたと考えられる。この地は、太田城と山入城の中間にあり、戦略的にも政治的にも重要な場所であったと思われる。(青木)

おおかどみなみじょうあと
0133 大門南城跡 常陸太田市下大門町 現況：山林 地図 21

市域中央部、源氏川左岸、北大門城より南へ 200 m 離れた国見山西側標高 173 m の山上に位置している。大門北城の出城であり、堀の内の館を両側の山から守る一翼を担ったものと思われる。

本郭は東西 30 m、南北 50 m ほどの長方形で、急斜面である東側を除いた三方に横堀を巡らしている。堀の規模は、幅 7 m、深さ 1.5 m ほどである。北側に虎口と土橋があり、尾根に沿って大門北城まで行くことができる。

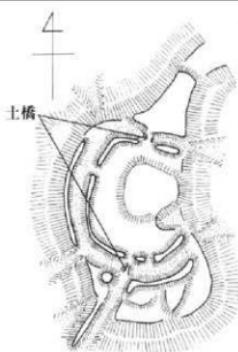
伝承では、小野崎一族の根本為房が居館し、5~6 代続いたと言われている。佐竹の乱で根本忠行は、北城の助川通高と抗争し、佐竹義治に攻められ一族 20 余人とともに討死し、大門南城の根本家は滅亡した。その館は、通常の子通満に与えられ、その二男滑川通本が居館とした。(青木)

大門南城跡縄張図 青木義一 2005.1 (『図茨』より転載)

0 50m



大門北城跡縄張図 青木義一 2004.2 (『図茨』より転載)



おおたじょうあと
0137 太田城跡 常陸太田市中城町 現況：宅地、公共施設地 別称：舞鶴城 地図 26

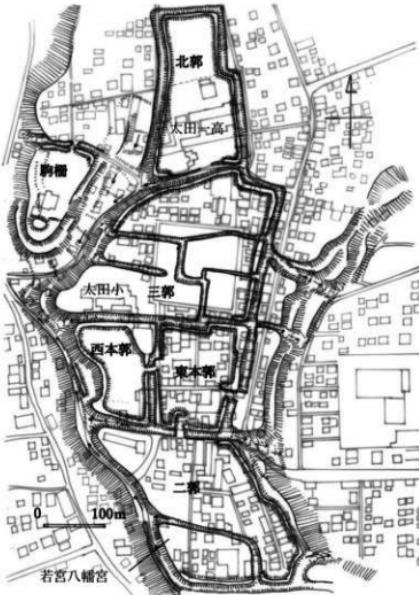
市街中心部、里川と源氏川に挟まれた南北に長い標高 38m の通称「鯨ヶ丘」と呼ばれる台地に位置する。

構造は鯨ヶ丘全域にわたる総構を持ち、常陸太田市立太田小学校校舎近くを本郭とした土塁と堀で囲んだ連郭式城郭である。現在する遺構は、小学校敷地内の土塁や斜面、太田病院付近の切岸、帰願寺の土塁などである。戦国大名の本拠地でありながら、いまだその全貌が解明されていない城郭である。なお、戦国時代の最大城域は、北郭は現在の太田一高のグランド、南は太田郵便局までの南北 900m、東西 300m、面積は約 19 万 m² の広さを持つと推定される。頼朝の佐竹氏攻撃や南北朝の騒乱では、佐竹氏は本城を放棄し金砂山城などに籠っていることから戦闘用の城ではなく、領内統治のための政性的性格を有していると考えられる。

令和元、2 年度に本郭の北側にあたる場所で行われた発掘調査の際には、南北に 2 回クランクしながら縦断している堀幅 8m、深さ 4m の全長 200m にもなる薬研堀（2 号堀）のほか 4 条の堀跡が確認された。2 号堀の築造時期は、戦国期と考えられる。本郭を分ける堀ではなく、その外郭を分ける堀としては大規模な堀跡であるため、戦国大名佐竹氏たる居城にふさわしい土木工事の痕であると考えられる。

太田城の築城は、天仁 2 年（1109）頃、藤原秀郷流の藤原通延が太田郷に入り、築城したのが始まりとされている。その後、佐竹 3 代隆義が太田城主藤原通盛（通延の孫）から城を奪い馬坂城から太田城に移った。その後、佐竹氏は金砂山合戦（1180）や南北朝時代の戦乱、佐竹氏一族である山入与義との内乱（1407）の際には、一時的に城を明け渡したが、天正 19 年（1591）に佐竹 20 代義宣が水戸城に進出するまで、都合 400 年にわたり佐竹氏代々の居城となった。なお、水戸城に移ったあとの太田城は、義宣の父義重が居城とし、「北城」とも呼ばれた。慶長 7 年（1602）の秋田への国替え以降は、水戸徳川家家老中山氏により管理され、その陣屋は「太田御殿」と呼ばれ、幕末期の絵図においても確認できる。

（山口）



太田城跡復元縄張図 青木義一 2020.7 (『茨3』より転載)

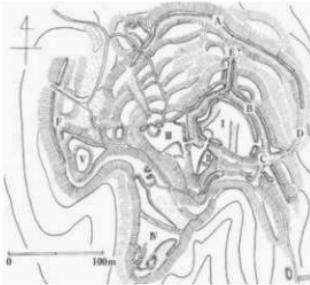
たわたりじょうあと
0135 田渡城跡 常陸太田市田渡町 現況：山林

地図 26

市域東部、里川左岸、標高約86mの田渡山の山頂に位置している。里川を挟み南西2.5km先に太田城跡がある。

主郭部は曲輪I・II・IIIの3つからなる。曲輪Iは東西80m、南北55mの規模。曲輪Iの南に馬出曲輪のようなIIがある。主郭部の南側、西側は急斜面で横堀ではなく、東側に深い堀切Cがあり、横堀Bは堀切Cに合流している。堀切はそのまま堅堀Dとなって斜面を下り、下の横堀Aに合流する。主郭部の南下に曲輪IVが展開する。西側には曲輪Vがあり、その西側にも土塁を持つ横堀Fがある。横堀Aは北側から東側にかけて構築され、幅5m、深さ最大2m、総延長約200mである。遺構は、ほぼ完存しており、城域は300m四方、傾斜の緩い北側斜面に二重の横堀を持つ特徴を有し技巧的である。

築城は、天文年間（1532-55）に佐竹氏分流の額田氏が築いたという伝承と内藤弥太郎氏が築いたという説がある。しかし、現在の姿は戦国後期のものであり、恐らく佐竹宗家が太田城の防衛用に整備した可能性が高いと思われる。（山口）



田渡城跡縹張図 青木義一 2004.1
(『図茨』より転載)

まさかじょうあと
0140 馬坂城跡 常陸太田市天神林町 現況：山林、畑地、宅地 別称：稻木城 地図 25

市域南部、山田川左岸の標高40mの台地の先端部に位置する。城域の東側には佐竹寺があり、南側には、水田地帯が広がっている。なお、太田城跡との距離は3kmである。

遺構の残存状況から東西400m、南北100mの規模であるが、南側斜面にも曲輪が幾重にも築かれていたという。本郭の東側には堀跡が残り、西側には高さ6m程の円墳を転用したと思われる物見台や切岸、横堀で囲まれた曲輪などが存在する。東側の佐竹寺との間に二郭が存在し、幅15mの堀跡が明確に残る。なお、曲輪が段状に配置されている。

平安時代、藤原秀郷の流れを汲む藤原（太田）通延一族の天神林氏刑部丞正恒が築いて居城し、その後、新羅三郎義光が佐竹郷を領有し、その孫昌義が馬坂城を居城とし、佐竹氏を称した。

佐竹3代隆義の時に本拠地を太田城に移した後は、子の稻木義清がこの地に居住していた。のちに佐竹14代義俊の子義成が居住し、地名をもとに天神林氏を称したという。その子義益の弟右京亮が染村に移り、魔城となったと言われている。（山口）



馬坂城跡縹張図 青木義一 2003.4 (『図茨』より転載)

かわいやかたあと
0142 河合館跡 常陸太田市上河合町 現況：畠地、宅地 別称：河合城跡 地図 26

市域南部、久慈川沿いの標高10mの微高地、JR水郡線河合駅周辺に位置していたと思われる。

宅地化により遺構はほとんど湮滅している。城郭遺構と思われるものは河合駅の北側や東側に土墨跡の痕跡が残るのみである。近くには「船渡」という字名が残り、渡し、河川港があったことが伺える。

伝承では、河合平六三郎忠遠の居城といわれている。応永年間の佐竹家臣「久慈西東の奉公衆」に川合氏の名があり、佐竹 19 代義重時代の「一門乃縁続之衆」36 騎中に川合伊勢守、「幕下之衆」48 騒中に川合能登守の名がある。河合の地は延徳元年(1489)に石神小野崎氏に与えられているため、この時点では川合氏はこの地を離れ、廢城となったか、石神小野崎氏の代官が在城していたかのいずれかと考えられる。(青木)



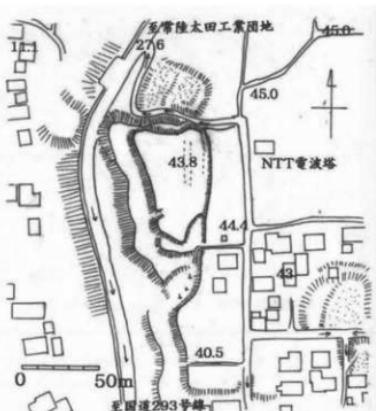
河合館跡現状図 青木義一 2003.1、2018.2 (『茨3』より転載)

おかだやかたあと
0143 岡田館跡 常陸太田市岡田町 現況：畠地、宅地 別称：西岡田館 地図 26

市域東南部、茂宮川と亀作川に挟まれた標高21mの台地上の西側に位置している。

主郭部は東西最大約55m、南北約80mの台形型である。主郭部の3.5m下、北側から西側、南側まで帶曲輪が作られ、切岸が明瞭である。主郭部の外側は、約1.5m高くなっている、その外側は堀となっていた可能性が高い。

伝承では、平安時代末期に佐竹昌義の子親義が築館し、岡田冠者と称したと伝えられる。親義は、信濃國に移り、木曾義仲の妹を娶り、その挙兵に参加し、寿永2年(1183)5月に討死したという。古くから親義は佐竹一族ではなく、義光の子で信濃國岡田の住人とする説もある。(青木)



岡田館跡縄張図 青木義一 2020.5 (『茨3』より転載)

たかいやかたあと
0144 高井館跡 常陸太田市小目町 現況：畠地、宅地 別称：後岡田館 地図 26

市域東南部、茂宮川と亀作川に挟まれた標高 21m の台地上の西側、岡田館跡から南東へ 580m 離れた場所であり、熊野神社が所在する。

熊野神社から見て南側の曲輪 I と西側の曲輪 II からなる。曲輪 I は東西約 50m 、南北約 100m の広さである。2m ほどの高さの土塁やその外側に堀跡 A があることから主郭部の可能性が高い。その周囲にも土塁や堀跡と思われるものがあるため、複数の曲輪が存在していたと想定される。曲輪 II は、尾根状台地を堀切 B で遮断した、東と南側に土塁を持つ約 25m 四方の空間である。曲輪の西側下には物見程度の小規模な曲輪も存在している。

伝承では、天文期の築館で、於曾能氏、中村氏の居館とか、佐竹義憲の子小野右衛門義森が居館し、岡田氏を称したとも伝えられる。(青木)



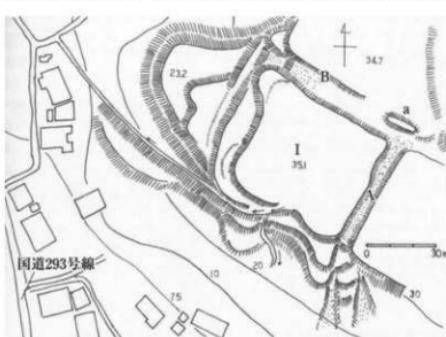
高井館跡縦張図 高橋宏和 2007.4 (『続茨』より転載)

おめやかたあと
0145 小目館跡 常陸太田市小目町 現況：山林 別称：東岡田館 地図 26

市域東南部、茂宮川と亀作川に挟まれた標高 27m の台地の先端部、高井館跡から南東へ 500m 離れた場所であり、近くには鷹房神社が所在する。

城域は、東西約 120m 、南北約 100m の広さを持つ。曲輪 I は約 70m × 約 60m の広さがあり、東側と北側に幅約 8m の堀跡 A・B が確認できる。また、北東側に高さ約 2m ほどの土塁 a が残り、西側と南側の斜面部に腰曲輪が展開する。

築造者は不明であるが、伝承では、於曾野義候が応永 10 年 (1403) 太田郷より久慈東郡小目邑に移り居住し、小目城主となり、三百貫を食む、と残っているものや岡崎周防守が城主であるという記録がある。(山口)



小目館跡縦張図 青木義一 2004.12 (『続茨』より転載)

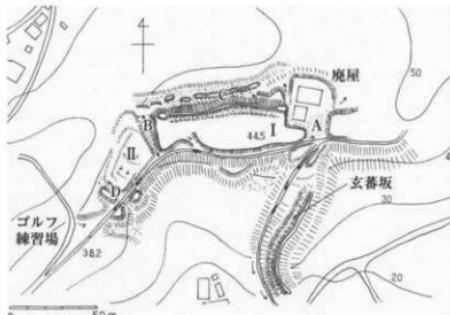
うすいやかたあと
0147 薄井館跡 常陸太田市大森町 現況：山林 別称：大森館

地図 26

市域東部、西側に真弓团地、東側には常磐自動車が通る標高45mの尾根状台地上に位置している。谷津を隔てた約400m先には岡部館が所在する。

遺構は、主郭部である曲輪Iは東西約80m、南北約40mの広さがあり、その東西と北に堀跡がある。東の堀跡Aは改変を受けている。西の堀跡Bは尾根状台地を遮断する役割を持つ。曲輪Iの北側を土塁が覆い、その下に横堀Cがある。堀跡Bの南西側の曲輪IIは不整地であり、さらに南西側に堀切Dが存在する。

「水府志料」によると、「薄井玄蕃が居たという。佐竹氏が秋田に移るのに従い廃されたという。」
とある。(山口)



薄井館跡縄張図 青木義一 2005.2 (『続茨』より転載)

おかべやかたあと
0148 岡部館跡 常陸太田市大森町 現況：山林、高速道路

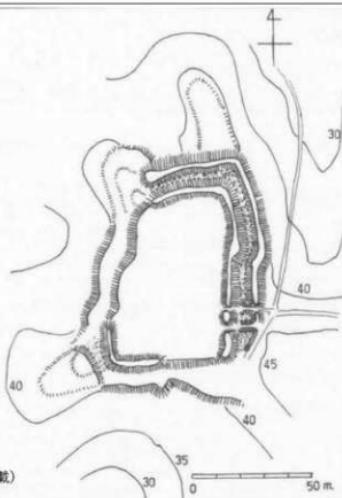
地図 26

市域東部、薄井館の谷津向かいの標高45mの台地上に位置し、城域の西側に常磐自動車が南北に縦断している。

館跡の西側半分は湮滅しているものの、東側の主郭部には二重土塁、二重堀や土橋、腰曲輪が確認できる。常磐自動車建設工事前の調査によると東西46m、南北70mの不整形な長方形の曲輪であったという。

築城者は、佐竹19代義重の5子義綱(重義)の子孫岡部五郎重光であり、永禄から天正頃に居住していたと思われる。

しかし、伝承では、薄井玄蕃頭の兄弟である「ホイ様」が住んだ小屋の場所とも言われている。(山口)



岡部館跡縄張図 青木義一 2012.11 (『続茨』より転載)

市域南西部、山田川左岸の標高 50~70m の丘陵、西側に位置する。城内に鹿島神社が所在する。

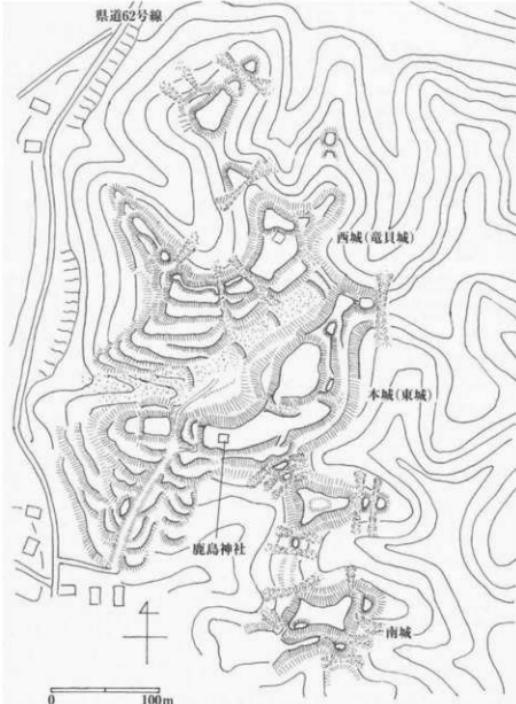
城域は大きく 3 つに分けられ、南北 600m、東西 300m の広大な範囲に及ぶ。遺構はほぼ完存しており、県北地域をみても有数の城郭遺構である。

本郭は鹿島神社を中心とする曲輪であり、南北 150m、東西 300m の規模をもつ。本郭の北側の谷津を隔てた場所にも本郭同様の規模をもつ曲輪が存在し、東西に 3 つの曲輪が並ぶように配置され、曲輪間が堀切で隔てられている。この西城の北側にも曲輪があり、内部に一段高い土壇があり、北方面を監視するための物見台として使われていたと考えられる。また、南側にも 2 つの曲輪が尾根状に配置され、周囲は堀切と堅堀が造作されている。最南端の曲輪の南側には全面に土塁を持つ横堀がある。なお、本郭の曲輪が古く、戦国末期に太田城跡の防衛拠点として、西側と南側に城郭が拡張整備されたと考えられる。

鎌倉時代に大掾仲幹が築館し、久米氏を称したとの伝承もあるが不明である。のちに、小野崎筑前守通種が築城し、その子孫が久米氏を称したともいわれている。

文明 10 年（1478）山入義知を中心とした山入一揆の来攻があり、城主義武と小田野義安が討死し、落城した。同 12 月には太田城より出撃した義治が義知を打ち取り、城を奪い返し、義信に久米城を与えていた。

その子孫の義憲は、慶長 4 年（1599）に太田で他界し、子がなかったため、佐竹義重の子義兼が相続し、佐竹氏の秋田国替で出羽に移り、城は廃城となった。（青木）



久米城跡縄張図 青木義一 2004.1 (『図茨』より転載)

おおはしじょうあと
0150 大橋城跡 常陸太田市大森町・日立市大和町 現況：山林

地図 26

日立市との境の市域東部、茂宮川を眼下に望む標高 30m の丘陵上に位置している。麓には鹿島神社が所在する。

東西方向に 3 つの曲輪が並び、横堀や豊堀で区画されている。曲輪 I は東西 120m 、南北 50m の台形である。郭内に大橋古墳があり、見張台として使用されていた可能性もある。曲輪 I と曲輪 III の間の堀跡 A は高さ最大 4m 、幅 8m あり、曲輪 I を囲んでいる。曲輪 II の北西側にある堀切 B は、曲輪 III の北東側で豊堀となるように造作されている。東側の開口部 C は大手口と思われる。

伝承によると、大橋城には茅根城を居城とした茅根氏の分家にあたる茅根弾正が居住していたと伝えられている。その後、戦国時代末期に久米城主佐竹義憲が岩城氏の後見のために、大橋城より東の久慈城に入る大橋城も佐竹北家の所領として再編された。その際、猿田氏が佐竹義憲によって、文禄 4 年（1595）に大橋郷へ移されたことが明らかとなっている。廃城になったのは、佐竹氏の秋田国替の時と考えられる。（青木）

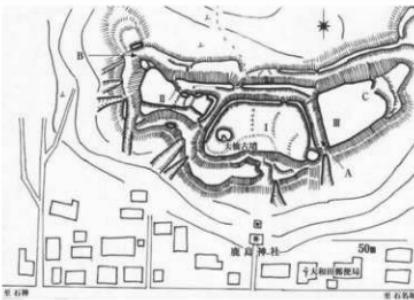
たかがきじょうあと
0154 高柿城跡 常陸太田市高柿町 現況：山林、工場敷地 別称：御城

地図 25

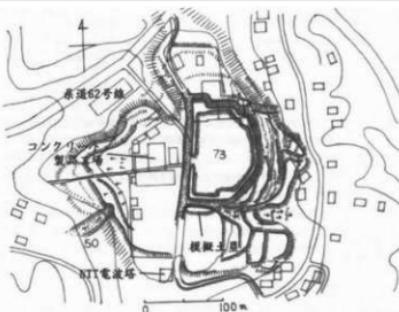
市域西部、山田川右岸の標高 72m の台地上東側に位置する。主郭部は工場となっているため、遺構はほぼ湮滅状態である。

城域は、残存遺構から推定すると東西約 250m 、南北約 350m の範囲内と考えられる。遺構としては、東斜面に帶曲輪群と北東端にある堀跡が残るのみである。北西端に土壇があったとされており、山田川流域が一望できるため櫓が建っていたと推測される。

室町時代初頭、大掾氏の流れを組む山本忠幹が築城したという。のちに松平城を追われた松平康信が高柿城に移り住み、高柿氏を称したという。なお、秋田への国替えに伴って廃城になったと伝わっている。（山口）



大橋城跡構造図 五十嵐雄大 2016.2 〔続茨〕より転載)



高柿城跡推定復元図 青木義一 2019.1 〔茨3〕より転載)

としかずりゅうがいじょうあと
0155 利員龍貝城跡 常陸太田市中利員町 現況：山林、墓地

地図 20

市域西部、浅川左岸の標高 120m の丘陵上に位置する。本郭南西側の麓には天満宮が所在する。

城域は、東西約 120m、南北 150m の規模と推定される。曲輪 I は縦 40m、横 10m の規模である。曲輪 I 北側の堀切が大規模で二重堀切となる。丘陵上に平場を階段状に配置する形態である。なお、西側尾根にも堀切と数段の平場を作り出しているだけの簡素な遺構が存在する。

『新編常陸国誌』によると、河合備前守の居館があったとされる。最後の城主、河合左太夫は文禄 4 年（1595）この地で 200 石を宛がわれている。

（青木）



利員龍貝城跡縄張図 遠山成一 2017.2 (『続茨』より転載)

たきゅうじょうあと
0158 武生城跡 常陸太田市下高倉町 現況：山林

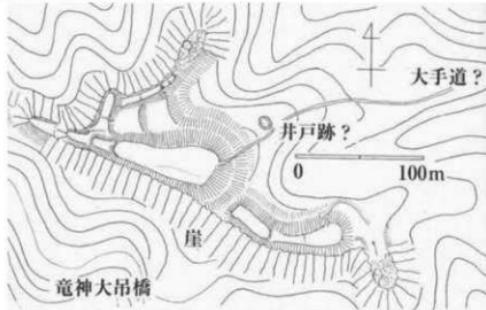
地図 15

市域北部の山田川右岸標高 350m の山の頂上付近に位置する。南側に竜神ダムを見下ろせる。城跡のある山の周囲は絶壁であり、切り立った岩盤が露出している。

本曲輪は、東西 80m、南北最大 40m の広さがある。東側 5m 下にも曲輪があり、北側にも 2 段の曲輪がある。本曲輪の間には堀切がある。明確な遺構はそれほどないが、西金山同様自然地形の要害性を活かした詰めの城であると考えられる。

鎌倉時代に国井經義がこの地方を領して高倉氏を名乗り、ここに館を築いて居住したと伝えられている。延元元年（1336）楠木正家が武生城による佐竹義篤と戦った。その後、佐竹氏家臣石井弾正、伝説では佐竹義勝も居住していたとされているが不明な点が多い。

（山口）



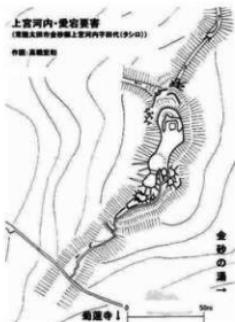
武生城跡縄張図 青木義一 2004.2 (『図茨』より転載)

かなきじょうあと
0156 金砂城跡と周辺城館 常陸太田市上宮河内町 現況:畠地 別称:西金砂城 地図20

市域西部の山間部、標高約400mの西金山とよばれる山頂付近に位置し、本郭の中心は、西金砂神社である。

城域は、東西300m、南北700mになり、城の北端は標高410m付近にもなる。土塁や堀跡といった明確な遺構はないが、周囲は絶壁であり、地形そのものを要害とした詰めの城である。山頂部付近には数段の曲輪が認められる。

築城は平安時代、佐竹氏が治承4年(1180)、源頼朝と佐竹氏による金砂合戦の際に佐竹氏が立て籠った山城である。



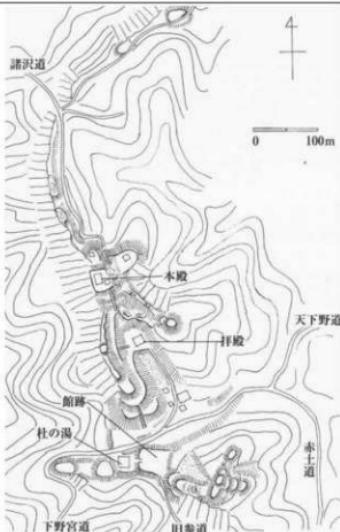
上宮河内愛宕館跡縄張図 高橋宏和

金砂山城の南西約2kmにある愛宕社の建つ標高232m、比高120mの山にあり、神社の建つ主郭部の背後の尾根に堀切を置く構造や館の規模等が赤土垣館と似ている。本館跡も南北朝期の瓜連合戦か山入の乱の頃に整備され、使用されたのであろう。山方面から金砂山城に向かう道を監視する館である。

赤土垣館跡 (0181)

金砂山城の南約3kmにある天満宮の建つ標高190m、比高80m山にあり、神社の建つ主郭部の背後の尾根筋に堀切を設けただけの防御を地形に頼る簡素で小規模な城郭である。

南北朝期の瓜連合戦か山入の乱の頃、使用されたと推定される。金砂山城に通じる赤土道を監視する館である。(青木)



金砂城跡縄張図 青木義一 2006.2 (『図説』より転載)

上宮河内愛宕館跡 (0180)

金砂山城の南西約2kmにある愛宕社の建つ標高232m、比

高120mの山にあり、神社の建つ主郭部である。背後の

尾根に堀切を置く構造や館の規模等が赤土垣館と似ている。

本館跡も南北朝期の瓜連合戦か山入の乱の頃に整備され、使用されたのであろう。山方面から金砂山城に向かう道を監視する館である。



赤土垣館跡縄張図 高橋宏和

やまいきじょうあと
0159 山入城跡 常陸太田市国安町 現況：山林 別称：国安城

地図 20

市域中央部、山田川右岸の標高 185m の要害山一帯に位置している山城である。水府村教育委員会による発掘調査が実施されており、現在は市の指定史跡である。

城域は、山頂から南東へ向かう尾根の約 350m にわたる一帯に築かれている。遺構は、5 つの曲輪が尾根状に配置され、その間に堀切、堅堀や土塁などが確認できる。山腹から山麓にかけて多数の段々地形が見られるが、後世の改変によるものも多く、どこまで遺構であるかは判別できない。曲輪 I の北側には、高さ 7m にもなる堀切を含む 3 条の堀切を設けて、尾根を遮断し、防御面を高めている。

延元年間（1336-40）西野民部大夫温通が築いたと伝えられている。その後、佐竹惣領家より分立した庶子家である山入師義が修築して居住した。山入氏初代師義は、足利尊氏に従って西国九州に転職し、活躍していたこともあり、1989 年の調査時、大量に出土したカワラケはさることながら、青磁器や染付である中国からの渡来磁器や瀬戸・美濃の国産の天目茶碗片等も多く出土している点も注目すべきである。

応永 14 年（1407）、惣領家佐竹義盛の死去に伴う相続が原因となり、佐竹惣領家と佐竹一門以外からの嗣子に反対した山入与義を中心とする反対勢力との対立が生まれ、この城を拠点とし、佐竹惣領家と約 100 年にわたり抗争を繰り広げた（山入一揆）。

しかし、永正 3 年（1506）について佐竹惣領家により落城した。山入城の廃城は山入一揆後とされているが、発掘調査時にのちの時代の遺物や 2 層の隅櫓らしき建物跡が確認されていることから秋田への国替えまでは、太田城跡の北の防衛地点として存続していた可能性もある。（山口）



山入城跡縹張図 本間明樹 〔『図説』より転載〕

まつだいらじょうあと
0160 松平城跡 常陸太田市松平町 現況：山林、畠地、宅地、寺社境内地

地図 20

市域中央、山田川左岸、長松寺のある標高 65m の台地上に位置している。

本郭から北にある稻荷神社との間に堀があり、台地の縁辺、北側と西側に土塁が確認できる。主体部は宅地と畠になりほぼ湮滅状態である。規模が東西約 60m、南北約 100m 程度の方形をしている居館というべき性格の曲輪が南側の一段低くなっている場所に存在していたという。

山入与義の長男義綱が応永年間（1394-1427）に築き、初代城主として居城した。3 代城主久高の代になると、国安城の山入義藤、氏義は佐竹本家の義舜と対立。久高は、本家に与して、金砂城などで争いを繰り返したが、この時討死し、松平城主は久高の長男康信となつた。康信は山入氏と対抗したので、松平を追われ、高柿に移り、その子信広の代まで居住し、高柿を名乗つた。信広の子信久は佐竹義宣に従い軍功を立てたので、祖父の地を与えられ、再び松平城に復した。慶長 7 年（1602）の佐竹氏の秋田国替え時に廃城となった。（山口）



松平城跡縄張図 青木義一 2004.2 〔『続茨』より転載〕

まちだじょうあと
0161 町田城跡 常陸太田市和久町 現況：山林

地図 20

市域中央部、山田川左岸の標高 130m の尾根の山頂付近に位置する。

構造は、南北 2 つの頂部に曲輪を置く城である。遺構としては、曲輪、土塁の残痕、切岸、堀跡などが見られる。曲輪 I は東西約 40m、南北最大約 15m の平坦面となつていて、曲輪 I より南側 20m 下に曲輪 II がある。主体部が造成された場所は、山田川との比高差が 90m ある。3 本の谷津を利用して防御力を高めている。出城の性格を持つ城郭と考えられる。

築城時期は不明。『新編常陸國誌』によれば、山入刑部大輔義勝が居住していたといわれている。応永 23 年（1416）上杉禪秀が足利氏に背いた時、山入与義が上杉に味方した。そのため足利持氏に町田郷一带と小里郷を没収され、結城の小峰三河守の手に渡つた。その後、山入氏が再び奪い、佐竹内紛の際は、山入氏の重要な拠点の一つとなる。しかし、永正 2 年（1505）この内紛も山入氏の滅亡により終わる。その後、佐竹 16 代義舜は、南酒出義藤を町田城に配置し、義藤は町田氏を名乗つた。義藤の養子、義資が出羽に移って廃城となつた。

（山口）



町田城跡縄張図 高橋宏和 2012.2 〔『続茨』より転載〕

けがのやかたあと
0162 天下野館跡 常陸太田市天下野町 現況:山林、畑地、宅地、墓地 地図 20

市域北西部、山田川右岸の谷津に挟まれた標高180mの尾根の頂上付近に位置する。城域の東側は、天下野街道（県道33号線）が南北方向へ通っている。また、城内を西金砂神社への参拝道が通っている。

主体部である曲輪Iの周囲には、堀切や竪堀、切岸などが確認できる。曲輪Iより40m下った南東側には平場があり、「館」という字が残る。南北を繋ぐ街道沿いにあるため、監視を行うための物見台的な性格を持ついる城跡だと考えられる。

伝承では、館の築造者は源義家ともいわれているが、「水府志料」では、建武年間（1334-37）滑川右衛門という者が居住し、佐竹氏が秋田へ国替えの際、右衛門及び八衛門という者は付き従て秋田へ移り、その子越後いう者はこの地に留まつたという。とある。滑川氏は山入の乱では山入方に味方していたことが文献で確認されている。山入の乱末期に佐竹氏に鞍替えしたようで、乱後、高倉、中染、国安に所領を貰っている。その後、滑川氏は佐竹東家に仕え、各地を転戦、高倉衆の集結地としてこの館が使われた可能性が高いと思われる。（青木）

はやしのしたじょうあと
0163 林の下城跡 常陸太田市中染町 現況:山林 別称:曾目城 地図 20

山田川と染川に挟まれた標高159mの独立した山一帯を城域とする。

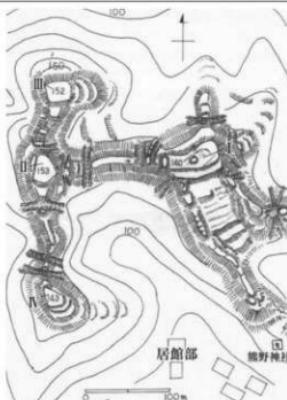
城域は直径300mの範囲であり、遺構はほぼ完存している。山田川からの比高は約100mを測り、南側と東側は染川が天然の堀となっている。4つの頂部にそれぞれ曲輪が存在し、曲輪Iが最も広いため主郭と考えられる。曲輪Iの西側に曲輪IIが存在し、南北一列に曲輪IIIと曲輪IVが並び、各曲輪間は堀切により遮断されている。東西南北の4つの道が交わる地点であるため、監視目的の性格を持つ城と考えられる。

築造時期は不明であるが、山入城の支城として対岸の西染城とともに山入氏により築かれたものと考えられる。

山入氏滅亡後は、天神林義益の弟右京亮の居城となった。廢城は、佐竹氏の秋田国替時とも伝えられるが、文禄4年に中染は義宣の蔵入地とされ、同年9月に天神林越前守は他の土地を宛がわれているので、この頃には廢城となっていると思われる。（青木）



天下野館跡縄張図 五十嵐雄大 2015.2
(『続茨』より転載)



林の下城跡縄張図 青木義一 2004.2
(『続茨』より転載)

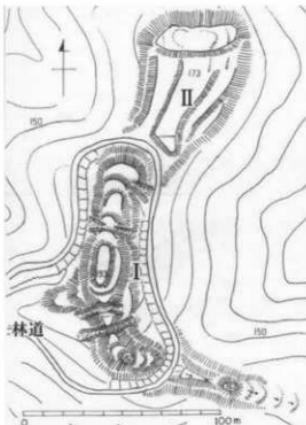
にしそめじょうあと
0164 西染城跡 常陸太田市西染町 現況：山林

地図 20

山田川右岸の標高 190m の山の山頂部に位置する。

曲輪 I は、曲輪 II より 20m ほど高い山頂部に位置し、階段状に小さな曲輪が造作され、南側には堀切が見られる。曲輪 II は約 50m 四方の広さがあり、北橋が若干高くなる。対岸の林の下城跡とともに物見や狼煙台の役割をした城跡と考えられる。

城主や年代は不明であるが、山入城の北方面を守る物見の城として山入氏により築かれ、緊急時の住民の避難場所も兼ねていたのではないかと推測される。山入氏が滅亡し、佐竹氏の支配が安定した時期には、城の役目は終了し、廃城になったのではないかと考えられる。(山口)



西染城跡縄張図 青木義一 2004.2 (『続茨』より転載)

たなやじょうあと
0165 棚谷城跡 常陸太田市棚谷町 現況：山林

地図 20

山田川右岸の要害山の南側の標高 120m の山の山頂部付近に位置している。谷を挟んだ北側の山には山入城が存在する。

頂部には曲輪 I が造作され、いくつかの小さな曲輪が西側の尾根上に配置されている。その西側の頂部には曲輪 II が存在している。なお、曲輪 I の北側には堀切が見られ、曲輪 II 付近にも堀跡がみられる。ただ、どこまでが城域かは、はっきりしない。

暦応年間（1338-41）大槻備前守鎮道が築城し、のち山入与義が居住したと伝えられている。与義の死後、祐義、義貞、義藤とここに住み、義貞は文明元年（1469）棚谷城より山方城に移り、義藤が棚谷城主となった。延徳4年（1492）佐竹軍によってここを追われ落城したといわれているが定かではない。（青木）



棚谷城跡縄張図 青木義一 2004.2 (『続茨』より転載)

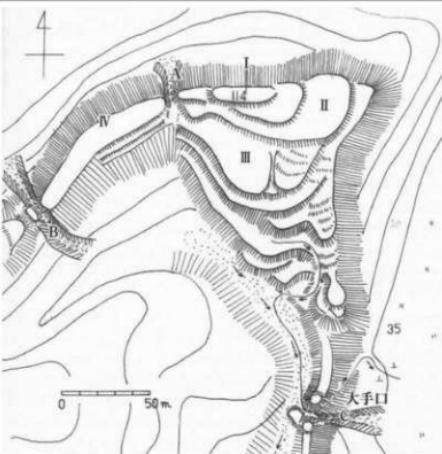
わだごやじょうあと
0166 和田小屋城跡 常陸太田市松平町 現況:山林

地図 20

市域中央部、山田川右岸の標高110mの山の山頂部に位置している。

山頂部に曲輪Ⅰがあり、その下段に曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲと続き、南側に下がっていくと大手口や堅堀C、門跡のような場所がある。曲輪Ⅰの西側には堀切Aを挟み、曲輪Ⅳが配置されている。曲輪Ⅳの西端には深さ約5mの二重堀切Bが造作されている。

築城者や築造時期は不明であるが、山入城の南を守る支城と考えられる。記録では永享7年(1435)に小野崎越前三郎殿(通房)にあてた足利持氏の感状の中に「和田城合戦」という記載がある。(青木)



じゅうろうやまやかたあと
0167 十郎山館跡 常陸太田市東蓮地町 現況:山林

地図 25

山田川右岸、標高109mの尾根先端部付近に位置し、北に300m向かったところに和田小屋城が存在している。

尾根頂部に曲輪Ⅰが造作され、その下段に曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲと階段状に配置されている。曲輪Ⅲの南側には堀切跡も見られる。ただ、全体的には耕作や土取などにより明確な遺構はみられない。

「水府志料」にも「東蓮寺村:古城あり。「十郎山」という地にあり。何人の居所か不明。」とあるように築造時期、築造者とともに不明である。伝承では、金砂山合戦時に鎌倉勢により焼かれたという言い伝えはあるが、確証はない。(青木)



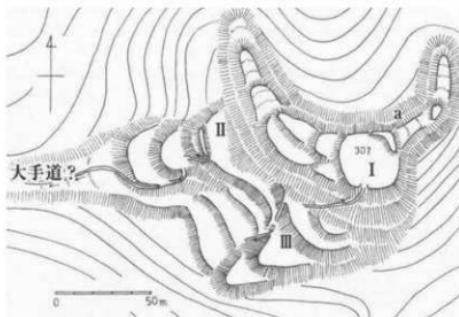
十郎山館跡縄張図 青木義一 2005.2 (『茨3』より転載)

たてやかたあと
0168 館館跡 常陸太田市大中町 現況：山林、公共施設地 別称：大中館 地図 16

市域北部、里川左岸の標高 310m の山頂に位置している。東の多賀山地から谷に張り出した尾根末端部にあり、北側と南側が浸食谷となっている。

山頂部の曲輪 I は径約 25m の大きさである。東側には物見台と思われる土壇 a がある。曲輪 I 下段、南北側に曲輪 II・III と尾根上に配置されている。切岸により高低差にメリハリがある。段郭が主体であり、堀切は確認できない。土壇は曲輪 II の西側に造作されている程度である。

築城者については、不明。館跡の遺構からみると、一時的に居住から離れて立て籠もる山城であると考えられる、築城期は、室町時代の築城であろうと思われる。(青木)

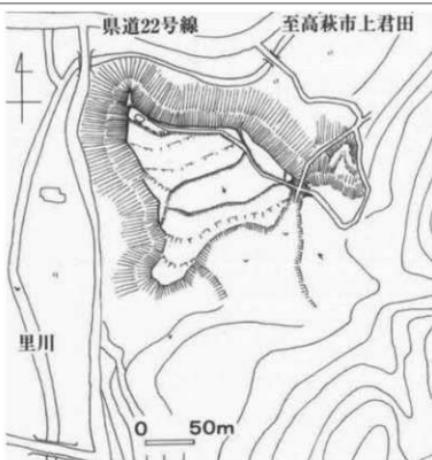


うえのだいやかたあと
0170 上の台館跡 常陸太田市徳田町 現況：山林、畠地 地図 9

市域最北部、里川左岸の標高 367m の台地の突端に位置する。北西面は里川の浸食を受けて急断崖をなし、台地裾を流れる里川との比高は 60m に達する。

3 段の曲輪からなり、東西約 70m、南北約 40m あり、比較的平坦で広い。北端側が高く、土壇があり北西端に稻荷社がある。土壇上から西側、北側の眺望がよく、明らかに街道監視の機能がみてとれる。内部が広いため、宿营地又は集合場所であった可能性もある。登城口は東側にあったと思われ、虎口と思われる場所もある。

伝承では、中野丹後の居館があったと伝えられている。(青木)



上の台館跡縄張図 高橋宏和 2008.1 (『続茨』より転載)

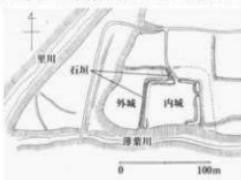
おざとじょうあと
0169 小里城跡と周辺城館 常陸太田市小中町 現況：水田、畠地

別称：うす葉城

地図 9

里川左岸、薄葉川が南に流れる河岸段丘上に位置し、城域の西側には棚倉街道である国道 349 号線が南北に通っている。

小規模な平城であり、政庁的な性格を持つ城跡と考えられる。本郭の西側には、高さ 1m ほどの石垣が 40m にわたり造作されている。北側にある土橋も石垣で補強されている。北側から東側にかけて、堀跡があったというが現在は確認できない。里川側には高さ 6m の切岸があり、その下は、腰曲輪となっている。



小里城跡構張図 青木義一
2004.2 (『図茨』より転載)

「水府志料」によると、天正の初期岩城氏の被官白戸右馬之介というものが居住したとある。のちに佐竹義舜の孫今宮光義の居城となる。ただ、文亀年間以降、小里地方は岩城氏の支配下にあったことから、今宮氏居城説には疑問が残る。小里城は、知行所支配の拠点として、岩城領の最前基地として白土右馬之助によって築城され、その子孫が岩城氏改易まで居城していた可能性がある。

羽黒山館跡 (0176)

里川左岸の標高 293m の山頂部に位置している。城域の中心部には羽黒神社が鎮座している。なお、北西方向に 700m 先に小里城がある。小里城防衛と詰城の役割をもっていると考えられる。



羽黒山館跡構張図 高橋宏和

館の台館跡 (0174)

里川左岸の標高 279m の尾根の頂点に位置している。小里城の北東 450m の距離にあり、小里城を眼下に見下ろせる。遺構は尾根の頂部にあり、東西 70m、南北 38m の径をもつ長円形の平面を有している。小里城の物見台及び交通監視としての役割をもった砦であると考えられる。



館の台館跡構張図 高橋宏和

小里富士山城跡 (0182)

里川左岸の標高 562m の山（通称「富士山」）に位置している。なお、西へ約 1.2km 先に小里城があり、比高差は 320m にもなる。城は、峰全体におよび、山頂の岩山に富士権現が祀られる径約 7m の物見台と思われる曲輪 I があり、そこから約 13m 南下に約 25m 四方の広さの曲輪 II がある。ここから南西の尾根に曲輪群が配置されている。曲輪 I の西下の堀切 B を介し、西尾根にも曲輪群が配置されている。また、東下には堀切 A があり、その東に径約 40m の広い曲輪 III がある。築造者や築造期は不明であるが、場所から推定すると山入の乱で佐竹氏が弱体化した頃、岩城氏が里美地区を占領し、支配拠点として小里城を築いた時、その詰めの城として整備した可能性がある。（青木）



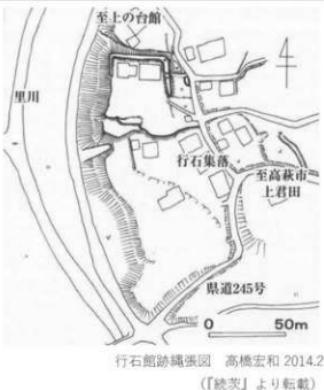
小里富士山城跡構張図 青木義一
2019.12 (『茨3』より転載)

なめしやかたあと
0171 行石館跡 常陸太田市小妻町 現況：畠地、宅地 別称：荒蒔城 地図9

市域北部、里川左岸の標高 273m の河岸段丘の縁辺に位置する。行石集落が城域にある。

宅地化により遺構はかなり失われているが、台地縁部北側に高さ最大 4m の土塁と堀がコの字型に残っている。土塁内部は、東西 20m 、南北 25m で方形に近い平面を有する単郭遺構である。棚倉街道や太平洋側へ向ける街道を監視する目的をもつ城館であったと考えられる。

伝承によると、室町時代、館主は荒蒔氏であったとされている。荒蒔氏は大子黒沢城主の荒蒔氏と同じ一族である。戦国時代、里美地区は岩城領となっていたため、岩城氏に属する館とも思われますが、棚倉街道は佐竹氏の奥州への侵攻路であり、館の帰属については疑問が残る。(青木)

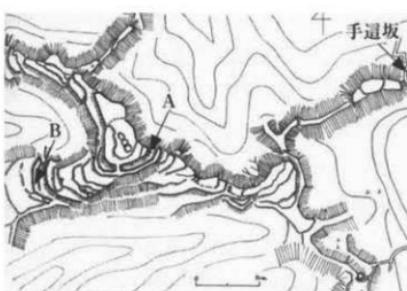


なかぞめようがいいやまじょうあと
0183 中染要害山城跡 常陸太田市中染町 現況：山林 地図 20

山田川左岸、染川との間にある標高 150m の山頂部に位置している。南へ 750m 行ったところには林の下城（曾目城）が存在している。

単郭構造、主郭側に 5m 、南側に 2m の深さがある堀跡 A が造作されている。この堀は北側で帯曲輪となる。主郭の西側には帯曲輪群があり、その先に横堀 B が造作されている。城の東には「手還坂」といわれる切通し道がある。交通の要所であるこの地の街道を監視するための性格を持つ山城であったと考えられる。

築城時期は不明だが、曾目城の支城と推定され 15 世紀に麓で行われた合戦に関わった可能性もある。山入の乱後、滑川氏がこの山を所領として貰っており、今の姿は滑川氏によって整備されたものであろうと推測される。滑川氏は佐竹東家の家臣として依上、南郷で活躍した。戦国時代、「染衆」の集結地とも考えられている。天正 18 年頃には廃城になったと思われるが、本郭南東の平場は中世金砂山神社の田楽場と伝えられ、江戸時代のある時期まで神事的な儀式を行っていた可能性がある。(青木)



中染要害山城跡縄張図 五十嵐雄大 2015.2 (『続茨』より転載)

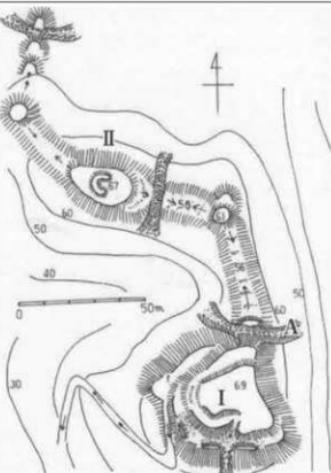
はなふきじょうあと
0184 花房城跡 常陸太田市花房町 現況:山林

地図 25

市域西部、浅川と久慈川に挟まれた標高 69m の山に位置している。

曲輪 I が墳頂部に造作され、北側の物見と考えられる II に続く尾根が堀切 A により分断されている。この構造から北朝方佐竹氏の金砂山城、武生城がある北または北東を意識した城であることがうかがえる。さらに曲輪 I の南側に虎口があることから南東方向の瓜連城を拠点とした南朝側が築城し、使用した可能性が高い。

南北朝時代に起こった瓜連合戦において南朝方の那珂通辰が陣を張ったと伝えられている城である。(青木)



花房城跡縄張図 青木義一 2006.2 (『続茨』より転載)

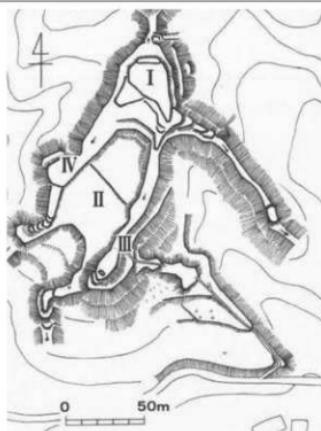
にしごうとやかたあと
0185 西河内館跡 常陸太田市西河内上町 現況:山林

地図 21

市域中央山間部の里川の支流左岸、標高 227m の山の墳頂に位置している。

墳頂部に曲輪 I 、南西方向に展開する 2 本の土壘状の尾根に囲まれた 40m 四方の曲輪 II だけの自然地形を利用した簡素な造りである。

築城者は不明。この地は、3 方面に軍を展開することができる要衝の地であるため、一時的な臨時の城、あるいは軍事的宿泊地ではなかったかと考えられる。城として機能した時期は、この地方に戦乱があった頃(山入の乱頃か)ではないかと思われる。(山口)



西河内館跡縄張図 高橋宏和 2015.3 (『続茨』より転載)

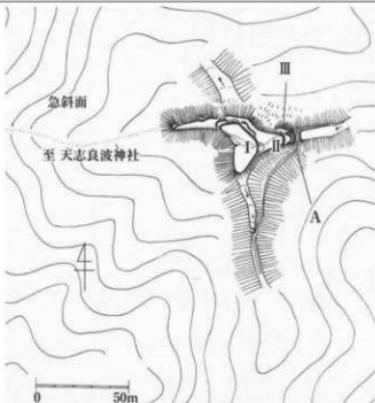
しらわようがいあと
0186 白羽要害跡 常陸太田市白羽町 現況：山林

地図 26

白羽要害跡は、里川左岸の標高 229m の山に位置している。この付近には白羽館があったといわれているが、場所や遺構は判明していない。その白羽館の詰めの城と推定されているのが、白羽要害である。

遺構は、山頂部に曲輪Ⅰがあり、比較的平坦に加工されている。

築城者は不明。永正 14 年（1517）の「薩都宮奉加帳」に「白羽七郎太郎」という者の名があり、関係している可能性がある。佐竹氏の支配が安定した頃は使われておらず、山入の乱でこの地方が不安定な頃に緊急時の避難場所あるいは物見、観煙台として築かれた可能性がある。（青木）



白羽要害縄張図 高橋宏和 2015.1 〔『続茨』より転載〕

ほりのうちやかたあと
0187 堀の内館跡 那珂市菅谷 現況：宅地

地図 31

堀の内館跡は那珂市菅谷字堀之内に所在する。城館の北・東・南に谷状低地が入り込み、台地の先端のような場所に位置している。

主郭は東西約 50m、南北が西辺約 30m、東辺約 40m の台形を呈している。この主郭の周囲を 12 の曲輪で囲むという構造になっている。発掘調査の際には豊富な出水が確認されており、水利との関係が指摘される。調査対象となった曲輪からは井戸跡が検出されていることや、現在も水路として利用されている堀の存在、住居跡状の遺構も検出されていることを踏まえると、水の活用および居住を想定した城館の様子をうかがい知ることができる。

「大和田氏系図」によれば、城主は大和田主水正であり、この大和田氏は鎌倉幕府執権北条時宗の弟宗頼が祖とされている。（藍原）



堀の内館跡縄張図 作図：高田敦史 原図：藍原怜
〔『常中』3 より転載〕

0189 頬田城跡 那珂市額田 現況：山林、畑地、宅地 別称：久慈見城

地図 31

額田城跡は那珂市額田に所在する。久慈川南岸の那珂台地が浸食され谷地が入り込んだ額田台地南側縁辺部に位置している。

県内最大規模の連郭式平山城である。南側を有ヶ池、西側を谷津に守られた曲輪Iを主郭とし、防御上の弱点である平地に向かって曲輪II、曲輪IIIと展開していく。この曲輪I～IIIを城郭の主要部とし、その周囲を囲むように外郭が配されている。外郭については、わずかな遺構しか現存していないが、その遺構が宿を示す字「本宿」などといった地区に見られることで、この城郭が宿を繩張に取り込んだ「懇構」であることが分かる。また、字柄目（搦手と見られる）といった地名も残ることから、城域が推定可能で、南北に約825m、東西に約1070mという広大な城域を持つ城郭である。城郭の主要部を見みると、曲輪Iは五角形に近い不整形な曲輪であり、東西約200m、南北約180mの広さがある。周囲を幅約20m、深さ約9mの巨大な堀が蛇行しながら巡っており、曲輪Iから横矢がかけられるような構造となっている。曲輪IIは曲輪Iの北から東側を囲うように配置され、東西幅約300m、南北幅最大約150mの規模がある。土塁は曲輪北側と東側に作られており、曲輪Iに面した側には存在しない。曲輪IIIは曲輪IIの北側に配され、東西幅約300m、南北幅最大約200mある。曲輪全体を堀が巡り、曲輪IIに面した側以外に土塁が作られている。（『那珂町史』・『改茨』）

建長年間（1249-56）佐竹5代義重の子義直が築城し、額田氏を称したとされているが、その当時の城は、現在の麟勝院の地だったともいわれる。のちに現在の地に城を構えたが、この佐竹系額田氏は5代義亮のときに山入の乱において山入氏方に加わり、応永30年（1423）佐竹義憲の攻撃を受けて滅亡した。その後、佐竹氏家臣の小野崎氏の一族小野崎通重が額田の地を与えられ、額田小野崎氏が成立する。この城を拠点として勢力を伸ばした額田小野崎氏は、佐竹氏の配下にありながら、独自性の強い有力な国衆として存在した。戦国期末の佐竹氏による額田小野崎氏攻めの際には、佐竹氏独力での額田城攻略が敵わず、豊臣政権の支援によってようやく落城した難攻不落の城と伝わる

（「額田城陥没之記」）。

（藍原）



かとうあねやかたあと
0188 加藤安房館跡 那珂市菅谷 現況：山林 別称：鷺内館

地図 30

加藤安房館跡は、那珂市菅谷字鷺内に所在し、四方を耕地で囲まれた標高 39.4m の微高地上をその城域とする。

全体として北方に向けて城郭が築まる構造となっている。主郭にあたる曲輪 I は一辺約 60m 四方のやや不整形な台形を呈している。この曲輪の堀はほぼ完存しており、堀の最大幅は約 6.2m ある。北辺の堀の中間にある折れや、内部に池の跡のような溝が残されているのが特徴的である。この主郭を中心とした輪郭式の構造で、合計 11 の曲輪が想定されている。城館の北東部に接する f 地点は溜池の跡であり、水利と関係があったことが考えられる。地域住民が「昔は堀を泳いだ」という話をもしていることから、この水を利用し、水堀として機能していた可能性がある。(『常中』3)

「水府志料」によれば、城主は加藤安房守であり、天正年中の戸穴の戦いで討死したという。(藍原)

加藤安房館跡縄張図 作図：藍原怜 原図：山川千博
(『常中』3より転載)



とむらじょうあと
0190 戸村城跡 那珂市戸 現況：山林、水田、畠地、宅地

地図 30



戸村城跡縄張図 須貝慎吾(『常中』5より転載)

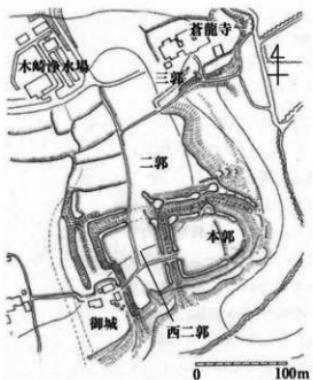
戸村城跡は、那珂川左岸の河岸段丘上に位置している。城内を水戸と下江戸を繋ぐ街道(県道 102 号線)と那珂川舟運の戸村河岸との結節点として栄えた宿場を取り込んだ「懇構」の城館である。

城郭の中心は北城・南城・御城と呼ばれる区域である。北城と南城を東西に区切る土塁と堀は城域内最大規模で、高低差約 5 m を測る。境界がはっきりしていることから、三つの曲輪はそれぞれ独立して形成されたものと考えることができる。

また北城の北側に位置する内宿・坊小屋、東側に隣接する下宿には土塁や堀あるいはその痕跡を確認することができ、「懇構」内が明確に区分されていた可能性を見ることができる。

戸村城は、はじめ秀郷流藤原氏の流れをくむ戸村氏が築いたとされるが、南北朝時代の「瓜連合戦」で南朝につき滅亡した。その後、佐竹氏 12 代義人の子である義後が戸村城に入ったことにより、佐竹氏が秋田移封となるまで佐竹系戸村氏の居城となった(『那珂町史』)。(藍原)

みなみきかいでじょうあと
0192 南酒出城跡 那珂市南酒出 現況：山林、畠地、宅地 地図 30



南酒出城跡縄張図 青木義一（『図茨』より転載）

南酒出城跡は、久慈川右岸の標高 20m、北・東・南を低地や浸食谷に囲まれた台地の端に位置する。

台地の先端部にある図中「本郭」がこの城郭の主郭である。東西の最大幅は約 90m、南北の最大幅は約 60m あり、不整形な長方形を呈している。曲輪の東側と南側は急斜面を活かした切岸になっている。一方、北側と西側は高さ約 3m の土塁と、幅約 15m、深さ約 6m の薙研堀で囲まれている。本郭の北側に二郭、三郭が作られているがそちらには遺構らしきものは確認できない。本郭の西側に設けられた西二郭には、幅約 10m・深さ約 4m の堀があり、本郭の堀と連続すると思われる。築城当初は本郭のみの単郭の城郭だったものが、各曲輪を拡張していくたとみられている（『改茨』）。

承久の乱の功によりこの地を得た佐竹秀義が築城し、南酒出氏を称したとされる（『那珂町史』）。このときの南酒出氏は、後に美濃へ移住するが、戦国期に

佐竹東家の義賢が居住し酒出氏を名乗り、佐竹本家の秋田移封まで使われた。（藍原）

きたきかいでじょうあと
0193 北酒出城跡 那珂市北酒出 現況：山林、畠地、宅地 地図 30

北酒出城跡は、那珂市北酒出字関内に所在する。

遺構は北部の断崖付近に残存している。「川崎図」ではこれを城郭の主要部と捉えて描かれているが、戦後すぐの航空写真を確認すると、その南方に I ~ III の堀の痕跡とみられる陰影が確認でき、こうしたソイルマークから曲輪の想定が可能である。おそらく駒形神社に隣接するこの区画が城郭の中心であり、北側の遺構は出城的な役割を持っていたと考えられる。

北酒出氏の居城とされる。北酒出氏は、佐竹秀義の三子助義（南酒出義茂の弟）が北酒出に居住し、北酒出八郎を称したことが始まりとされる。助義は承久の乱に際して美濃国に所領を得て移住し、美濃佐竹氏の祖となった（『那珂町史』）。（藍原）



北酒出城跡縄張図 五十嵐雄大 2022.5.28

ふくだなかつぼやかたあと
0195 福田中坪館跡 那珂市福田 現況：山林、畠地、宅地 別称：福田氏館 地図 30

福田中坪館跡は、那珂市福田に所在する。東西を谷状低地に挟まれた標高 34～35m の微高地上に位置している。

全体として城館北側の遺構の残存状況が良好である。主郭は東西約 80m、南北約 90m のほぼ正方形を呈している。南東部は開墾等で遺構が失われているが、本来は堀と土塁で囲まれていたと思われる。主郭北東部の遺構では、堀と土塁の高低差約 3m、堀の最大幅約 8m という規模を誇る。この主郭が想定されている。これらは北西方向に防衛意識が向いており、屏風状に折れた堀跡など特徴的な遺構を確認することができる（『常中』4）。館の南側には近世の金光寺跡や中世の觀音像が祀られている觀音堂がある。主郭を中心にして、大小様々な曲輪を配置し、さらに宗教施設を取り込むという、地域の有力者らしい館の構造といえる。

「福田氏由緒書上」によれば、武藏國住人福田藏人佐勝宗の子孫である福田和泉が福田村に「堀田」を築き住んだと伝わっている。16 世紀初頭の常陸国内の内乱においては、江戸氏と額田小野崎氏双方の影響を受けていた可能性が考えられる。（藍原）



中坪館跡縄張図 山川千博（『常中』4 より転載）

たかのしきかたあと
0196 高野氏館跡 那珂市菅谷 現況：畠地、公共施設地 別称：中宿東館 地図 30



高野氏館跡縄張図 横山真那美（『常中』3 より転載）

高野氏館跡は、那珂市菅谷のほぼ中心地で、標高 33～35m に所在する。館の北東から南西にかけて谷に囲まれた台地の先端に位置している平地城館である。

主郭とそれを外周する外郭によって構成される方形館であると考えられる。開発により遺構はほぼ現存していないが、主郭部分については発掘調査が行われており、東西 59.4m × 南北 68.2m の南北にやや長い長方形の曲輪だったことが分かっている。また、主郭の堀は調査中に堀底からの湧水が激しく、調査期間中に渴水することがなかったことから、本来は水堀であった可能性が考えられる。外郭についても、宅地となっているため遺構はほぼ失われている。一部が南東に張り出す形で現存しており、小規模な曲輪状の空間を形成しているが、館の出入り口や街道などを監視する役割があったと想定することもできる（『常中』3）。

「高野氏系図」によると、常陸国筑波郡下妻城主であった八田知家の孫：家貞が高野氏を称したとされている。しかし、系図には那珂市菅谷に移り住んだ時期については記されていない。元禄十四年大和田嘉衛門宛延命院末弟照度書状には、延命院の大檀那として高野氏の名が見られるため、高野氏がこの地の有力土豪の一人であったことは間違いないだろう。（藍原）

みやたかもののかみやかたあと
0197 宮田掃部助館跡 那珂市菅谷 現況：山林、水田、畠地、宅地 別称：高内館 地図31

那珂市菅谷字高内に所在する。東西の溜池によって灌漑された谷状低地（水田）に東・西・南の三方を囲まれた微高地状に立地している。

主郭と想定される曲輪Iは、東西約55m、南北約100mのほぼ長方形となっており、この曲輪Iを囲むように他の曲輪が配されている。曲輪Iの堀と土塁は2018年に発掘調査が行われている。その調査によれば、堀の形状は水堀として利用されることが多い「箱堀」であり、さらに水路としての機能を維持するような改修工事の痕跡も見つかっていることから、水利を意識した城郭であると考えられる。

「水府志料」によれば、城主は宮田掃部助と伝わる。日立市の宮田氏の系図には、宮田氏五代通豊の弟である通宗が掃部を名乗り、天正三年（1575）に菅谷に住んだとされている。（藍原）



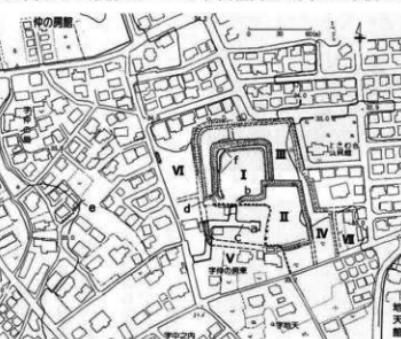
宮田掃部助館跡縄張図 作図：藍原怜 原図：山川千博（『常中』3より転載）

ぐんじなくごのかみやかたあと
0198 軍司筑後守館跡 那珂市菅谷 現況：宅地 別称：仲の房東館 地図31

軍司筑後守館跡は、那珂市菅谷字仲の房東に所在する。東西から谷状低地が入り込む標高33mの微高地上の平坦部に位置している。開発により遺構は現存していない。

主郭である曲輪Iは四辺が堀で囲まれており、土塁は南以外の三辺に設けられている。完全な正方形ではなく、堀に施された折れにより南部がやや不整形となっている。発掘調査時には、この不整形な南側につながる対岸に土壇状の高まりが確認されており、曲輪同士の間には木橋が架けられていた可能性が指摘されている。発掘調査では多数の土坑や柱穴、井戸跡などの生活の痕跡も検出されており、居館としての様相を表している。外郭部の堀や土塁は痕跡程度のものも多く、特定が難しいが、少なくとも7つの曲輪で構成されていたことが想定されている（『常中』3）。

「水府志料」によれば軍司筑後守が居住したとされる。「藤原性軍司氏系譜」では軍司氏は藤原冬嗣の三男良門の系譜を引き、佐竹氏の被官として活躍したことが伝えられている。（藍原）



軍司筑後守館跡縄張図 山川千博（『常中』3より転載）

ひらのやかたあと
0200 平野館跡 那珂市菅谷 現況：山林、水田、畠地、宅地、墓地 別称：寄居館 地図 31

平野館跡は那珂市菅谷字寄居に所在する。城の北・西・東の三方を低湿地に囲まれる半島状の微高地に立地している。城の南側には菅谷から那珂湊へ抜ける「湊街道」が通り、城の東側を水戸から額田へ抜ける「旧太田街道」が通っている。

半円状の内郭と、それを囲むように配された外郭からなり、現存する遺構から確認できる範囲だけでも、約 250m四方というかなり広大な城域を有していたことが分かる。現在は一部湮滅てしまっているが、川崎図からは、城郭南側の「湊街道」に城域の南東と南西の角が張り出すよう描かれている。それぞれの角は櫓台状に表現されており、この城郭が意図的に街道に干渉していたことが想定される（『常中』3）。

交通の掌握とともに軍事的な側面も強く持った城郭であると考えられる。

「平野氏系図」によれば、清和源氏源満政の系譜に連なり、平野冠者を称した重季を始祖としている。宗重の代に東国に入り、その後応永年間末の江戸通房の水戸城攻めに際して江戸氏家臣になったと伝わる。（藍原）



平野館跡縄張図 作図：市川大暉 原図：山川千博（『常中』3より転載）

じてんやかたあと
0212 地天館跡 那珂市菅谷 現況：山林、畠地、宅地 別称：飛田氏館 地図 31

地天館跡は那珂市菅谷字地天に所在する。城域の東と南が細長い谷上の水田地帯であり、この二本の谷の合流地点に突き出す先端部に立地する。

曲輪Ⅰを主郭として、その周囲に少なくとも 10 の曲輪が存在している。ただし、主郭と周囲の曲輪との関連性が不明確であったり、各曲輪の形状もすべて不整形であったりと、非常に不規則な縄張となっている。曲輪Ⅷ～Xにかけては発掘調査が行われており、土抗・方形窓穴・地下式抗などの生活に関わる遺構が数多く検出された。この際の出土遺物の主年代は 14～15 世紀のものであり、二次被熱を受けている物が多いことから、この時期に城館が戦火を被った跡と推測されている。また、堀や曲輪に数度の改変が見られ、中世末～近世初頭の遺物も出土していることから、15～16 世紀にかけて改築しながら使用され続けたために、不規則な縄張を持ったと考えられる（『常中』3）。

「水府志料」では、城主は飛田右角通であり、江戸氏に仕え数代にわたり居住したとしているが、飛田氏は別の家伝もあるため、複数の家に分かれていた可能性がある。（藍原）



地天館跡縄張図 山川千博（『常中』3より転載）

はらつばやかたあと
0215 原坪館跡 那珂市福田 現況：山林、畠地、宅地

地図 30

原坪館跡は那珂市福田に所在する。東西を谷状低地に挟まれた平坦地に位置している。古代官道に面していたと考えられ、陸路との関係を考慮した城館の可能性がある。

主郭である曲輪 Iを中心とし、合計 13 の曲輪が想定されている。曲輪 Iおよび II は後世の区割りにも見ることができ、『土地法典』では、この堀が水路として利用されていたことが分かる。現況は空堀だが、中世には水堀であった可能性もある。全体的には東・西・南の三方向に対して遺構の残存が良好である。城館のすぐ南側を古代官道に比定されている道が通っているが、この道との関係に意識が向いていたと考えることもできよう（『常中』4）。

「高橋家系図」によれば、永禄年中に常陸国に来て佐竹氏に仕えた高橋出羽守をこの地での祖とし、その子孫とみられる高橋土佐という人物の城主伝承が「水府志料」に確認できる。（藍原）



原坪館跡縄張図 上岡史拓（『常中』4より転載）

かどべやかたあと
0228 門部館跡 那珂市門部 現況：山林、畠地、宅地

地図 30

門部館跡は那珂市門部に所在する。城館は久慈川右岸の河岸段丘上に位置している。城域内には瓜連道（県道 104 号線）が通っている。

段丘上面が主要な曲輪となっており、中心的な曲輪 I の西辺である土壘 a は高さ約 2m あり、また II 内部には中世のものと思われる五輪塔が二基確認されている。この城館の注目すべき点は段丘の斜面にある。曲輪 I・II の北側斜面には、横堀が東西に向かって延びており、二重土壘と堀を併せ持つ堅牢な構造である。さら

に、堅堀と腰曲輪・帯曲輪を多用しており、山城に見られるような築城プランであり興味深い（『常中』6）。

『那珂郡木崎村郷土誌』に、片岡美作守の城主伝承が伝えられている。詳細は不明だが、佐竹家臣に片岡氏があり、近隣の酒出地区に片岡性の家臣名が確認できることから、この一族が居住していたと考えられる。（藍原）



門部館跡縄張図 須貝慎吾（『常中』6より転載）

こやばやかたあと
0229 小屋場館跡 那珂市門部 現況：山林、畠地、宅地

地図 30

小屋場館跡は那珂市門部に所在する。久慈川から那珂市木崎地区に向けて入り込んだ谷に囲まれた舌状台地の先端部にある。

曲輪としては 3 つ確認されており、台地先端部およびその斜面に遺構がある。最大の曲輪であり、中心と思われる曲輪 I には、その西辺として長さ約 50m、幅約 3m の土塁が築かれており、その西側には幅約 3m、深さ約 2m の堀が巡るこの域最大の遺構である。I の北側に隣接する曲輪 II にも西辺に高さ約 2m、幅約 2m の土塁が築かれており、曲輪 I の土塁とあわせて城館西側への防衛を意識した構造となっていると考えられる。東側は斜面であるため、西側の防衛に力を入れることができたということも考えられる。曲輪 II 北側の斜面にある腰曲輪や曲輪 III は対岸からの侵入を監視するなどの役割があったのだろうか（『常中』6）。

城主は不明だが、「水府志料」にもあるとおり、源義家の陣所伝承が伝わっている。（藍原）



小屋場館跡縄張図 大山恒（『常中』6より転載）

りゅうがいじょうあと
0230 要害城跡 那珂市門部 現況：山林、畠地、宅地

地図 30

要害城は那珂市門部に所在する。久慈川右岸の河岸段丘上に位置している。南北に細長い遺構を持ち、瓜連道（県道 104 号線）を遮るように占地している。リュウガイの俗称を確認できる。5 つの曲輪により構成される城館として指摘されており、曲輪 I・IV・V 共通の西辺はもとは一つなぎの土塁だったと想定できるため、街道を封鎖し管理する役割を持った城館であったと考えられる。曲輪 III には古墳があるが、その東側には虎口状の遺構が確認されており、外敵の誘因路とその監視の櫓台としての役割が古墳に求められていた可能性もある（『常中』6）。

『那珂郡木崎村郷土誌』によれば、長彈正の館跡であるとされるが、詳細は不明であり、「水府志料」では誰の居所か不明としている。なお、城域からは応永年間の銘が入った銅鏡遺物が出土している。（藍原）

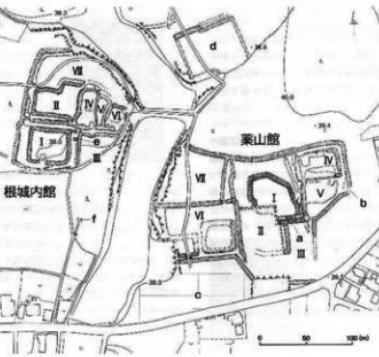


要害城跡縄張図 山田あづさ（『常中』6より転載）

ねぎうちやかたあと くすりやまやかたあと
0234 根城内館跡・0233 薬山館跡 那珂市鴻巣 現況:山林、畠地ほか 地図 30

根城内館跡と薬山館跡はともに那珂市鴻巣の又三池という溜池を東西に挟んで所在している。

根城内館の主郭は曲輪 I と考えられる。四辺を堀で囲まれており、その外周に帶曲輪が設けられていて、北側については土塁となっている。曲輪 I と II の間は三重堀となっており、虎口や土橋等も見られないことから、それぞれ独立した曲輪と考えられる。曲輪 IV～VI は溜池造成の影響等により痕跡が分かりにくいが、中世の土師質土器が表採でき、この城館が中世由来のものであることを示している。薬山館は又三溜池の東岸に位置する。曲輪 I が主郭であり、その周間に曲輪 II～VII を配置している。根城内館が曲輪間の関係性が不明確だったのに対し、薬山館は土橋や通路状遺構によって曲輪間の関連性を見いだすことができる。堀の隨所に折れや陥穴状の深掘が見られるなど、複雑な遺構が多い。城主伝承等は不明だが、又三溜池の近くで大量の古銭が出土したという地域住民の話がある。古銭の年代は不明だが、城館に関連する埋納銭だった可能性もある(『常中』5)。(藍原)

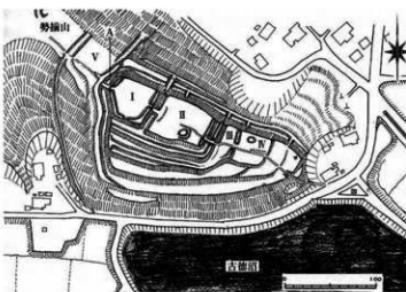


根城内館跡・薬山館跡縄張図 山川千博(『常中』5より転載)

ことくじょうあと
0239 古徳城跡 那珂市古徳 現況:山林 別称:丁字の城 地図 30

古徳城跡は、古徳沼に面した「勢掘山」という山にある。山の地形を活かした連郭式の城郭であり、曲輪 I を主郭として合計 5 個の曲輪で構成されている。各曲輪の境界ははっきりしており、特に曲輪 I と II の間の土塁と堀、曲輪 II と III の間の二重堀などは明確に確認できる。また、特徴として曲輪 I・II の南側の斜面には横堀が多用されており、一部三重堀のようになっている部分もある。城郭北側が急斜面であることにに対して、南側は緩やかであるために、より厳重な守りを意識したものと考えられる(『改茨』)。

「古徳永正記」によれば、永和元年(1375)に大掾義幹の次男民部大輔義純が築城し、古徳氏を名乗ったとされている。古徳氏は後に江戸氏の家臣となつたが、江戸氏の内乱に際して江戸氏に攻め込まれ落城し、古徳一族も滅亡したという。(藍原)



古徳城跡縄張図 余湖浩一『因茨』より転載)

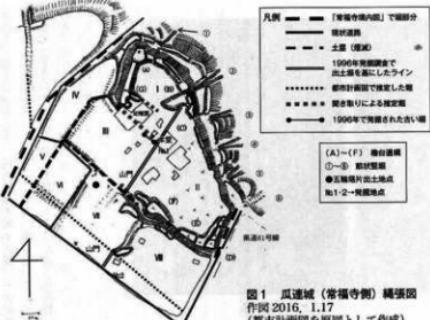
うりづらじょうあと
0238 瓜連城跡 那珂市瓜連 現況：山林、宅地、寺院境内地、墓地

地図 25

瓜連城跡は、那珂市瓜連に所在する。久慈川南岸の那珂台地縁辺に位置しており、現在、城郭の中心は常福寺の境内になっている。現状では常福寺本堂を中心とした単郭のようだが、「川崎図」や発掘調査の成果などから、この境内地に 8 つの曲輪があり、全体としては宿を含む広大な縄張であったことが指摘されている（五十嵐雄大 2016）。曲輪 I が城郭の最高所にあたり、主郭と想定され、この曲輪から連続するように II ～ VIII の曲輪が配置されている。曲輪 I 北西の櫓台（A）とその外周の堀との高低差は最大約 17m、幅 3m という巨大さを誇っている。また、城郭北東の斜面には、一段降りて帶曲輪が作られており、この帶曲輪の外周にも土塁を設けて、ここからまた斜面となる。さらに斜面には 6 本の堅堀が確認できており、帶曲輪と併せて斜面側からの攻撃に備えたものと考えられる。これら遺構の複雑さが城郭の堅固さを物語っている。

瓜連城は現在の常福寺を中心とした城郭であるが、出城と思われる遺構が指摘されているので、あわせて紹介する。「川崎図」でも「出丸」と記載される曲輪であり、瓜連字蔵前に所在する。東西約 52m、南北約 60m の台形の曲輪であり、曲輪の北東部に土塁、北側に堀の痕跡を確認することができます。この曲輪が瓜連城の外郭の一部と考えられるため、宿を取り込んだ広大な縄張であったと想定できる。

瓜連城は南北朝時代の延元元年（建武三、1336）に起きた「瓜連合戦」の舞台として知られる。この合戦は、瓜連城に拠点を置き南朝の勢力拡大を図っていた楠木正家を、北朝方の佐竹貞義らが攻め落としたものである。南北朝の合戦は一方が地域の交通の要衝を占領することによって起きるものであり、都市として発展しつつあった瓜連も、まさにそうした争点となったことが指摘されている。宿を取り込んだ縄張が形成されるようになったこともそうした城郭の立地から頷ける。以上の通り、瓜連城は長く南北朝の城として認識されていたが、近年では常福寺の変遷と併せて、15～16 世紀までその利用が認められるとしている。「瓜連合戦」ののち、瓜連の地を得た常福寺は、瓜連宿の火災を経て一度瓜連城跡に遷座したと指摘されているが、応永 23 年（1416）の「上杉禪秀の乱」に際してこの地を離れることになった。常福寺が去った跡に陣所が置かれたとみることができる文書が残っており、現在残る大規模な城郭遺構はこの時期に作られたのではないかと想定されている（五十嵐雄大 2016）。（藍原）



瓜連城跡縄張図 五十嵐雄大（『常中』4 より転載）

おしろやまじょうあと
0240 御城山城跡 北茨城市関本町関本上 現況：山林 別称：背踏城、名古曾館 地図7

福島県との県境付近、北茨城市立関本小中学校から里根川を挟み北西の台地南端部に所在する。城内は3つの曲輪に分かれ、主郭であるIの東にIIを配し、両曲輪の北に堀切を挟みIIIを置く。当城は舌状に突き出した台地の南端部に位置しており、東・南・西の三方向を崖と蛇行する里根川によって守られる。台地継ぎであるIIIの北側は、二重の堀と三重の土塁で守備しており、城内へは、一度堀底へと降りて堀内部を歩き、各曲輪に入る構造と思われる。堀底からIIIに上がる途中の小空間aは耕形虎口状で、特筆すべき遺構である。

詳細な歴史は不明で、南北朝期に境小三郎が築いた城と伝わるが、遺構は後世のものと思われる。陸奥国と常陸国の境目付近に位置しており、佐竹氏や岩城氏等に関連する勢力によるものかもしれない。道路を挟み東側に館山城が位置し、いわき方面に続く道を、両城で挟み監視する形となっている。(山川)



御城山城跡構造図 余湖浩一 2004.10
(『改次』より転載)

くるまじょうあと
0241 車城跡 北茨城市華川町車 現況：施設敷地ほか 別称：群馬城、牛淵城 地図11

常磐自動車道北茨城ICの北約2km、根古屋川北岸の標高約57mの丘陵上に位置する。城域は南北に長く、八幡神社が建つIを主郭に、その南にII～VIの曲輪が細長く続く。各曲輪の規模は大きいが、周囲に土塁はほとんど築かれていない。Iの南には坂虎口が残り、IIとの間の堀底に井戸跡がある。Iの北側の小曲輪に二重の土塁がみられる。Iの北東方向には4本の尾根が突き出し、北東の沢を監視している。

当城は南北朝時代に車氏により築かれ、文明17年(1485)に岩城常隆により落城した後、常隆の弟好間隆景を配したという(『新編常陸国誌』)。好間氏は天正2年(1574)と同5年(1577)の2度にわたり佐竹氏に反乱し、車城は佐竹氏方の軍勢によって攻められた(秋田藩家蔵文書20・千秋文庫佐竹文書)。天正2年には一度城が破却されたことが確認される(『東州雑記』)。(山川)



車城跡構造図 余湖浩一 2004.10
(『改次』より転載)

たてやまじょうあと
0242 館山城跡 北茨城市関本町関本上 現況：山林 別称：名古曾城

地図 7

福島県との県境付近、北茨城市立関本小中学校北の標高約81m、比高役65mの山上に位置する。城域は東西約200m・南北約400mおよび、西を唐藤川、南を里根川に守られる立地である。山頂のIを主郭とし、その西側にIIをはじめとする数段の帯曲輪・腰曲輪が下っていく。Iの北の尾根には、大規模な堀切aと、その後に横堀で守られるほぼ自然地形のままの空間IIIを配す。Iの南側の尾根は、堀切b及び数段の平場群IVを配し、平場Vの方面へと下っていく。IIの西下中腹にも、一定の広さを持つ空間VIがあり、城域の可能性が高い。

詳細な歴史は不明だが、県道を挟みすぐ西側には御城山城が所在し、両城でいわき方面へと続く谷筋を監視する役割を果たしていたと思われる。
(山川)

館山城跡縄張図 青木義一 2012.4.22

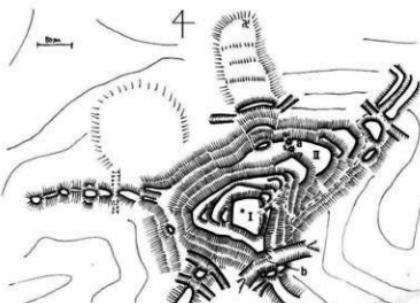


やまとやじょうあと
0243 山小屋城跡 北茨城市関本町富士ヶ丘 現況：山林、寺社境内地

地図 6

県道27号線の里根川を挟み南岸、常磐自動車道のトンネルが南北に通過する地点のすぐ西の標高約120mの山上に位置する。頂部のIを主郭とし、その周りを数段の帯曲輪によって守備する。Iの北東方向にはIIをはじめとする大小の曲輪が下り、aの位置には、IIから西の曲輪へと降りる虎口の遺構が残る。城の背後にあたるIの南東方向は、幅約6m・Iからの比高約10mの大きな堀切bで尾根を遮断している。他にも隨所に堀切や堅堀・横堀などを配し、各曲輪の切岸の高さも見事で、遺構の残り具合も良く見応えのある城郭遺跡である。

岩城氏の一族白土長門守の居城と伝わり(「常陸永正記」)、現在主郭にある大塚神社は慶長年間に白土氏が再興したものという。また山小屋氏の出身地であるという(『新編常陸国誌』)。(山川)



山小屋城跡縄張図 五十嵐雄大 2015.12

ゆのあみじょうあと
0244 湯之網城跡 北茨城市関南町神岡下 現況：山林、寺社境内地

地図 7

県道154号線の南側、江戸上川を挟み南岸の標高約80mの山上に位置する。御室神社の社殿が建つIを主郭とし、その周囲を帶曲輪IIが囲む。このI・IIの周囲の切岸は見応えがある。その北東方向にIIIがあり、さらに北東の尾根続きにIVがあり、現在は参道整備で埋没が進んでいるが、本来各曲輪間はa・bなどの堀切によって仕切られていたと思われる。IIIの北側、曲輪Vとの間にcの位置には城道から城内へと入る虎口の遺構が残っている。一方、I・IIの南東は幅約10m・高さ約6mの城内最大の堀切で遮断され、その南岸にもVIの曲輪群を配している。北麓の平場には「根古屋」地名が残り、居館跡あるいは駐屯地などで使用されたと思われる。

岩城氏の家臣である大高新左衛門の居城と伝わる（「常陸永正記」）。（山川）



湯之網城跡縄張図 五十嵐雄大 2015.12

しまざきじょうあと
0245 島崎城跡 北茨城市中郷町松井 現況：山林、畠地 別称：巴城

地図 11

北茨城ICの約1.5km南、大北川南岸の標高約30mの丘陵北端部に位置する。東西約120m・南北約200mの城域を持ち、I～IIIまで3つの曲輪に分かれ、それぞれに曲輪名称に由来する中城・南城・北城の地名が残る。Iの中城が主郭で、現在IIとの間を区画する土塁・堀は失われている。Iの南部には、かつての土塁の一部である御塚神社が建つ高さ約4mの塚aが残り、その東側bには堀の痕跡もみられる。IとIII（北城）との間の堀cは現存する。IIIの北側にも小曲輪があったが、近年斜面の工事により失われた。

多気氏累代の居城と伝わり（「松岡地理誌」）、また龍子山城の出城で大塚氏の家臣滝対馬が城代だったともいう（「常陸永正記」など）。南東方約600mの低地には城館地名の密集地があり、当城との関連がうかがわれる。（山川）

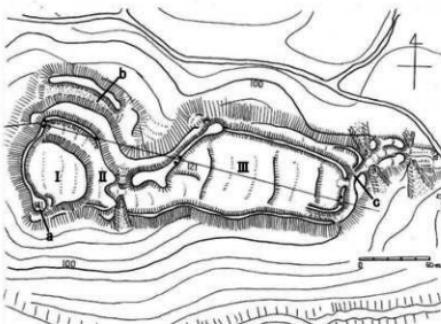


島崎城跡縄張図 青木義一 2015.2.11

いしおかじょうあと
0246 石岡城跡 北茨城市中郷町石岡 現況:山林 別称:リウガイ古屋敷 地図 11

大北川の北岸、東京発電株式会社石岡第二発電所の西側裏の標高約141mの山上に所在する。東西400m・南北90mと東西に長い城域をもち、西端部の最高所Iに主郭を置き、東に向かいII・IIIの曲輪が下る。曲輪内は東に向かい緩やかに傾斜しており、平坦面はほとんど未整地のまま使用していたと思われる。IからIIIまで、高さ1~2mの低い土塁が城内をほぼ全周するのが特徴で、Iの南西部aの位置では櫓台状の土壇となる。当城の西・南は大北川の切り立つ崖で要害性が高いが、北側が比較的緩やかで、この方面に数段の帯曲輪・腰曲輪や、横堀bなどを配置している。北東端のcには登城路の痕跡が残り、この方向が大手と思われる。

大塚氏の本拠龍子山城の支城と思われ、「松岡地理誌」は戦国時代末に大塚親成の弟極楽寺空岸が築いたものと推測している。(山川)



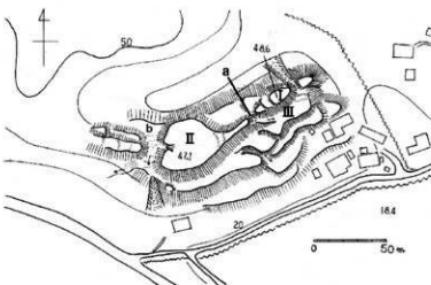
石岡城跡縄張図 青木義一 2015.2.11

すがまたじょうあと
0247 菅股城跡 北茨城市磯原町大塚 現況:山林 地図 11

西明寺公民館の東方約400m、東西に延びる谷筋の北側、標高約48mの丘陵南端部に位置する。「松岡地理誌」所載の図で「天神林」と呼ばれるIの平場を主郭とし、その西に堀切aを経て、30mほどの削り残しの土塁の先に、同書に「二重平居館跡」と記される約40m四方の曲輪IIがある。IIの西部には虎口が残り、

堀切bの底から登る構造である。I・IIの2つの曲輪を中心には複数の帯曲輪・腰曲輪が展開する。Iの南直下のIIIは「毘沙門平」と呼ばれ、かつて毘沙門堂があったという(同前掲)。

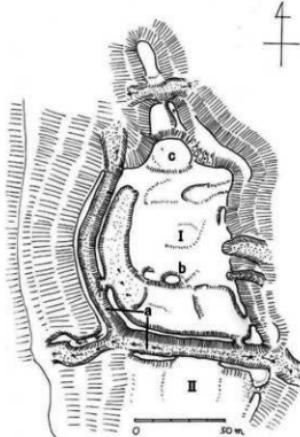
当城は鎌倉時代以来の大塚氏の居城で、後に同氏が龍子山城へ移ってからは、その一族が居住したと伝わる(『新編常陸國誌』ほか)。(山川)



菅股城跡縄張図 青木義一 2015.2.11

ごんげんやまやかたあと
0248 権現山館跡 北茨城市中郷町小野矢指 現況：山林 別称：小野矢指館 地図 11

JR 常磐線南中郷駅の北西約 500m、県道 299 号線から塙田川を挟み南岸の、標高約 36m の丘陵北端部に位置する。東西約 80m・南北約 200m の南北に長い縄張りで、主郭である I と南の II の 2 曲輪で構成される。I は南および西邊に高さ 1m ほどの土塁をもち、その外周に深さ 2~3m の堀切・横堀が一体化した堀 a が L 字に廻っている。a の堀底は、東端・西端・北端部の 3か所で堅堀となり斜面を下る。また、土塁の内側にも L 字型の窪地があり、さらにその内側にも土塁の残欠のような土壇 b があることから、本来 I の南・西邊は二重の土塁と堀で守られていた可能性がある。また、I の北端 c はコブ状に北に張り出しており、ここにかつて王塙権現社があった。同社は戦国期に桜井合戦で戦死した、龍子山城主大塙梅翁を祀ったものと伝わる。当城には大塙氏の家臣柴田源次郎が居したと伝わる（「松岡地理誌」）。（山川）

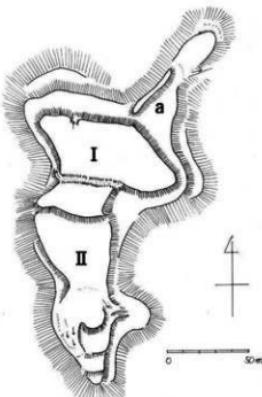


権現山館跡縄張図 青木義一 2019.11.15

こやまやかたあと
0249 小山館跡 北茨城市中郷町粟野 現況：山林 地図 11

権現山館から塙田川沿いの低地を挟み北側約 1km、標高約 41m の丘陵南端に位置する。東・南・西に谷津が入り込み、天然の堀として機能する。東西最大約 100m・南北約 170m の城域をもち、主郭である I と、その南の一段低い平場 II の 2 曲輪を中心に、周囲に数段の帯曲輪・腰曲輪を配している。現状では曲輪の周間に土塁や堀はほとんど見られず、切岸を主体とする防御構造である。わずかに I の北東部に土塁 a が残る。各曲輪内は比較的平坦で面積も広く、高い居住性を感じられる。「松岡地理誌」所載の図によれば、I 南東側の、帯曲輪の縁辺が内湾する沢部分に登城路が描かれている。

天正 6 年 (1578) に下野国舟生から移った舟生長門守が、龍子山城主大塙氏の家臣となりここに居したと伝わる（「松岡地理誌」）。（山川）



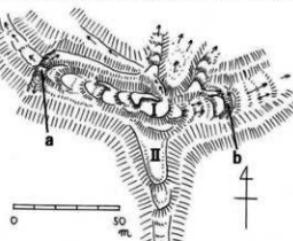
小山館跡縄張図 青木義一 2019.11.15

さいまるじょうあと
0253 才丸城跡 北茨城市関本町才丸 現況：山林

地図 6

才丸地区の南方、県道 27 号線の東の標高約 429m の山上に所在する。北の才丸集落へと向かう南北道と、西の谷筋に分岐する三叉路を押さえている。当城はこの調査で新たに見つけた城郭で、過去に『日本城郭全集③』が「大丸山の南麓にあり、城の三方は絶壁で自然の要害である。遺構は現存していない。」と紹介した才丸城とは別城郭だろう。同書では別名を「猿ヶ城」としており、治承 4 年（1180）に佐竹秀義が逃げ込んだと伝わる花園城の別名を混同している可能性がある。いずれにせよ大丸山の所在が不明なため、才丸地内で現に遺構が残る当城を才丸城に比定しておく。頂部に主郭である I を置き、東西の尾根上に複数の小曲輪群と堀切 a・b などの遺構を配置する。街道に面した北西側から登る道が大手と思われる。I の南の尾根上には、ある程度の広さを確保した曲輪 II がある。

才丸城は佐竹一族である西丸と泉守義宗の居城と伝わる。付近には城郭関連地名として、城下・城ノ山・滝ノ上・城根・滝平が残る。（山川）



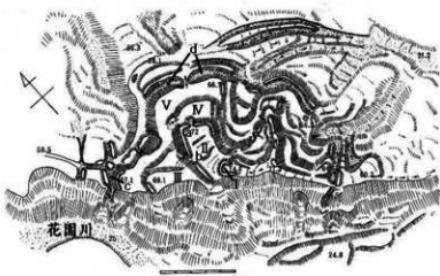
才丸城跡縄張図 青木義一 2019.12.14

くるまいすどうじょうあと
0254 車伊豆堂城跡 北茨城市華川町車 現況：山林

地図 11

車城跡から根小屋川を挟み西約 500m の標高約 74m の山上に所在する。東西約 500m、南北約 150m の城域をもち、遺構の規模の大きさが当城の特徴である。最高所の I を主郭とし、その西下に北側に傾斜する長方形の曲輪 II がある。II は土壘が四周し、北側に虎口 a、西側に坂虎口 b をもつ。II の北側・西側には、III～V の曲輪、堀切 c、大規模な横堀 d などが残る。その他、V の北東の谷筋を守る複数の長大な堅堀群や、I の北東の尾根を削り残した巨大な土壘は圧巻である。丘陵の東端部には切岸に守られる 3～4 段の平場群 VI があり、ここから対岸の車城を臨む。

「車記」は、永正・大永期に車闇彦（夕斎）が「出堂」（小字伊豆堂か）に新城を構えたとする。また長久保赤水「他領下相田村中妻村水戸御領豊田村水論所図」は、車城の根小屋川西岸に「出堂山 開斎隱居城跡」を描く。これらの記録から、当城跡の主要部（I～V）が車氏の新城、根小屋川に面した VI が車氏の隠居所と推測される。（山川）



車伊豆堂城跡縄張図（左）・東端部構造縄張図（右）
青木義一・山川千博・五十嵐雄大 2022.8.20



せきもとなかあわのじょうあと
0259 関本中粟野城跡 北茨城市関本町関本中 現況：山林 別称：箕の屋敷 地図 7

関本中地内のJR常磐線の約300m西側、菅丞寺跡の北西の標高約60mの山上にある。東西に長い尾根の中央部を、幅約11m、深さ約10mの大堀切で断ち切り、その東西にI・IIの曲輪群が展開する。主郭であるIの北辺には基底部幅10m・高さ3mを越える大土塁が残り、北西・南西・南東の尾根を小規模な曲輪が下っていく。このうち北西の尾根の先には大規模な堀切がみられ、その先の曲輪IIIからは、北西麓に向かい小規模な曲輪や豊土塁・堀切など遺構が下っていく。また、Iから大堀切を越えて東側には東西に長い曲輪群IIがあり、I同様に北辺に大規模な土塁が残る。IIの北西および北東の尾根にも遺構が残る。

Iの南側中腹には室町期からこの地に住むと伝わる民家があり、城主の可能性がある。同所はIから南西・南東方向に延び下る2つの尾根上遺構に囲み守られ、家伝によればその形状から「箕の屋敷」と呼称される。また源義家が兵を休めた地とも伝わる。(山川)

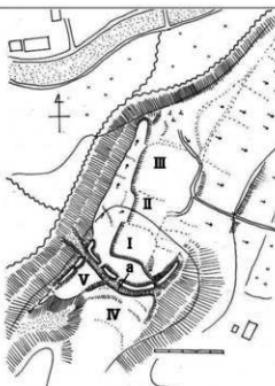


関本中粟野城跡縄張図 青木義一・山川千博 2023.1.29

にしだてやしきあと
0262 西館屋敷跡 高萩市上手綱 現況：山林、畑地 別称：西垂屋敷 地図 17

上手綱地内を南北に抜ける「お手まき通り」の東側、関根前川南岸の標高約44mの丘陵北端部に位置する。東西約100m・南北約200mの城域をもつが、北側大半が畑により大きく削られ失われている。主郭であるIには、南西部から南東部にかけて約60mにわたり土塁と幅約6mの横堀aが残る。土塁は大きく、東辺で曲輪内からの最大高は約5mを測る。「松岡地理誌」所載の図によれば、本来はIの北側にII・IIIの2曲輪があったようである。また、Iの南側にも堀aを挟みIV・Vの2曲輪があり、Vの遺構は良好である。城の北端部には墓地があり、古い五輪塔が残る。

「西館」という名称から、龍子山城の西を守る城の意があると思われる。城主は不明で、応永年間(1394-1427)に長宏寺を開基した平但馬四郎氏之やそれ以前の植田小四郎の居城と推測されている(『高萩市史上』)。(山川)



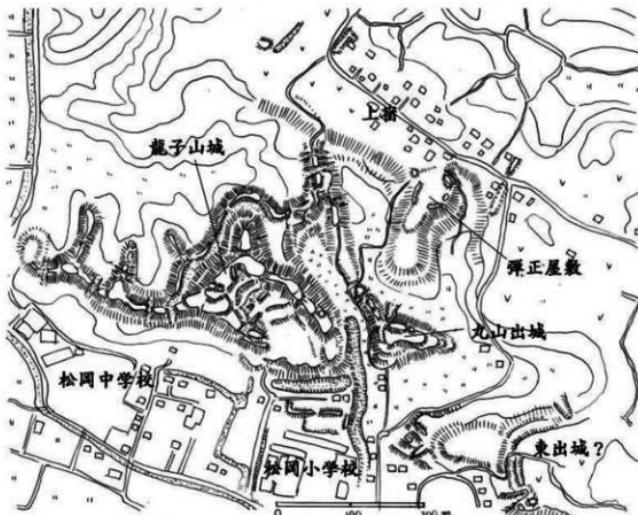
西館屋敷跡縄張図 青木義一 2020.1.12

たつこやまじょうあと
0260 龍子山城跡と周辺城館 高萩市下手綱 現況：山林ほか 別称：松岡城 地図 17

龍子山城跡は関根川の北岸、高萩市立松岡小学校・松岡中学校の裏山一帯に所在する。頂部のIと周辺の細尾根上を中心に、広範囲に大小多くの曲輪が展開する。とくにIの北側の切岸と、その下方にある横堀aの規模は圧巻である。

龍子山城の周辺には、関連施設として「丸山」「彈正屋舎」「上宿」などがあった（「松岡地理誌」）。丸山(0271)は別名を「一心防山」といい、その構造は江戸時代においても防衛上の機密にあたるため「秘して記さず」とされる（同前）。龍子山城から谷を隔てた東に位置し、東西約60m・南北約20mの曲輪を、土塁・堀切・腰曲輪などで守る。また、龍子山城の北側台地上に位置する上宿(0272)の集落にも、道路沿いに土塁が残る。この道路は龍子山城に最も近い地点でL字に折れており、城との関係が考えられる。おそらく中世の龍子山城は上宿を城下とし、北を大手とする構造だったのだろう。松岡小学校付近で行われた発掘調査によれば、城の南麓は中世にはそれほど使用されなかつたとされ、上宿を城下としていた証左といえる。上宿の北約600m地点には「城戸場」の地名が残り、ここに宿の出入口が設定されていたと思われる。さらに、上宿から南東に突き出した台地先端部に弾正屋敷跡(0273)があり、曲輪の周囲に土塁を残している。弾正屋敷は丸山とともに南の谷筋を監視し、また宿の東側の入り口を守備する構造である。

龍子山城は、中世後期に大塚氏が菅原城から移り、慶長元年（1596）に折木（福島県）へ移るまで本拠とした。慶長7年（1602）に戸沢政盛が入り松岡城と改称した。元和8年（1622）に政盛は出羽へ国替えとなり松岡城は水戸藩に引き継がれ附家老中山信正に預けられた。（山川）



龍子山城跡と周辺城郭遺跡図 青木義一 2019.12.29 (余湖浩一氏の繩張図を基に作成)

なかのだてあと
0263 中の館跡と周辺城館 高萩市上君田 現況：山林 別称：寺山館 地図 10

中の館跡は、高萩市の北西部、県道 22 号線と 227 号線との交差点の北西の山上に所在する。中の館跡を中心、上君田・下君田地内の山間部には、約 2 km 四方の狭い範囲に 5 つの山城群が分布するため、まとめて紹介したい。

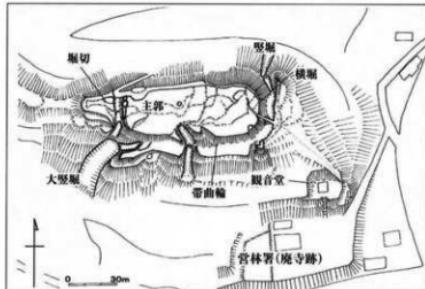
中の館跡は山頂に東西約 80m・南北約 30m の主郭を置き、その周囲を帶曲輪や横堀・堅堀・堀切で守備している。北東部で横堀の深さは 10m にも達する。宇野六郎利仲の居城と伝わる（「松岡地理誌」）。

内の草古館跡(0264)は中の館跡の北東約 750m、上君田簡易郵便局東の山上にあり、北東部を林道により失っているが主郭と二重堀切が残る。

田の草古館跡(0265)は中の館跡の南東約 900m の尾根北端部に位置し、数段の平場と堀切が残る。

明神山古館跡(0266)は中の館跡の南西約 550m、十殿神社裏山にあり、中心部の数段の平場を横堀と帶曲輪で守る。

小川崎古館跡(0267)は、内の草古館跡のさらに北東 700m の山上に位置し、宇野利仲が戦の際に立て篭ったという伝承を残す。（山川）



①寺山館縦張図 (作図：高橋宏和、2017年1月20日作成、以下同)

中の館跡縦張図 高橋宏和 2017.1.20
(以下の5城全て『続茨』より転載)

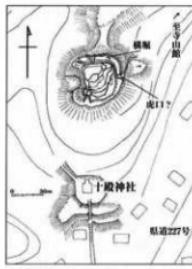


②内の草古館縦張図 (作図：高橋宏和)



③田の草古館跡 (作図：高橋宏和)

田の草古館跡
高橋宏和 2017.1.20



④明神山古館跡 (作図：高橋宏和)

明神山古館跡縦張図
高橋宏和 2017.1.20



⑤小川崎古館跡縦張図 (作図：高橋宏和)

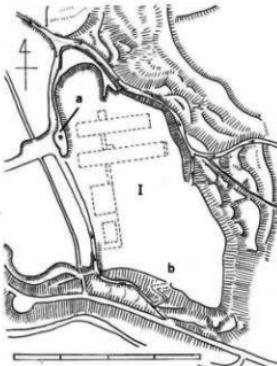
小川崎古館跡縦張図
高橋宏和 2017.1.20

あらかわじょうあと
0268 安良川城跡 高萩市安良川 現況：山林、小学校 別称：塙古館

地図 17

高萩市文化会館の西側、標高約30mの市立高萩小学校の敷地にかつて所在した。学校建設で台地上の遺構は消滅したが、小学校東側の斜面にみえる何段もの平場はかつての腰曲輪の遺構と思われる。「松岡地理誌」所載の図で旧状を知ることができ、それによれば、台地上に80間（約145m）×50間（約91m）の区画があり（右図I）、さらにその中に長方形の「本丸」が置かれ、北辺・西辺を土塁と堀で囲まれていたという（現在地不明）。「松岡地理誌」の図と現地形とはそれほど整合せず、そこに描かれた構造が現在のどこに該当するかを把握しにくい。aには小学校北西端を囲むように高所の地形がみえるが、遺構の一部かどうか判断できない。「松岡地理誌」の図には南麓から台地に登るためのつづら折れの大手道が描かれ、右図のbあたりに当たると思われる。

鎌倉期に宇佐美祐茂の築城と伝わり、その後も宇佐美氏累代の居城になったという。寛正4年（1464）・天文17年（1548）の朝香神社棟札に大塚氏とともに宇佐美氏の名がみえる。（山川）



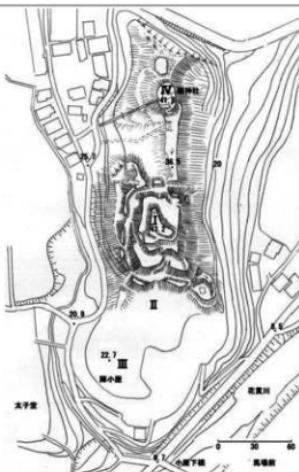
安良川城跡縄張図 青木義一 2022.12

しまなじょうあと
0269 島名城跡 高萩市島名 現況：山林、宅地 別称：小屋古館

地図 17

島名東集会所の西約350m、花貫川北岸の標高約44mの台地南端部に位置する。城内は大きくI～IVの4つの区画に分かれる。標高約43mのIが当城の主要部で、数段の曲輪の周囲を大規模な横堀と土塁が囲む。「松岡地理誌」所載の図によれば、Iの南側下方にはII・IIIがあり、その間は二重の堀で仕切られている。そのうち「陣小屋」地名を残すIIIでは、開発に伴い発掘調査がなされ、堀跡等の遺構が検出されるとともに、IIIの曲輪が14世紀代に構築された後、15世紀後半以降には墓域に変化したことが明らかになった。Iの北側の鏡神社が建つIVは、神域であるとともに物見の役割もあったと思われる。

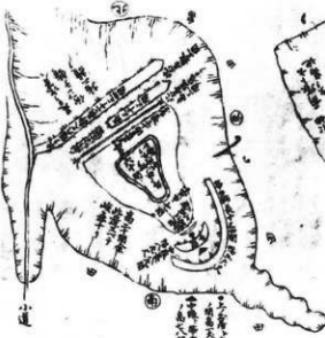
鏡神社の文明16年（1484）の棟札に、大塚隆成・常成父子の名が記されることから、当城は龍子山城の出城の一つだったと思われる。大塚氏は山直小野崎氏との合戦に際し、当城に陣取り伏兵を置いたという（「松岡地理誌」）。（山川） 島名城跡縄張図 山川千博



りゅうがいふるやしきあと
0274 リウガイ古屋鋪跡 高萩市下手綱 現況：山林 別称：下手綱砦 地図 17

小島田地の南東端、関根川右岸の低地に突き出した標高約42mの丘陵先端部にかつて所在した。現在は小島田地の造成により遺構が消滅しているが、「松岡地理誌」所載の図から旧状が判明する。主郭は長軸約110m・底辺約55mの逆三角形状で、その南側に帶曲輪を配し、台地続きである主郭北側を土塁と二重の堀切で遮断する構造であった。麓から主郭までの比高は20間(約36m)あったといい、北以外の三方向を崖と低地で守られていた。当城の北東には、沢を挟み館ノ坊館跡が隣接する。

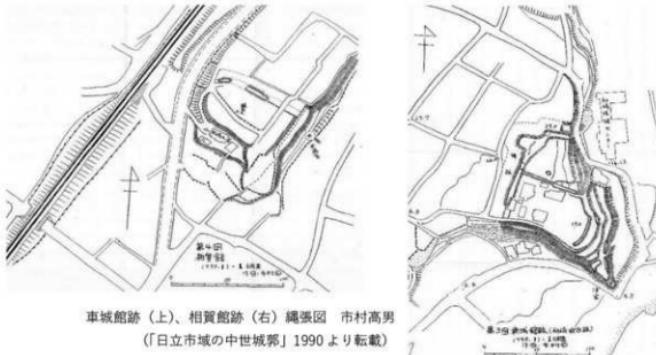
造成に先立ち昭和50年(1975)に実施した発掘調査では、室町期の陶器片(常滑・古瀬戸など)、永楽通宝、石臼片などが出土した。龍子山城の支城と伝わり、芳賀主水が城主という(『新編常陸国誌』)。(山川)



リウガイ古屋鋪跡 「松岡地理誌」所載図
(北茨城市史編さん委員会編 1984より転載)

しんじょうたなあと
0277 新城館跡 日立市相賀町 現況：山林、宅地 別称：会瀬館(相賀館)の一部 地図 27

日立駅南約600m、会瀬漁港を南に見る海に突き出た標高25mの丘に新城館が、その西南約300m、会瀬漁港の西の標高29mの丘上に車城館(0278)がある。二つの館の間に坊の上館(0297)があったとされるが、現在、遺構は確認できない。元々、三館は一体の城館であり、小野崎氏が館主といい、「会瀬館」や「相賀館」と総称された。新城館は台地先端部を断ち切る形で堀を掘り、その内側に土塁が築かれている。北西の一角には櫓台とみられる張り出し部が存在する。区画内部の小さな土塁は、幕末に設置された初崎台場造成時のものと考えられる。(青木)



車城館跡(左)、相賀館跡(右) 機張図 市村高男
(日立市域の中世城郭) 1990より転載)

おおくぼじょうあと
0280 大窪城跡と周辺城館 日立市大久保町 現況：山林、畠地、宅地ほか 地図 26

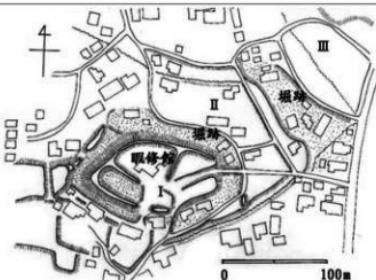
JR 常磐線常陸多賀駅の西 1.5km、大窪城跡には暇修館が建つ。また、付近の正伝寺西の山に大窪天神山城（0279）、一部が多賀高田配水場になっている大窪愛宕山城（0281）がある。

大窪城は戦国時代後期 16 世紀に地域支配の拠点として築かれた平城であり、暇修館が建つ本郭は東西約 100m、南北約 70m の規模を持ち、高さ 2~3 m の土塁が覆う。西側に深さ 8 m、幅 20 m の大きい堀がある。水堀が北側から南側を取り巻いていたという。二郭、三郭は宅地となり、湮滅している。

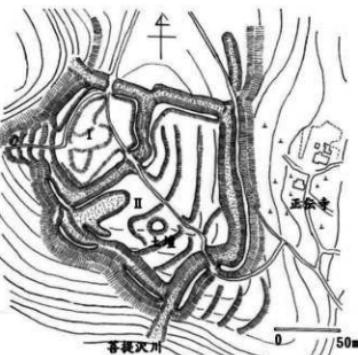
天神山城は、標高 95m の山にあり、城域は直径 300m。南側、西側は菩提沢川の侵食谷、緩斜面を横堀で仕切り、東西に 2 つの曲輪を並べる。幅 7~9 m、深さ 4 m、総延長約 450 m の横堀が巡る。

愛宕山城は菩提沢川を挟み、天神山城の南側の尾根にある。尾根を 4 本の堀で区切って 3 つの曲輪があったが、東半分は配水場が建てられ、遺構は失われている。堀と土塁は古墳を利用して構築されるが、曲輪内は未整備である。戦国時代には暫く程度にしか使われていなかったと思われる。

平安末期、常陸大掾平忠幹の九男宗幹が愛宕山に城を構え、応永年間（1394~1428）奥州石川の石川詮光の三男茂光を養子に迎えた頃、大窪氏を名乗り、城を天神山に移したという。大窪氏は佐竹氏の重臣として活躍し、佐竹氏の秋田移封で廃城となる。（青木）



大窪城跡縄張図 青木義一『改茨』より転載)



天神山城跡縄張図 青木義一『改茨』より転載)



愛宕山城跡縄張図 青木義一『改茨』より転載)

※縄張調査日はいずれも 2005.2.1

0283 要害城跡 日立市国分町 現況：宅地、企業施設地 別名：孫沢館 地図 27

太平洋を望む標高約 22m の崖上にある。日立製作所要害クラブの地が本郭であり、70m × 50m の広さを持ち、堀、土塁が残存する。西側が二郭、北側が三郭であるが、道路や病院となり湮滅している。

孫沢氏の城と言われ、岩城氏の使者が佐竹氏に挨拶に向かう際の逗留場として整備したというが、この付近の塩田管理、海上監視の城であろう。(青木)



要害城跡復元縄張図 青木義一 2004.4.3 (『日立市史』を参考)

0286 久慈城跡 日立市久慈町 現況：山林、宅地 地図 31

国道 245 号線、茂宮橋北東側の比高 20m の丘先端部が城跡である。かつては久慈川が東下を流れ、茂宮川が南下で久慈川に合流していた。

本郭が良く残り南北 100m、東西 50m の広さを持つが、他は宅地等になっている。西側に横堀が約 200m 続き、北側の堀は深さ 6m、幅 15m の規模を持つ。

永禄 5 年(1562)宇佐美三九郎が城主の時、相馬盛胤の攻撃を受け、未完成状態であったため落城。その後、佐竹氏が奪還し、慶長年間には北義憲が城主であったという。廢城は佐竹氏の秋田移封の時という。水軍城であり、久慈川の水運と太平洋沿岸の海運を管理し、物資の集積基地でもあったと推定される。(青木)



久慈城跡縄張図 青木義一 2004.2.6 (『改仄』より転載)

くしがたじょうあと
0287 櫛形城跡 日立市十王町友部 現況：山林

地図 17

JR 常磐線十王駅の北西約 1 km の標高 84 m の山にある。主郭は南北約 100 m、東西約 70 m の歪んだ四角形をしており、南側以外を深さ約 3 m、幅約 7 m の横堀が巡り、東西に坂虎口がある。南東側に小曲輪があるが基本的には単郭構造である。

嘉元元年（1303-06）に宍戸家時により築かれたと言うが確証はない。建武 3 年（1336）北の大塚氏に備えるため、佐竹氏が小野崎通胤をこの地に置いたが、後に山尾城に移り、ここを出城として使ったという。（青木）



櫛形城跡縄張図 余湖浩一 2004.10
（『改茨』より転載）

やまとおじょうあと
0288 山尾城跡 日立市十王町友部 現況：中学校敷地 別名：山直城、山能城 地図 17

日立市立十王中学校が建つ標高 55 m、比高約 30 m の山にある。中学校建設で遺構はほとんど失われてしまい周間に堀、土塁、腰曲輪等が一部残存する。本来は 5 つの曲輪からなり、南北約 300 m、東西最大約 300 m の規模があった。

応安 3 年（1300）小野崎通春が居城とし、以後、慶長 7 年（1602）秋田に去るまで佐竹氏重臣、山尾小野崎氏の本城であり、太平洋沿岸の拠点城郭であった。（青木）



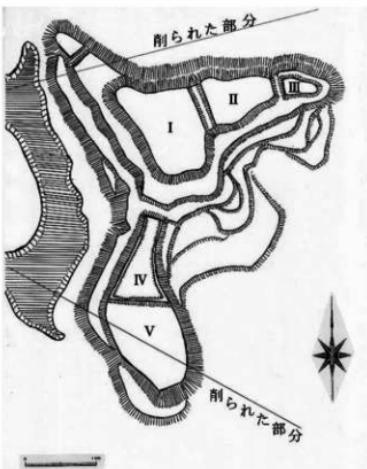
山尾跡縄張図 余湖浩一 2004.10（『改茨』より転載）

ともべじょうあと
0289 友部城跡 日立市十王町友部 現況：山林、宅地、公園 別称：古館

地図 17

JR 常磐線十王駅の南西に隣接する標高 53m の丘にあり、現在「城の丘公園」になっている。Y 字型をし、5 つの曲輪があつたというが、公園化、道路敷設、貯水池造成にため大きく改変を受けていると思われる。

小野崎氏の古い居館であったといい「古館」と呼ばれるが、山尾城の出城として戦国末期まで使われていたと思われる。(青木)



友部城跡縄張図 余湖浩一
2004.10 (『改訂』より転載)

じょうのうちだいじょうあと
0290 城の内台城跡 日立市十王町友部 現況：山林

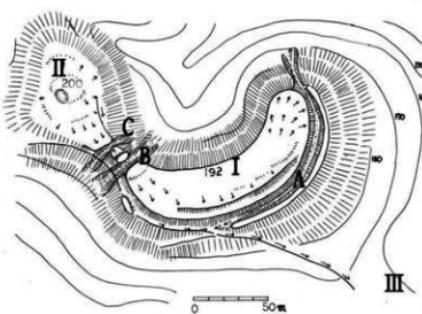
地図 17

常磐自動車道日立北 IC と高萩 IC 間のほぼ中間部の西、東に太平洋を望む標高 192m の山にある。

主郭はバナナ型をし、東西約 120m、南北約 30m の規模を持ち、南側から東側にかけて深さは約 4m、幅約 8m、総延長約 100m の長大な横堀 A が弧状に構築される。主郭北西側は 2 本の堀切 B・C で遮断する。

城の歴史等は分からぬ。全体的に陣城のような感じである。陣城とすれば南東に見える山尾小野崎氏の本拠、山尾城を攻める役目が想定されるが、住民の避難場所や軍事の宿城だった可能性もある。

(青木)



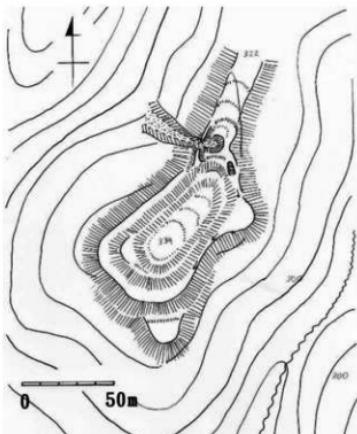
城の内台城跡縄張図 青木義一 2020.1.19 (『茨 3』より転載)

いりしけんやかたあと
0296 入四間館跡 日立市入四間町 現況：山林

地図 21

御岩神社西約 1.2km にある運動公園北の標高 336m、比高約 80m の山にある。70m × 20m の楕円形をしているが、周囲を帯曲輪が一周するが、その内側は自然地形であり、山に続く北を堀切で区画する。

古風な城であり、南北朝の騒乱で没落した関氏らがこの地に土着して詰めの城として整備したものと推定される。麓が城郭地名である「竹ノ内」といい、居館とされる場所がある。(青木)



入四間館跡縄張図 青木義一
2013.11.23

ようがいさんじょうあと
0298 要害山城跡 日立市城南町、助川町 現況：山林

地図 22

茨城県立日立工業高校の西約 500m、標高 193m の要害山にある。北東に延びる尾根末端部に中世蓼沼館の遺構を利用して幕末に築かれた助川海防城がある。その蓼沼館の詰の城である。

城は周囲が急斜面という地形を利用し、頂上部を数条の堀で区画した簡素なものであり、西側の山地に続く鉄塔の建つ尾根付近に堀切があったと推定される。

小野崎氏系の介川（助川）氏が城主と言われる。(青木)



要害山城跡縄張図 青木義一 2022.3.21

たかはらみょうけんやかたあと
0299 高原妙見館跡 日立市十王町高原 現況：山林、寺社境内地

地図 16

山尾城から西に約5km十王川を遡った高原地区の標高は291m、比高約85mの妙見社が建つ山にある。

単郭構造で山頂部は25m×15mほどの楕円型をしており、北東側以外を高さ約1mの土塁が覆う。虎口が南側に開き登城路が下り、下に4段の腰曲輪が展開する。

歴史等は分からぬが、山尾城の支城であり、十王川上流方面を監視する城であろう。
(青木)



高原妙見館跡縄張図 青木義一 2016.1.10
(『茨3』より転載)

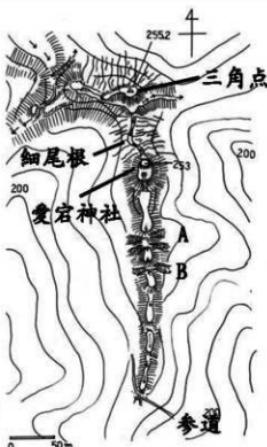
みせあたごやかたあと
0300 水瀬愛宕館跡 日立市東河内町 現況：山林、寺社境内地

地図 21

里川の谷沿い、国の登録文化財「東京発電 中里発電所」西側の標高253mの愛宕神社の建つ山にある。

尾根上の神社参道に沿って曲輪が展開し、堀切跡A・Bが確認される。神社がある地が主郭であり20m×15mほどの広さがある。

歴史等は分からぬが、小規模な城であり、里川沿いの交通監視と里川沿いの狼煙リレーの中繼点の一つである可能性があろう。(青木)



水瀬愛宕館跡縄張図 青木義一 2019.2.16
(『茨3』より転載)

石神城は、標高 19m、比高 15m の久慈川河岸段丘（那珂台地）の舌状台地に立地する。城の東側は、城郭が機能していた時期の久慈川は、台地に向け大きく蛇行しており、要害の地形を一層強固にしていた。石神城の城域は広く、東西 680m、南北 430m の規模で I～V の曲輪からなる。曲輪 I・II が「本城」、曲輪 III が「城の内」、曲輪 IV が「下宿」、「岡前」、曲輪 V は「冬小路」、「西下宿」、「堀之内」と城郭に関する地名が多く残る。城の平面構造は土塁と堀を備え、並列する曲輪 I と曲輪 II を核に周囲は幅約 10m の薙研堀と土塁で囲まれた二重構造である。中心部の曲輪 I・III は、広い平坦地を形成し、曲輪 I の東端部には「遠見城」と呼ばれる曲輪 II があり、物見櫓が置かれた場所と推測される。石神城は公園整備事業に伴い発掘調査が 1989・90 年に実施されている。15 世紀～16 世紀末を主とする遺構・遺物が出土し、曲輪 III で屈曲した城内通路と通路を境に建物跡と井戸がセットで出土し、城内における施設配置などがわかっている。主郭部の曲輪 III より西側の IV・V は平坦で広大な台地であり、曲輪 V 西側から南北の土塁と堀を配し台地を分断していた。現在は小字「堀之内」に南北の土塁が一部残存している。このように城郭と城下を広く囲い込む空間は「惣構え」にあるが、曲輪 V の大字は「石神内宿」と石神城から北西に離れた地に「石神外宿」に分けられるため、曲輪 V は主に家臣団の居住域と推定される。

築城者は、石神小野崎氏とされる。小野崎氏は藤原秀郷を祖とし、佐竹氏家臣小野崎氏本宗家の道胤の子道春が本家を離ぎ、建徳元年（1370）に居城を山尾城（日立市十王）に移し、兄弟の通房が石神氏、通業が額田氏を名乗っている。石神城の築城年代は諸説あるが、永享 4 年（1432）、足利持氏感状に「常州石上城」の名が確認できることから（阿保文書）、この時期には石神城が存在していたと考えられる。以後、慶長 7 年（1602）の佐竹氏の秋田移封まで石神小野崎氏の居城となっている。（東海村教育委員会 1992、峰岸・齋藤 2012）（須貝）



石神城跡縄張図 山川千博・須貝慎吾

まさきじょうあと
0301 真崎城跡 東海村村松 現況：山林、畑地 別称：天神山城 地図 31

真崎城は、旧真崎浦と細浦に張り出した、標高約19m、比高約17mの細長い台地端部に所在する。細長い半島状に築かれている特徴から、台地を切断するように大規模な堀切で曲輪間を区切った構造を持つ。主郭部は、浦側の台地東端の曲輪I・IIにあたり、曲輪II下の微高地は「館岸」の字名であることから、当時は、船着き場であったことが想定される。曲輪IIとIIIは、土橋で接続しており曲輪IIIが真崎城で一番広い面積を持つ。さらに、尾根側のIIIとIV間やIV側には、大規模な堀切がみられ、こうした構造は、陸地からのルートを遮断し、真崎浦から船を利用しないと城内には入れない、浦に囲まれた独自の構造がみえる。

鎌倉時代の佐竹氏当主義重の三男岡田義澄の次男義連が真崎浦に進出して真崎城を築いたと伝わる（『新編常陸国誌』）。戦国期の真崎氏は、佐竹の乱の終焉に真崎城から近い「村松塩窯」（村松白根遺跡か）を押領している。さらに文禄元～2年（1592-93）における朝鮮出兵では、真崎義伊は船奉行として従軍している（『東海村史』）。文禄4年（1595）知行替が行われ、真崎の地は、佐竹東家義久の知行地に移る。

（須貝）



真崎城跡縄張図 須貝慎吾

しらかたじょうあと
0303 白方城跡 東海村白方 現況：宅地、寺社境内地 地図 31

白方城は、石神城跡の東に1km、県道284号線沿いに所在し、現在は豊受皇大神宮の境内となる。主郭Iは東西40m、南北60mの広さで台地に続く南側から西側にかけて高さ約3mの土壁が築かれている。北側から南東にかけては崖面となっている。現在、社務所の地が曲輪IIであり、南西側に虎口と土壁と堀があったと想定される。遺構は残っていないが堀が南東側斜面部で堅堀になる部分が残存している。現在確認できる遺構は神社周辺のみで、南西側にも域城が広がっていた可能性がある。西に約300mの白方コミュニケーションセンターの地に「三札城」があったと伝わり、2020年の発掘調査では幅約7m、深さ2.7mの堀が検出しており、一連の城跡であった可能性も示唆される。

築城は平安末期、大掾氏系吉田氏一族の白方氏によると伝わる。南北朝期、白方氏は勢力を弱めていた南朝方の大掾氏についたため、白方氏も歴史上から名前が見えなくなってくる。戦国期は、久慈川下流域の管理権を持っていた石神小野崎氏の城に取り込まれていったと想定される。（『東海村史 通史編』）（須貝）



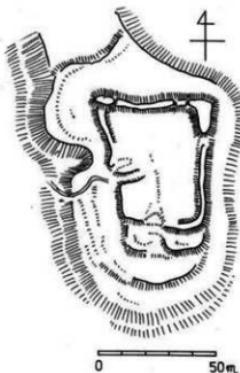
白方城跡縄張図 青木義一

おくやまやかたあと
0305 奥山館跡 ひたちなか市足崎 現況：山林 別称：奥山城、足崎地頭館 地図 31

県道 31 号線南側の谷津が複雑に発達している標高 32.4 m の丘が館跡である。

約 50m 四方の広さの主郭の東側と北側を高さ約 1 m 程度の土塁が覆い、西側、南側は主郭より若干低く段郭や平場になっている単純な構造である。

鎌倉時代、この地を領した大掾氏系の吉田氏一族の多良崎氏の居館といわれる。南北朝の騒乱で南朝方に付いた大掾氏一族は大きく勢力を減退させ、多良崎氏も没落し、この地を去り、廃館になったという。多良崎城が詰め城であったようである。(青木)



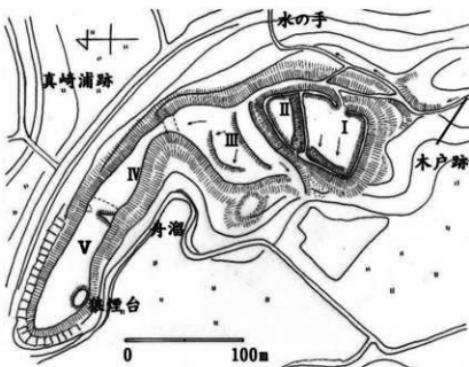
奥山館跡縄張図 青木義一 2019.3.21
(『茨3』より転載)

たらさきじょうあと
0306 多良崎城跡 ひたちなか市足崎 現況：山林、公園 別称：足崎城ほか 地図 31

旧真崎浦南岸に突き出た比高 25m の半島状台地「太郎崎」の先端部に位置し城址公園として管理される。4 つの曲輪からなり全長約 500m、幅は最大 100m の規模を持ち、遺構は完存、西側に舟溜りがあった。

鎌倉時代末期、常陸大掾吉田太郎広幹の三男里幹、通称多良崎三郎が築城したとされる。多良崎氏は南北朝期、南朝に味方して没落。その後、江戸通重の次男平沢通村の子孫、足立五郎左衛門通義、又五郎通定が城主となり、代々足崎氏を名乗った。天正 18 年（1590）常陸統一を目指す佐竹氏に攻略され落城し、廃城となった。

真崎浦の水運管理、緊急時の詰めの城であったと推定される。(青木)



多良崎城跡縄張図 青木義一 2016.2.5 (『改茨』より転載)

しみずやかたあと
0307 清水館跡 ひたちなか市高野 現況：山林、畠地 別称：清水城、源衛門屋敷 地図 31

旧真崎浦の奥部、谷津が複雑に入り組んだ標高 30m の台地突端部に位置する。西側以外 3 方向が谷津に面する台地東端に曲輪 I を置き、台地続きの西側に曲輪 II を置き、一辺約 150m の三角形をしていたと推定される。現在、遺構の多くは湮滅しているが、曲輪 I の西側に高さ約 3m の土塁の北側半分が残存している。この土塁は東に折れ、曲輪 I の北側から東側を覆う。

1500 年頃の築城と推定され、額田小野崎の家臣、清水氏が城主だったといふ。額田小野崎氏滅亡後、清水但馬守正重は佐竹氏の家臣となり、佐竹氏の秋田移封時に正重の次男が秋田に移り、長男正永がこの地で帰農し、子孫が続く。(青木)



清水館跡縄張図 高橋宏和（『続茨』より転載）

かつくらじょうあと
0308 勝倉城跡 ひたちなか市勝倉 現況：小学校敷地 別称：勝倉館 地図 37

南に那珂川を見下ろす比高 20m、標高 23m のひたちなか市立勝倉小学校が建つ台地先端部が城跡である。現在、遺構は富士神社が建つ土塁の一部が残るに過ぎないが、戦後間もない頃までに校庭の位置に堀と土塁があり、本郭は約 100m 四方の規模があったと推定される。南西端の古墳が物見台と言われる。県道 63 号線は堀跡であり、防衛省勝倉官舎の地が外郭といい、城は武田溜付近までに及ぶ広大な城域を持っていったと推定される。

鎌倉時代初期、大掾一族が築城したと伝わるが、詳細は不明。江戸氏の水戸城奪取後は家臣の飯島氏が城主になったが、天正 18 年（1590）佐竹氏の江戸氏攻撃で落城し、廃城となったという。武田溜による台地下の水田の灌漑権を管理するとともに、那珂川の渡しや河川港の管理も行っていたと思われる。（青木）



勝倉城跡復元縄張図 青木義一 2019.12.28（『茨 3』より転載）

こやまじょうあと
0309 小山城跡 ひたちなか市高野 現況：山林 別称：小山館

地図 31

真崎浦南岸の標高 31m の台地先端部付近に位置する。館のある台地の東西は侵食された谷津になつており、西側の谷津対岸に清水城がある。

単郭の城であり、東西最大 70m、南北 90m 程度の大きさを持ち、歪んだ 5 角形をしている。遺構はほぼ完存状態で全周に土塁を持つが、かつて内部が畠として使われていたため堀は埋められ、土塁は崩され規模は小さくなっている。

城の来歴については不明である。真崎浦の入り江を背にした要害性も併せ持つ土豪の居館であろう。
(青木)



小山城跡縄張図 青木義一 2016.3.12
(『続茨』より転載)

なかねじょうあと
0310 中根城跡 ひたちなか市中根 現況：山林、畠地、宅地

地図 37

中根小学校の南西
約 600m、中丸川の
低地を望む標高 22
m、比高約 15m の台
地突端部にある。

3 つの曲輪からな
り、北西側の本郭は
100 m × 70 m の台形
状であり、西側以外
の三方を土塁が覆い、
さらに外側は帯
曲輪が覆う。南東側
の曲輪 II との間には
堀がある。曲輪 II は
約 50 m 四方の広さを



中根城跡縄張図 余湖浩一（『改茨』より転載）

有し宅地となっている。曲輪 II 南東側の堀は湮滅している。さらに外側には曲輪 III が存在してい
たというが湮滅している。佐竹氏家臣の中根氏の城と伝わる。(青木)

しのわきわやかたあと
0319 篠根沢館跡 ひたちなか市佐和 現況：畠地、工場用地

地図 31

真崎浦最奥部の城館である。西約 500m に国道 6 号線が通る。北側以外を真崎浦から延びる谷津が入り、北側のみが台地につながる。館の標高は 32.4m、谷津部からの比高は約 15m である。館跡は工業団地用地となり、遺構は湮滅し農地等になっている。東西約 200m、南北約 300m の規模を持つ大型館だったようである。

館の歴史は分からず。東約 600m に佐和要害城が存在するのでペアの城郭であったかもしれない。佐和要害城は遺構から推定し、戦国前期から中期頃のものと思われるのでこの館もその時期のものかもしれない。(青木)



点線が堀・土塁が存在した位置

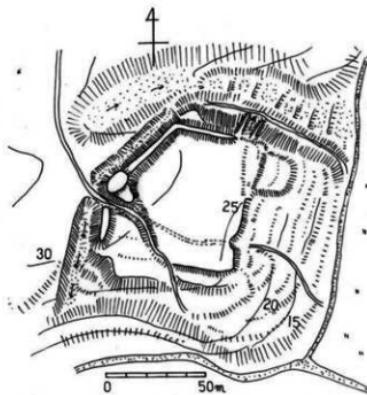
篠根沢館跡縄張図 青木義一 2019.3.26 (『茨3』より転載)

ゆうがいじょうあと
0320 雄害城跡 ひたちなか市佐和 現況：山林、畠地 別名：要害城、雄外城 地図 31

東側にさわの杜団地、南側に柏野団地、県立佐和高校がある台地から谷津を挟んだ対岸の標高 31.5m の台地突端にある。

西側の台地続き部を堀と土塁で遮断しただけの単純な形式であり、曲輪内部は本来は自然地形であったという。

城主等は不明である。西の篠根沢館の詰めの城、または付近住民の緊急時の避難城の可能性がある。(青木)



雄害城跡縄張図 青木義一 2019.3.21 (『茨3』より転載)

かねあげじょうあと
0322 金上城跡 ひたちなか市金上 現況：山林、畠地、寺社境内地 別称：金上館 地図 37

那珂川を南に望む標高 22m、比高約 20m の金上台地の南縁部に位置し、東の谷津部に金上溜がある。先端部が内城山と言い本郭である。二郭側には土塁と深い堀がある。二郭に熊野神社が建ち、外城山と言う。約 70m 四方の広さがあり、北側を土塁が覆う。

城主等については不明であるが、江戸氏家臣の城であったと推定される。なお、北側には金上台地を横断する 2 本の長堀が存在したという。(青木)

金上城跡復元図 余湖 浩一 2004.11
(『改茨』より転載)



えだかわじょうあと
0323 枝川城跡 ひたちなか市枝川 現況：宅地 別称：枝川館 地図 36

水戸城の北東約 1.5km、那珂川の北岸、ひたちなか市立枝川小学校付近の微高地にあった平城であり、遺構は湮滅している。小学校北側が主郭である。東西約 330m、南北約 120m の長方形をしており、堀跡が道路跡として残る。

水戸城を奪取した江戸通房が応永 33 年(1466)一子通弘に築かせた。以後、子孫が枝川氏を名乗りこの城を管理したといふ。天正 18 年(1590)佐竹氏の江戸氏攻撃時に落城したといふ。

水戸城の東を守る役目とともに那珂川の渡し、河川港を併設し那珂川の水運も管理していたと思われる。本来の城の姿は、方形単郭の城ではなく、主郭の周囲に曲輪を配置した輪郭式の径約 500m の城域を持つ平城であったと想定される。(青木)



枝川城跡復元図 青木義一 2000.1.4 (『茨 3』より転載)

ふかもうちやかたあと
0325 深茂内館跡 ひたちなか市足崎 現況：山林、畠地、宅地、寺社境内地

地図 31

谷津が複数に入り組んだ標高 30~35m の比較的起伏が緩やかな畠地と宅地になっている台地にある。一辺約 80~100m の四方の方形館であったらしいが、南西端に土塁残存部の一部が確認できるだけである。外郭があつたらしいが湮滅している。

室町時代初頭、大掾氏系多良崎氏没落後、江戸氏として復活した那珂氏一族の足立五郎左衛門が築いた館と推定される。戦国末期までは使われていたかは不明である。照沼氏（戦国時代は寺沼氏）として照沼館に移った可能性もある。（青木）



深茂内館跡縹張図 青木義一 2019.3.21 (『茨 3』より転載)

あさがねやかたあと
0333 尼ヶ祢館跡 ひたちなか市部田野 現況：山林、畠地 別称：尼ヶ祢遺跡 地図 37

国道 245 号線が台地から中丸川の低地に下る地点の西側台地上に尼ヶ祢館があった。

館の主郭部は畠となって湮滅しているが、谷津を隔てて西側の尾根状台地先端部付近に出城の遺構が残存する。しかし、規模は小さく、物見程度のものである。

この館に関わる史料は確認できないが、戦国時代、この地付近は江戸氏の領土であり、江戸氏の家臣が館主であったと思われる。（青木）



尼ヶ祢館（出城）跡縹張図 青木義一
2006.3.26 (『茨 3』より転載)